

令和5年度

第55回 全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)

第59回 東京都小中学校環境教育研究発表会

21世紀「環境の世紀」への提言

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

— 環境教育によって育む学力と環境保全意識 —



日時 令和6年1月26日(金) 13時30分 ~ 16時45分

会場 エコルとごし 3F多目的スペース 東京都品川区豊町2-1-30

対面・オンライン同時開催(後日期間限定録画配信)

主催 全国小中学校環境教育研究会 東京都小中学校環境教育研究会

後援 文部科学省 環境省 東京都教育委員会

全国連合小学校長会 全日本中学校長会 東京都公立小学校長会

東京都中学校長会 日本ESD学会 日本環境教育学会

ESD活動支援センター 関東地方ESD活動支援センター

表紙・裏表紙の絵画ポスター

令和5年度 第26回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール受賞作品

表表紙の絵画

◆会長賞

中学校の部 千葉県 流山市立南部中学校 2年 古川 芽衣

裏表紙の絵画

■会長賞

小学校の部 京都市立嵐山東小学校 3年 久保山 咲穂

主 催：全国小中学校環境教育研究会

後 援：文部科学省 / 環境省 / 公益財団法人日本環境協会

協 賛：株式会社みずほフィナンシャルグループ

明治安田生命保険相互会社

丸紅株式会社

積水化学工業株式会社

目 次

目次	1
大会次第	2
挨拶 全国小中学校環境教育研究会 会長	関口 寿也 4
挨拶 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 専門官	麻田 卓哉 様 5
挨拶 環境省大臣官房総合政策課 環境教育推進室長	東岡 礼治 様 6

口頭発表の部

- 1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進
～環境教育によって育む学力と環境保全意識～
東京都小中学校環境教育研究会 会長 箱崎 高之
研究部長 鈴木 元..... 8
- 2 持続可能な社会づくりに向けて、自分の考えをもって、行動し、表現・発信する児童生徒の育成
～世界自然遺産の島 奄美の自然・文化を生かし SDGs を目指す環境教育～
鹿児島県大島郡宇検村立安室小中学校 校長 中村 正治
教 諭 岩切 敏彦.....18
- 3 河川・水教育で広げるアクティブ・ラーニング
～機関庫の川から学ぶ自分達の生活と自然環境のつながり～
北海道帯広市立豊成小学校 校長 平野 司
主幹教諭 河村晋一郎.....28

誌上発表の部

- 1 「地域とともにある学校づくり」の実現に向けて
～ESDの取組への可能性を探る～
神奈川県厚木市立毛利台小学校 校長 山田 香.....39
 - 2 地域の特色を生かした環境教育の推進
～河川環境学習（3・4年生）を中心に～
宮城県気仙沼市立面瀬小学校 校長 佐藤祐美子
河川教育担当 大内 哲夫.....46
 - 3 海と人のつながりから持続可能な未来社会を考える子どもたち
～教育課程特例校の特設領域「海と生きる探究活動」を通して～
宮城県気仙沼市立鹿折小学校 校長 小野寺裕史.....56
 - 4 すがおの「ひと・もの・こと」と関わり、郷土を愛し、郷土を守る力を育てる総合的な学習の時間
福岡県北九州市すがお小学校 校長 島田 剛.....64
 - 5 ESDを主軸とする中学校3年間を通した環境教育カリキュラム
～「確かな学力や生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒」の育成を目指して～
長野県山ノ内町立山ノ内中学校 校長 山口 近
研究主任 島田 俊哉.....74
- 全国小中学校環境教育研究会 沿革史82
大会宣言96

大会次第

日 時 令和6年1月26日(金) 13時30分～16時45分
会 場 エコルとごし 3F多目的スペース (東京都品川区豊町2-1-30)
対面・オンライン同時開催(後日期間限定録画配信)

司会・進行 事務局 坂野真貴子

- 1 開会挨拶 全国小中学校環境教育研究会 会長 関口 寿也
- 2 来賓祝辞 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 専門官 麻田 卓哉 様
環境省 大臣官房環境教育推進室長 東岡 礼治 様
- 3 研究発表 口頭発表
- 4 誌上発表校紹介
- 5 講 評 東京都教職員研修センター授業力向上課 指導主事 小貫 達也 様
- 6 講 演 「気候危機にどう向き合うか」
講師 東京大学未来ビジョン研究センター 教授
国立環境研究所 地球システム領域 上級主任研究員
江守 正多 様
- 7 大会宣言 都事務局長 伊藤 修久
- 8 閉会の辞 副会長・都会長 箱崎 高之

■ 口頭発表の部 ■

- 1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進
～環境教育によって育む学力と環境保全意識～
東京都小中学校環境教育研究会 会 長 箱崎 高之
研究部長 鈴木 元
- 2 持続可能な社会づくりに向けて、自分の考えをもって、行動し、表現・発信する児童生徒の育成
～世界自然遺産の島 奄美の自然・文化を生かし SDGs を目指す環境教育～
鹿児島県大島郡宇検村立阿室小中学校 校 長 中村 正治
教 諭 岩切 敏彦
- 3 河川・水教育で広げるアクティブ・ラーニング
～機関庫の川から学ぶ自分達の生活と自然環境のつながり～
北海道帯広市立豊成小学校 校 長 平野 司
主幹教諭 河村晋一郎

□ 誌上発表の部 □

- 1 「地域とともにある学校づくり」の実現に向けて
～ESDの取組への可能性を探る～
神奈川県厚木市立毛利台小学校 校 長 山田 香
- 2 地域の特色を生かした環境教育の推進
～河川環境学習（3・4年生）を中心に～
宮城県気仙沼市立面瀬小学校 校 長 佐藤祐美子
河川教育担当 大内 哲夫
- 3 海と人のつながりから持続可能な未来社会を考える子どもたち
～教育課程特例校の特設領域「海と生きる探究活動」を通して～
宮城県気仙沼市立鹿折小学校 校 長 小野寺裕史
- 4 すがおの「ひと・もの・こと」と関わり、郷土を愛し、郷土を守る力を育てる総合的な学習の時間
福岡県北九州市すがお小学校 校 長 島田 剛
- 5 ESDを主軸とする中学校3年間を通じた環境教育カリキュラム
～「確かな学力や生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒」の育成を目指して～
長野県山ノ内町立山ノ内中学校 校 長 山口 近
研究主任 島田 俊哉

SDGs と環境教育のはざま

全国小中学校環境教育研究会
会長 関口 寿也

5月に新型コロナウイルスが5類感染症に分類されたことにより、今年度の学校教育活動には活気が戻ってきました。しかし、まったくコロナ禍以前の教育活動に戻ったわけではありません。時を同じくして全国で実施されたGIGAスクール構想により、一人一台のPC端末が配備され、オンラインを用いての児童・生徒や保護者とのやりとりが堰を切ったように浸透しました。それはさながら学校における一つの大変革期でした。全国小中学校環境教育研究会の研究発表会もその流れと共に、コロナ禍の3年間はオンライン開催として実施されました。今年度で第55回を数える研究発表会は、その経験を活かし、対面とオンラインの同時開催を実施することになりました。対面では発表者の熱気や意志をぜひ感じ取り、オンラインでは会場からの知見をぜひ受け取っていただければ幸いです。

私たちが取り組む環境教育は、温暖化が顕著に進行する中、教育というフィールドにおいてSDGsとESDとは切っても切れない関係性があります。2015年に採択されたSDGsは2030年までの時限目標ですが、2023年はちょうど折り返しの年でした。持続可能でよりよい世界を目指す国際目標SDGsの前半戦、私たちは何ができたのでしょうか。今年の世界的气温上昇について、国連のグテーレス事務総長は7月の会見で「地球沸騰化」という言葉を用いて危機感を表明しました。日本の今夏の真夏日は記録を大幅に更新する90日を数えました。英国南極観測局の研究チームは南極の棚氷の融解を止められないと発表。米国の研究者による「気候変動報告書」では今夏の世界的猛暑が地球の過去10万年で最も暑く、地球が「未知の領域」に入ったと指摘。世界気象機関(WHO)は10月末までの記録では世界の平均気温が1.4℃上昇していると発表しました。COP28では、英国エクセター大学などのチームが地球はティッピングポイント(不可逆転換点)に間もなく達すると報告書に記しました。地球温暖化は待ったなしの状態から、いよいよ状況の劇的変化への階段を上り始めてしまっているという認識が多数声になってきています。

西欧では、CCE(Climate Change Education)が始まっています。振り返って我が国ではどうでしょうか。スウェーデンのヨハン・ロックストローム博士が発表したSDGsウェディングケーキモデルでは、SDGsの目標6,13,14,15番を「生物圏」とし最下層に配置しました。気候変動に言及した13番の目標が達成できなければ、だるま落としのごとく中間層の「社会圏」、最上位にある「経済圏」の目標の達成は困難になるということを意味します。教育界では、〇〇教育という名の教科・領域を飛び越えた内容の学びが挙げられています。言うなれば環境教育もその一つです。しかし、私たち学校教育が今一番取り組まなければならない喫緊の課題は、この研究発表会にご参加していただいている皆様と意思を一つにするものであると思います。公害教育以降、これまで私たちが取り組んでいた受け手としての教育(消費者教育)のみでは、気候変動に対してなす術はありません。環境教育を持続可能な社会を創る人材育成のための教育(ESD)として捉えることで、SDGs達成に資する一歩となるはずで、言い換えれば、アントレプレナーシップ(教育)です。まさに、未来を創造する教育活動に他なりません。これからの環境教育の役割と在り方をこの研究発表会で皆様と共有できれば、開催の価値があるというものです。

結びとなりますが、本大会を開催するにあたり、文部科学省、環境省、東京都教育委員会、品川区教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、東京都公立小学校長会、東京都中学校長会、日本教育公務員弘済会東京支部、日本ESD学会、日本環境教育学会、ESD活動支援センター、関東地方ESD活動支援センターの皆様をはじめ関係各位の皆様にご多大なるご指導、ご助言、ご後援を賜り、心より感謝申し上げます。

全国小中学校環境教育研究会

文 部 科 学 省
初 等 中 等 教 育 局
教 育 課 程 課
専 門 官 麻 田 卓 哉

貴研究会の皆様方には、日頃から児童生徒の学びの保障のためにご尽力いただいておりますこと、また、学校における環境教育の充実と発展にご尽力いただいておりますことに心から感謝申し上げます。

地球温暖化や自然環境の破壊、資源エネルギー問題など、地球規模の様々な課題が増大し複雑化する中、エネルギーの効率的な利用など環境に対する負荷を軽減し持続可能な社会を構築するため、国民一人一人が様々な機会を通じて環境問題について学習し、自主的・積極的に環境保全活動に取り組んでいくことが求められています。

文部科学省では、国民がその発達段階に応じて、あらゆる機会に環境の保全についての理解と関心を深めることができるよう、学校教育や社会教育における環境教育の推進のために必要な施策に取り組んでいるところです。

学校における環境教育については、学習指導要領においても、総則をはじめ、社会科や理科、技術・家庭科など関連の深い教科を中心に環境教育に関する内容の充実が図られているところであり、引き続き、地域や学校等の特質を生かしつつ、カリキュラム・マネジメントの視点も踏まえながら各教科等の学びを関連付けて、環境教育をどのように位置付け、展開していくかを考えながら指導していただきたいと思っております。

また、令和5年には「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」に基づき定める政府の「環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針」の改定について専門家会議での議論が行われました。

専門家会議における素案によれば「①学校内外での対話と協働による学びの推進に向けた、学校と地域・団体・企業等をつなぐ中間支援機能の充実による、学校の教職員の負担軽減と教育の質向上の両立、②環境教育等促進法に基づく「体験の機会の場」や、国立公園等の体験活動を通じ、また「自然共生サイト」等とも連携して、質の高い環境教育が身近に受けられる機会の確保を進める。」などが記載されており、政府としても引き続き環境教育等を推進こととしているところです。

結びになりますが、本大会に参加される先生方にとって、多大な成果が得られることをご期待申し上げますとともに、本大会を主催されます全国小中学校環境教育研究会の更なるご発展と、関係の皆様方の益々のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げます。

環境教育及び持続可能な開発のための教育(ESD)を取り巻く現状について

環境省 大臣官房総合政策課
環境教育推進室長 東岡 礼治

第55回全国小中学校環境教育研究大会及び第59回東京都小中学校環境教育研究発表会の開催に当たり、一言御挨拶を申し上げます。

貴研究会におかれては、「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」を研究主題として精力的に活動を展開されており、また、学校教育における環境教育、ESDの推進に貢献されておりますことに、改めて厚く御礼申し上げます。

さて、近年は、気候変動を始めとして、生物多様性の損失や環境汚染等の環境問題が深刻化し、環境危機とも言える状況に直面しています。こうした問題を克服し、自然再興、炭素中立、循環経済が達成される持続可能な社会に変革するためには、一人ひとりの意識や行動の変容、さらに組織や社会経済システムの変革につなげていくことが不可欠です。環境教育・持続可能な開発のための教育(ESD)は、こうした変容を促す土台として、その重要性はますます高まっています。とりわけ、児童生徒を含めた若い世代は、持続可能な社会への変革の担い手として重要な存在であり、学校を始めとした様々な機会や場において、ESDの考え方を踏まえた環境教育が実践されることが重要です。

環境教育においては、学校の外にある自然や地域、企業等の人たちとふれあい、交流しながら学ぶことで、自分の暮らしと地域や環境とのつながりに気付き、地域が抱える環境問題を自分事化することが重要です。また、その過程で生まれた新たな気づきや発見を、多くの人たちを巻き込みながら行動に結びつけることが期待されます。学校現場においても、企業による出前授業や廃棄物処理や自然再生等の環境保全の現場の見学、自然学校等での自然体験学習のように地域や企業等と連携した環境教育が実践されていますが、一方で、調整に時間や労力がかかることなどを理由に連携が十分に進んでいない状況も見受けられます。

こうした課題に対応する取組として、環境省と文部科学省とが共同して開設したESD推進ネットワークを活用した環境教育の例があります。ESD推進ネットワークは、ブロックごとに設置する地方センターをはじめとして全国に拠点を展開しており、教職員やNPO、企業など環境教育の実践者による相互の学び合いを支援しています。そうした機会を契機として、それぞれの活動における連携事例も生まれています。

とりわけ、ESD推進ネットワークでは、近年、気候変動教育に力を入れており、学校や地域等と連携しながら、気候変動を切り口として持続可能な地域づくりについて学び合う場や機会づくりを進めています。例えば、東北の地方センターでは、昨年度、秋田県にある中学校において、NPOと連携し、生徒たちがキリバス共和国の子供たちとオンラインで交流する授業を実施しました。気候変動に直面している同世代の子供たちとの対話の場を、ESDセンターや学校、NPOとが連携して創出することにより、生徒たちの環境問題への当事者意識や行動変容を芽生えさせるきっかけをつくることができました。

また、環境省では本年度から、学校や社会教育施設等で行われている優良事例を「環境教育・ESD実践動画100選」として選定・公表しております。授業づくりの御参考にしていただければ幸いです。

環境省では、環境教育等促進法に基づく環境教育等の推進に関する基本方針の見直しを、貴研究会の御協力も賜りながら進めているところです。環境教育等の更なる推進と持続可能な社会の構築に向けて、引き続き、皆様と連携・協力を行ってまいりたいと考えています。

最後になりますが、本会の御盛会と関係各位の御健勝を祈念し、私の御挨拶といたします。

■ 口頭発表 ■ P 8 ～ 3 7



- 1 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進
～環境教育によって育む学力と環境保全意識～
東京都小中学校環境教育研究会 会 長 箱崎 高之
研究部長 鈴木 元…… 8

- 2 持続可能な社会づくりに向けて、自分の考えをもって、行動し、表現・発信する児童生徒の育成
～世界自然遺産の島 奄美の自然・文化を生かしSDGsを目指す環境教育～
鹿児島県大島郡宇検村立阿室小中学校 校 長 中村 正治
教 諭 岩切 敏彦……18

- 3 河川・水教育で広げるアクティブ・ラーニング
～機関庫の川から学ぶ自分達の生活と自然環境のつながり～
北海道帯広市立豊成小学校 校 長 平野 司
主幹教諭 河村晋一郎……28

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

～環境教育によって育む学力と環境保全意識～



東京都小中学校環境教育研究会
会 長 箱 崎 高 之
研究部長 鈴 木 元

I 研究主題設定の理由

本年7月、世界気象機関（WMO）と欧州委員会の気象情報機関「コペルニクス気候変動サービス」は、7月が人類史上最も暑い月となることを裏付ける公式データを発表した。これを受け、国連のアントニオ・グテーレス事務総長は、国連本部での記者会見において、

地球温暖化の時代は終わりました。地球沸騰化の時代が到来しました。もはや空気は呼吸できるものではありません。暑さは耐えがたいものです。そして、化石燃料であげる利益と気候変動への無策は容認できるものではありません。リーダーは先頭に立たなければなりません。もう躊躇する必要はありません。言い訳無用です。他の人が先に動くのを待つ必要はもうありません。もうそんな時間はありません。

The era of global warming has ended; the era of global boiling has arrived. The air is unbreathable. The heat is unbearable. And the level of fossil fuel profits and climate inaction is unacceptable. Leaders must lead.

No more hesitancy. No more excuses. No more waiting for others to move first. There is simply no more time for that.

と発表し話題となった。また、東京では夏日（気温 25 度以上）が積算 143 日を記録した。1 年の約 4 割が夏日となったことになる。まさに「地球沸騰化」と言っても過言はない。

これまで本研究会は、人類の行き過ぎた社会活動が引き起こしてきた環境問題に警笛を鳴らし、持続可能な社会への改善を試みる教材化を進め、授業実践を重ねてきた。例えば、気候変動に関する授業、食品ロスやプラスチックの廃棄等の問題についての授業、生産者視点での環境保全に向けた授業等である。多くの授業実践を取り組む中で、私たちの実生活では、給食の残菜、コンビニや飲食店の食料廃棄、化学繊維を大量に利用した衣料品廃棄など、今なお様々な場面で環境への負荷をかける生活を続けている。

—今だからこそ「地球温暖化防止対策」を考えさせたい—

子供たちの多くは、様々な環境問題について学ぶ機会が増え、環境保全意識が高まってきているように思われる。一方、実生活ではペットボトル飲料やファストファッションを無意識に手にしている状況にある。その現状を踏まえ、「地球温暖化」を実感している今だからこそ、地球温暖化防止に焦点をあて、授業実践を続けることでさらに環境保全意識を高めていく必要がある。

—私たちには ESD がある—

多くの教員は、「持続可能な社会の作り手」の育成に対するビジョンが未だ明確にすることができていない。国連が掲げる SDGs を達成するためには、多くの課題に対して取り組んでいかなければならないことは明白である。また、扱わなければならない課題は、プラスチック問題、エネルギー問題、衛生、食糧問題等と多岐にわたる。これらの課題に対して、解決の糸口を見つけることが困難なものが多くある。そのため、課題が多く何から取り組むべきか迷っている教員が

多いのではないだろうか。

学校教育では、何からどのように取り組んでいけばよいのだろうか。新学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の作り手となることができるようにする」と記されている。この先の世界をどうしていきたいのか、そのためにどのような人間を育てるのか、そのビジョンをもたない教育は、持続不可能な地球を増長させていく。公害の滅失、持続可能な社会の実現、2030年までの目標としてのSDGsの達成には、数ある問題に主体的に立ち向かい、発信、行動する人材を育成する必要がある。その人材育成のために必要となる学校教育の学習活動の根幹は、学校経営に直結した「総合的な学習の時間」である。GAP(グローバルアクションプログラム)やホールスクールアプローチ、カリキュラム・マネジメント、ESDカレンダーなどに基づいて、未来を構築する学びを実践するために「総合的な学習の時間」の果たすべき役割は大きい。

さらに、これまで本研究会が取り組んできたESDは、その実現を可能にすると信じる。それは、教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。これまで本研究会が取り組んできたESDの授業概念を盛り込み、持続可能な社会に向けての小さな一歩を積み重ねてゆくべく、教師一人一人が児童・生徒の実態に応じ、自らすすんで環境教育の実践を構築することができるように、単元及び教材開発を行った。環境教育とは何か、ESDとは何か、学校現場が来るべき私たちの明日に向けて迷うことなく前進するために、本研究を生かして欲しい。

II 研究の方法

- 1 役員定例会で理論構成を行う。
- 2 全国小中学校環境教育研究会で作成した「新しい環境教育」で示す児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、本会研究部で指導計画・単元・授業プランを作成する。

【児童・生徒に身に付けさせたい3つの能力・態度】

地球とそこに生きるすべての生命にとって

- (1) よりよい環境を求め持続させる意欲や態度
- (2) よりよい環境のあり方を考える力
- (3) よりよい環境の創造を目指す社会にすすんで参画し、貢献する実践力

- 3 全国小中学校環境教育研究会、外部機関と連携をし、研究員各校において指導実践を深める。
- 4 全国小中学校環境教育研究会の発表会(令和6年1月26日)において、研究発表を行う。

III 研究経過

- 1 学校現場でのESD推進状況の確認
- 2 取り組み可能な課題の検討
- 3 昨年度の研究の検証
- 4 地球温暖化を考えるための教材、単元開発、授業構築
- 5 研究会員の学校における授業実践(一部)
- 6 ポートフォリオによる授業検証

IV 授業実践例

これまで、本研究会が「2100年の未来天気」「もったいない（食品ロス）」「脱プラ生活」「消費者から生産者へ」等を総合的な学習の時間の中心に据え、環境教育の単元開発を行ってきた。これらの単元では、児童・生徒の環境保全意識や行動変容に一定の成果が見られた。しかし、社会情勢の大きな変化の中、大きな視野をもった児童・生徒の育成が急務である。

これまでの地球温暖化に対する様々な課題を一つの繋がりとして捉える資質・能力の育成を目指すこととした。そこで、気象庁のこれまでの最高気温データをもとに、100年後の最高気温や気候変動の予測をすることで、自らが地球温暖化について自分事として捉え、環境保全意欲の向上を図るための教材開発と授業実践を行った。また、100年後までの気温予測を行う教材は、対象学年を小学校4年生から中学校3年生とし、多くの教科、領域で使用できるものとした。紙面の都合上、すべての実践事例は掲載できないが、以下に小学校2校、中学校1校の事例を紹介する。

1 A小学校 第4学年・総合的な学習の時間 単元名「グリーンカーテンプロジェクト」

(1) 単元のねらい

地球温暖化について調べ、情報を共有し、自分事として捉えることで、自分たちの学校でできることを何かを考え、環境保全意識の向上を図る。

(2) 単元計画（実施期間9月～10月）

小 単 元	1学期までにグリーンカーテンの意味や観察などを含めて7時間終わっている。		
	学習過程	◎目標	○学習活動 ・児童の発言及び姿
1 地球温暖化 に対して自分 たちでできる こと	課題設定 (2時間) 【本時】	◎グリーンカーテンが上手いかなかった原因について関心をもつ。 ◎100年後の気温を考えさせ、地球温暖化について関心をもち、活動の計画を立てることができる。	○地球温暖化について知り、調べたいことを話し合う。 ・地球温暖化って何だろう。 ・自分が興味をもった内容を調べてみたい。
	情報の収集 (2時間)	◎地球温暖化について調べたいことや疑問に思ったことを、調べることができる。	○地球温暖化について疑問に思ったことなどを調べる。 ・調べてみると、奥が深いな。 ・地球温暖化は、様々な原因でおきているんだ。
	整理・分析 (1時間)	◎調べたことをどのように整理するか計画することができる。	○集めた情報を整理・分析する。 ・どんな内容を発表するのいいかな。 ・どんなことを発表すると興味をもつか。
	振り返り まとめ (2時間)	◎調べたことを他者に伝えることができる。 ◎振り返りを基に課題を更新し、見直しをもつことができる。	○調べたことを友達に発表する。 ・グループごとに伝え合ってみよう。 ・皆のオクリンクのプレゼンをみてみよう。 ○単元を振り返り、今後の見直しをもつ。 ・発表をすることができてよかった。
小単元1終了後、2「自分たちの学校でできることは何だろう」(15時間)を行う。			
	課題設定	◎自分たちができる身近なことについて関心をもつ。 ◎ビオトープも地球温暖化対策になっていることを知る。	○ビオトープについて、調べたいことを話し合う。 ・正門前のビオトープに穴が開いていたよね。

情報収集	◎ビオトープについて調べたいことや疑問に思ったことを、調べることができる。	○ビオトープについて疑問に思ったことなどを調べる。 ・ビオトープにどのような生き物を呼ぼう。
整理・分析	◎調べたことをどのように整理するか計画することができる。	○集めた情報を整理・分析する。 ・専門的な人の意見も聞きたいな。
振り返り 表現・まとめ	◎調べたことをもとに自分たちでビオトープ作りを行う。 ◎振り返りを基に課題を更新し、見直しをもつことができる。	○調べたことをもとにビオトープを作り直す。 ○単元を振り返り、今後の見直しをもつ。 ・これからも自然や環境を大切にしたい。

(3) 本時について

① 本時の目標

100年後の気温を考え、地球温暖化について考えてみたいことを決める。

② 本時の展開

時間	○主な学習活動 ・児童の発言	☆指導上の留意点 □評価規準（方法）
導入 5分	○前時までの学習を振り返る。 ・グリーンカーテン水やりしたのにうまくいかなかった。 ○本時のめあて、学習の流れを確認し、見直しをもつ。	☆今までの活動を画像で振り返り、本時のねらいをもてるようにする。
100年後の気温を考え、自分が地球温暖化について調べてみたいと思ったことを決めよう。		
展開 I 20分	○100年後の気温をグラフで入力しよう。 ・僕はこのままあがりつづけると思うな。 ・私は、このままだと5度くらい上昇すると思う。 ○グラフを見せ合い、交流しよう。 ・私と似ている。 ・皆、少しずつ上昇すると思っている。	☆ICT 機器を児童が扱っている時は、立ち位置に気を付けて行う。 ☆似ている人だけでなく自分と異なるグラフの人とも交流するような声掛けを行う。
展開 II 15分	○地球温暖化について調べてみたいことについて考えよう。 ・原因 ・対策 ・地球温暖化が続くとどうになってしまうのか ・東京都は地球温暖化対策で何をしているのか。	☆自分の名前のマグネットを黒板にはらせど内容に関心があるのか可視化させる。 □地球温暖化について調べたいことを話し合い、学習課題を設定している。
まとめ 5分	○本時の学習を振り返り、次時への活動の見直しをもつ。 ・地球温暖化について興味をもった。 ・自分たちもなにかできることはないか。 ・次回は、地球温暖化の対策について調べていきたい。	☆活動のよさを認められたこと、交流で深まったことなどを取り上げ、価値付けて、次の時間へとつなげる。 ☆学習の振り返りを瞬時に見られるように Google フォームを活用する。

③ 板書例

～グリーンカーテンプロジェクト～

学習のめあて

今日の学習の流れ

【課題設定】

- 個人で考える
- 周りの人と話し合う
- 全体での話し合い
- 振り返り

気温のグラフ
(スクリーンにも投影)

気付いたこと

地球温暖化に対して
調べてみたいこと

- ・原因
- ・対策
- ・未来
- ・対策

2 B小学校 第4学年・総合的な学習の時間 「地球温暖化から考える多摩川の未来」

(1) 単元のねらい

- ① 地球温暖化について考え、未来の状況を予想し、地球温暖化防止対策の必要性を知る。
- ② 環境課題を自分事と捉え、今の自分に何ができるかを考え、行動する。

(2) 本時の目標

100年後の最高気温を考え、それぞれのテーマの未来について考えることができるようにする。

(3) 授業展開

燃	学習の流れ・児童の活動	・手立て ◆評価の方法
導 入	1. 地球温暖化について知っていることを全体で共有する。 2. 本時のめあて、学習の流れを確認し、見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・1 時間を通して、魚、ごみ、歴史、植物、鳥、水中の生き物（魚以外）、陸上の生き物、水質、グループごとの活動にすることで、意見が活発に交流できるようにする。 ・地球温暖化について知っていることを共有することで、地球温暖化をイメージできない児童も本時のねらいをもてるようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">100年後の気温を考え、自分たちテーマの未来について考えよう。</div>		
展 開 ①	3. グループごとに100年後の最高気温の予想を入力する。 4. グラフを見せ合い交流しよう。 ・各グループの結果を共有し、全体で気付いたことグラフを作りながら考えたことを共有する。 5. 地球温暖化の現状を動画で視聴する。	<ul style="list-style-type: none"> ・過去の気温の傾向を全体で確認、共有し、未来の気温の傾向を考えられるように声をかける。 ・ロイロノートの共有機能を用いたり、子供の意見を板書したりして、全体で地球温暖化の傾向を考えられるようにする。 ・世界各地で地球温暖化による影響が出ていることを知り、具体的な現象をイメージできるようにする。
展 開 ②	6. 自分たちのテーマの未来を考える。 ・テーマごとに考えたグラフに推移で地球の温度が変化した場合、自分たちのテーマにはどんな変化があるかを予想する。	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩川の魚、ごみ、歴史、植物、鳥、水中の生き物（魚以外）、陸上の生き物、水質の未来にどんな変化が起こるのかを考えさせる。 ◆地球温暖化について考えたことを話し合い、それぞれのテーマの未来を考えることができている。 <p style="text-align: center;">【思考・判断・表現】 (発言・タブレット端末)</p>
ま と め	7. 本時の学習を振り返り、次時に繋げる。	<ul style="list-style-type: none"> ・交流で深まったことなどを取り上げ、価値づけて、次時以降の総合の学習につなげられるようにする。

3 C中学校 第2学年理科 地球の大気と天気の変化「地球をとり巻く大気のように」

(1) 単元の目標

地表にあるもののすべてに大気圧がはたらいていることを理解させ、身のまわりの大気
の存在を認識させる。また、身のまわりの大気の状態を継続的に観測させて、気象要素の変化
と天気の変化の関係を見出させる。

(2) 単元の指導計画と評価計画（全10時間）

	目標	学習内容・学習活動
第1時	・天気とは何かを考え、天気の歴史から現在ではどのような予報がされているかを考える。	・天気にまつわることわざを調べ、現在の科学としては正しいのかどうかを検討する。 ・晴れと曇の違いを考える。
第2時 第3時	・日本式天気記号を知り、天気図から情報を読み取れるようになる。	・天気図から読み取れることは何か。 ・天気・風向・風力を、日本の天気用図記号やはねを用いて表す。
第4時 <本時>	・地球温暖化はなぜ起こっているのか、それに対する対策はどのようなものがあるか考える。	・近年の異常気象について調べ、温暖化が一因であることを知る。 ・100年後の気温がどうなるかを考え、地球温暖化とは何かについて自分の言葉で表現できるようになる。
第5時 第6時	・地球温暖化のスピードを少しでも遅くするにはどのような取り組みができるか考える。 ・都や国などで行われている取り組みを知り、自分たちの活動に生かす。	・地球温暖化のスピードを少しでも遅くするにはどうすれば良いか考える。また、自分たちとしてできることは何か考え、多くの人を取り組める「キャッチコピー」を考える。 ・HTTなどの取り組みを調べ、自分たちの活動に生かす。
第7時	・台風はなぜ強い風が吹くのかを考え、風には気圧が関係していることを知る。 ・どのような条件で強い風が吹くのかを考える。	・異常気象の例をあげ、大きく ・風が吹くことには「気圧」が関係していることを知る。
第8時	・ゴム板が机の天板から取れにくくなっているようすから、大気の重さが関係していることを見いだす。 ・大気圧が生じるしくみを理解する。	・ゴム板には、どのように大気による力がはたらいているのだろうか。 ・地表にあるものには、すべてこの大気の重さによる力がはたらいていることを説明する。図を示し、この力があらゆる向きから物体に垂直にはたらくことを示す。
第9時 第10時	・同じ力がはたらいていても、受ける面積によってそのはたらきが異なることを考察する。 ・圧力や大気圧について理解する。	・スノーボードをはいていないと、どうして足が雪に沈んでしまうのだろうか。 ・圧力とその単位について説明する。また、大気による圧力が大気圧であることを説明する。 ・山頂で菓子袋がふくらんだ理由を話し合わせる。

(2) 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点
5分	<p>○今年の気象について振り返る。</p> <p>【問1】今年や近年の気象はどのような特徴がありますか。</p> <p><映像>台風7号のニュース映像</p> <p>【問2】なぜそのような気象になったのか。</p>	<p><予想される生徒の回答></p> <ul style="list-style-type: none"> ・記録的な猛暑 ・警報級の台風 <p><予想される生徒の回答></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球温暖化 ・気候変動
20分	<p><課題>100年後の気温はどうなっているだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月平均気温のグラフ(1898~2023年)を提示し、今後どのような気温になっていくかを考えさせる。 <div data-bbox="507 898 1187 1393" data-label="Figure"> <p>【問3】</p> <p>日本の9月平均気温(1898年~2023年)</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜそのようなグラフを考えたのかグループ、全体で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気象庁 HP のデータからグラフを作成した。 <p><予想される生徒の回答></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体的に上昇傾向にあるので、そのまま上昇し続ける。 ・人間が対策をすることで、ある程度進んだところで気温が低下していく。
20分	<p>地球温暖化はなぜ起こっているのか考えてみましょう。</p>	<p><予想される生徒の回答></p> <ul style="list-style-type: none"> ・温室効果ガスの排出 ・森林伐採 ・資源の無駄遣い
5分	<p>○振り返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を終えて疑問に思ったことやさらに学びたいと思ったことを書く。

(3) 生徒回答例 (スクールタクト使用)

<p>第4時</p> <p>【問1】 今年や近年の気象はどのような特徴がありますか。</p> <p>気温の急上昇 大きな寒暖差 台風が多い 梅雨と冬が晴れが多い 最高気温を何度も記録した</p>	<p>【問2】 なぜそのような気象になったのか</p> <p>気候変動や地球温暖化が進んでしまったから</p>
<p>日本の9月平均気温 (1898年~2023年)</p>	<p>日本の9月平均気温 (1898年~2023年)</p>
<p>日本の9月平均気温 (1898年~2023年)</p>	<p>日本の9月平均気温 (1898年~2023年)</p>
<p>【問4】 地球温暖化の原因は？</p> <p>地球温暖化の原因は人間の資源の無駄遣いや森林伐採、プラスチックの大量使用などに原因がある。プラスチックをゴミにするためには熱をかけて溶かすが、その際二酸化炭素が大量に発生し、地球温暖化が発生してしまう。また森林伐採によってさらに二酸化炭素濃度が上がってしまっている</p>	<p>振り返り</p> <p>授業を終えて、さらに学びたいと思ったことや、疑問に思ったことを書きましょう</p> <p>今日は今の気象について勉強した。今年の夏は自分の中で一番暑い夏だと私は思っていて、それは地球温暖化によるものだがなぜ人間がこんなにも対策を練って考えているのに地球温暖化は止まらないのだろうか疑問でした。今の時代色々な技術が発達しているのに何が原因でこんなにも地球温暖化が進んでしまっているのが気になった。</p> <p>理解度 A B C</p>

IV 児童・生徒の変容

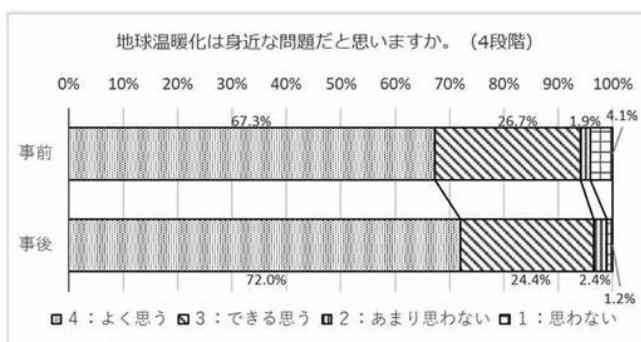
単元の検証授業を実施した小学校2校、中学校2校で、授業を行う前後(単元の前)で児童・生徒の意識調査を行い、意識の変容について調査を行った。その結果は、次の通りとなった。

- 1 対象：小学校2校[4年88名]、中学校2校[1年94名、2年63名]
- 2 結果

質問	事前	事後
① 地球温暖化は身近な問題だと思う。	94.0%	96.5%
② 地球温暖化の原因について知っている。	79.7%	86.2%
③ 地球温暖化を他の人に説明することができる。	56.4%	67.3%
④ 地球温暖化や異常気象を実感している。	78.9%	81.5%
⑤ 環境に優しいエネルギーを知っている。	60.9%	63.0%
⑥ 未来のエネルギーについて興味・関心はある。	73.3%	77.2%
⑦ 自分の生活の中で省エネを意識して生活している。	66.2%	70.9%
⑧ 持続可能な社会をつくるのが大切だと思う。	92.5%	96.1%
⑨ 2030年カーボンハーフに向けた取り組みを知っている。	30.5%	44.1%
⑩ 東京都の節電の取り組みH T Tを知っている。	27.4%	48.0%

(1) 地球温暖化への問題意識

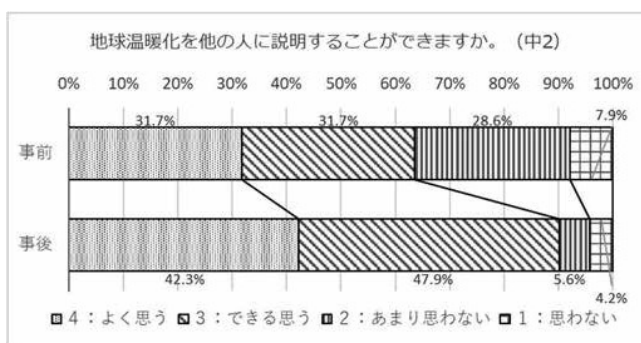
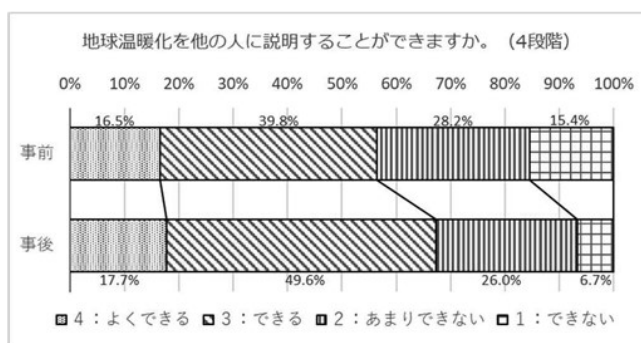
「身近な問題であると思う」に対し、もともと肯定的回答率が94%と高い状態にあったが、事後では、「4：よく思う」と回答した児童・生徒が、4.7%も増加した。自ら気温上昇を予測し、考えたことにより、より身近な問題であると捉えるようになったと考えられる。



(2) 地球温暖化についての認識

「他の人に説明できる」と回答した児童・生徒が10.9%程度上昇した。特に「説明できない」という児童・生徒が15.4%から6.7%へと大きく減少した。

特に、学年別で見ると中学校2年生の変化が大きく、肯定的回答率が、62.4%から91.2%と約30%も増加した。これは、自ら調べ学習等を行った際、小学生にとっては難しい内容であっても、中学生は理解し納得することで、「説明できる」という自信に繋がった考えることができる。



V 成果と課題

1 成果

授業前の想定通り、上昇をし続けるグラフを書いた児童・生徒が多く、その児童・生徒の考えとしては「今まで上昇している様子があるので、このまま上昇し続ける」「おおよそ比例関係のある直線が引けるので、上昇すると思う」というグラフから読み取る知識を活用した回答が最も多かった。また、今までのように上昇と低下を繰り返す「ジグザグ型」のグラフを描いている生徒もおり、今までの傾向を踏まえて予想している児童・生徒もいた。

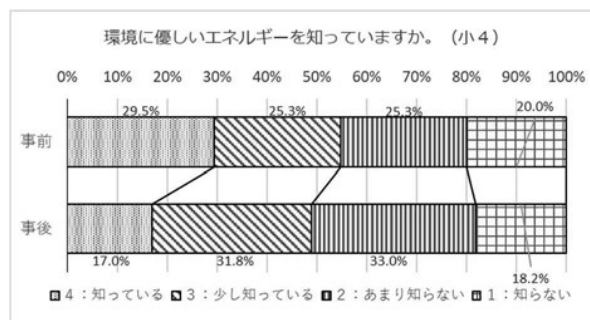
さらに、途中で低下傾向に転じるグラフを書いた児童・生徒も一定数おり、その生徒の考えとしては、「今人間が対策をしているからある程度進んだら、低下していくと思う」「SDGs が2030年に目標として定められているので、その年くらいから下がるのではないかな」というものであった。

事前・事後の意識調査では、すべての項目において、肯定的回答率の向上が見られた。自ら予想を立てた上で、その根拠を探るための調べ学習や対策を主体的に考える授業を行ったことで、地球温暖化の防止対策に対して自分事として捉えることができるようになったと考えられる。

2 課題

今回開発した単元は、小学校及び中学校のどちらでも活用可能な教材を使用し、授業を構築した。その結果、地球温暖化に関する関心や知識については一定の効果が見られた。しかし、発達段階に応じて知識量の違いが大きく、より難しく捉えてしまうことがあることが浮き彫りとなった。

例えば、小学校4年生では、「環境に優しいエネルギーを知っているか」に対して、肯定的回答率が5.9%も減少してしまった。エネルギーの概念がしっかりと理解できていない段階であったため、より難しいと感じた児童が多かった結果である。



VI 終わりに

今年度の研究は、地球温暖化に焦点を当て、未来を予測し、その予測を基に調べ学習や発表活動を行う授業実践を行った。過去の研究をより発展させ、環境問題を自分事として捉える児童・生徒が増加したことは、また環境保全意識の向上に一步前に進むことができたと考えている。

しかし、2030年のSDGs達成には、時間があまりにも短すぎると感じている。各学校で、答えの見えない問いに対して、児童・生徒と教員だけでなく、地域、保護者、関係機関、企業等の連携を強固なものにし、ESDを推進していく以外に道はない。ESDの推進にむけ、本研究を参考にいただければ幸いである。

令和5年度 東京都小中学校環境教育研究会研究員(実践授業実施校)
多摩市立連光寺小学校 教 諭 長谷川 聡也
板橋区立蓮根第二小学校 教 諭 小鹿 成軌
港区立高陵中学校 教 諭 清水 祥彦
葛飾区立青葉中学校 主任教諭 田場 正幸

□頭発表 2

持続可能な社会づくりに向けて、自分の考えをもって、行動し、表現・発信する児童生徒の育成

～世界自然遺産の島 奄美の自然・文化を生かし SDG s を目指す環境教育～



鹿児島県大島郡宇検村立阿室小中学校
校長 中村 正治
環境教育担当 岩切 敏彦

I 研究主題

1 研究主題設定の理由

(1) 時代の要請から

- 2015年 国連総会では、持続可能な開発目標（SDG s）を採択
- 小・中学校学習指導要領総則にも「持続可能な社会の創り手」の育成が明記され、研究・実践が進む。

ここ奄美大島では

「世界自然遺産登録」に大きな教育的価値を見出し、奄美の自然や文化等の「奄美のよさ」を生かした特色ある環境教育の充実を図る必要がある。

鹿児島県では

屋久島と共に2つの世界自然遺産登録地をもつ自然豊かな鹿児島県では、令和3年3月に、鹿児島県環境教育等行動計画を策定し、各教科の学習と体験的な活動を関連付けて、教科横断的な環境教育の必要性を述べている。

学校教育において、SDG s と関連させた環境教育を進めていく必要がある。

(2) 本校の教育目標から

学校教育目標を達成するために

- 本校には、自然や環境・文化に目を向けた教育活動が、脈々と継承されている。(例：稲作活動、阿室川生き物調査、サンバ観察等)
- 世界自然遺産登録の重要な場所である湯湾岳等の物的資源を効果的に組み合わせたカリキュラム・マネジメントが確立できる。

児童生徒がふるさとに誇りをもち、自然や環境・文化について考え、学び、発信することは大きな教育的価値がある。

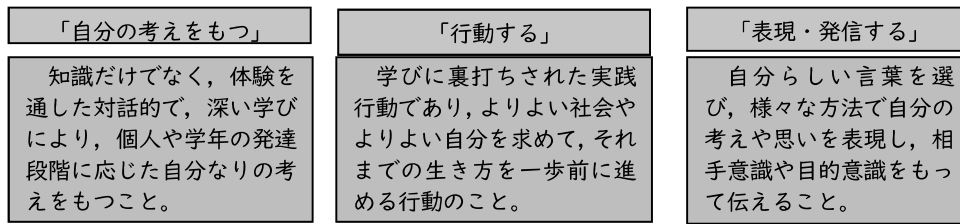
(3) 児童生徒の実態から

- 少人数のよさを生かした学校教育や温かい家庭、「結」の精神に満ちた集落の中で健やかに育まれており、明るく、素直で、人、もの、自然に感謝の心をもって接する児童生徒がいる。
- 極小規模校のため、積極性や自己表現に臆する傾向があり、全体としての文章表現力や人前での発表（情報発信力）に課題がある。また、自然や文化、世界自然遺産登録についても、自ら学び、考えを深め、自分たちのできる環境行動の実践につなげる必要がある。

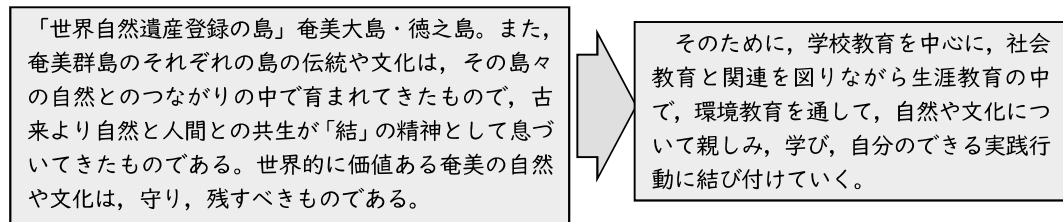
持続可能な社会の担い手を育成するために、横断的・総合的な学習活動を展開する環境教育の充実を図ることにより、全教育活動を通して「学び」の質が上がり、基礎学力の向上にもつながっていくと考えた。

2 研究主題について

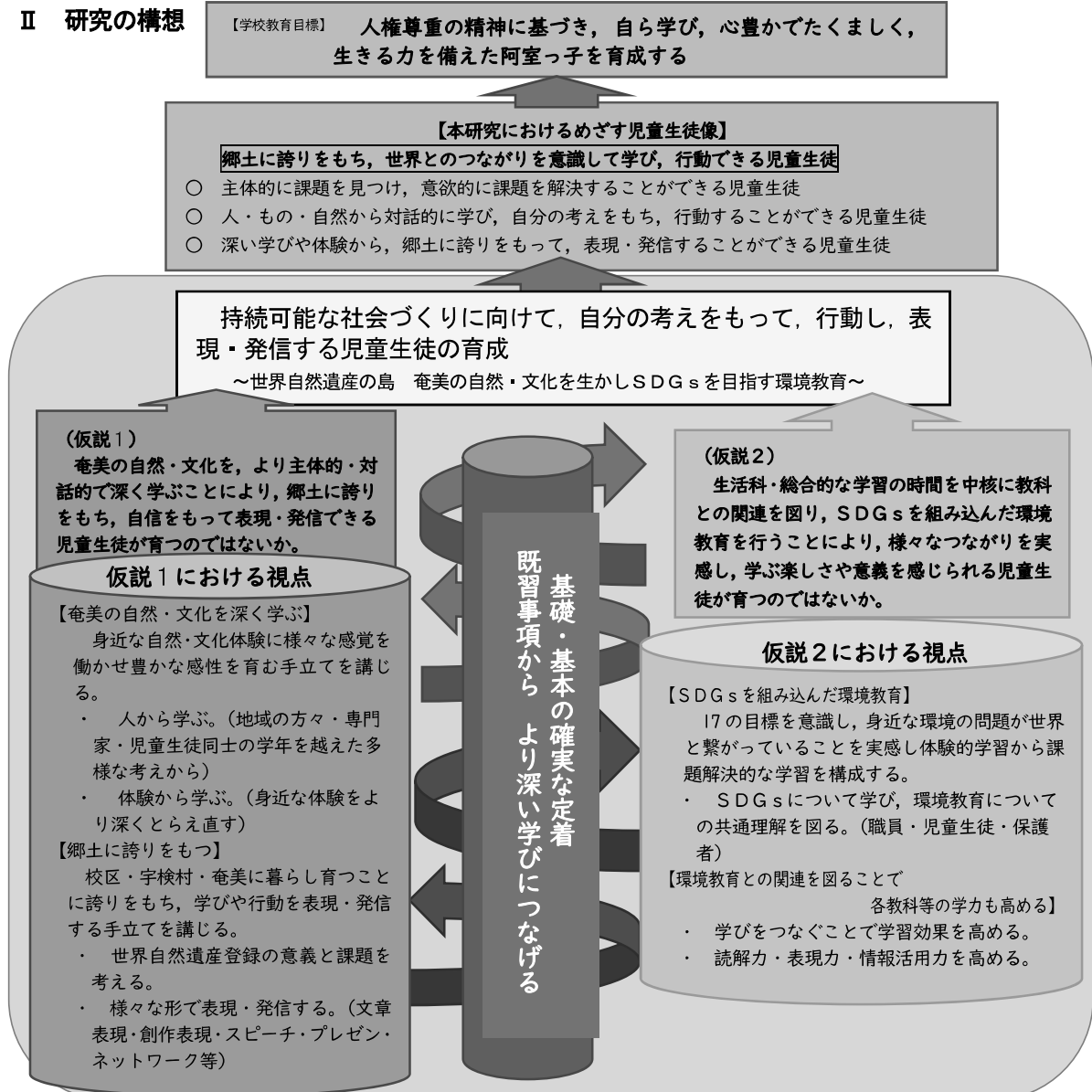
(1) 「自分の考えをもって、行動し、表現・発信する」とは



(2) 「奄美の自然・文化を生かした環境教育」とは



II 研究の構想



Ⅲ 研究の実際

1 仮説1における視点

(1) 奄美の自然・文化を深く学ぶために

身近な自然・文化体験に様々な感覚を働かせ、豊かな感性を育むための手立てを講じる。

ア 人から学ぶ（地域の方々・専門家・児童生徒同士の学年を越えた多様な考えから）



① 地域人材や専門家との連携から

- ・ 稲作指導者と各集落の老人会、保護者の協力で、豊かな感性を育む総合的な学習の時間の「阿室米」作り。
- ・ 令和3年度からは、環境教育の視点で専門家を招聘し、稲作活動の時間に田んぼの生態系を学ぶ学習を挿入。

➡ 稲作体験活動を、生態系や生物多様性、世界自然遺産などについての課題解決型の学習へつなげることができた。

② 児童生徒同士の学年を越えた活動から

- ・ 県森林環境学習における異学年グループ学習活動。
- ・ 互いの意見を尊重しながら、自由な会話から多様な考えが引き出される表現創作活動。

➡ 小中の上学年がリーダーとなり、下学年の思いに沿う声かけをしながら形成的な合意を図る話し合いができた。



イ 体験から学ぶ（身近な体験をより深くとらえ直す）

稲作活動や阿室川生き物調査、集落巡りから

- ・ 学校の前を流れる阿室川の教材化。
- ・ 見慣れた自然をより深く学ぶために「阿室川生き物調査～幻のリウキュウアユを探せ!」というテーマで、生き物調査と水質調査を実施。



➡ 生物多様性・生態系保全・海岸漂着物などの課題解決型の環境学習により、川が、森と海、集落の暮らしを支える「水」につながることを実感し、理科・社会・家庭科などの深い学びへと発展させることができた。

(2) 郷土に誇りをもつ

阿室（宇検村）・奄美に暮らし育つことに誇りをもち、学びや行動を表現・発信するための手立てを講じる。

ア 世界自然遺産登録の意義と課題を考える。

サシバサミット発表や世界自然遺産登録イベント発表から

- ・ 世界自然遺産登録により、国内外から注目を集め、学習や発表の機会が増えた。

➡ 世界自然遺産登録の意義や課題は、豊かな感性に加え科学的なデータや調査・分析から捉えることが必要である。児童生徒の発達段階に応じた問題解決的な学習から様々な視点で郷土を多面的に見つめたり、どのような関わりができるのか考えを深めたりすることができた。



イ 様々な形で表現・発信する（文章表現・創作表現・スピーチ・プレゼン・ネットワーク等）

みどりの小道環境日記の文章表現やシマ唄の創作表現から

A 児の2～4年生の環境日記の比較



自然や環境問題、SDG sの視点で、国語科や各教科等と関連付けながら、体験と言語活動の一体化を図る学習活動として、小学部で取り組んで3年目となる「みどりの小道環境日記」。

➡ 3年間の表現力の向上が見られた。

- ・ 中学部音楽科において、シマ唄の自由創作の表現活動。

- ・ 自然や自分の思いを「朝花節」の旋律にのせた表現活動。

➡ これまでの学習や生活体験を踏まえて、目的意識と相手意識が明確となった絵画・短歌・俳句・作文スピーチなどの形態で積極的に発信させたことで、郷土に目を向けた感性豊かで思いのあふれる作品ができ、更に自信をもって発表する姿が見られた。



2 仮説2における視点

(1) SDG sを組み込んだ環境教育

17の目標を意識し、身近な環境の問題は世界と繋がっていることを実感できるような、体験的学習や課題解決的な学習を構成する。また、SDG sについて学び、環境教育について共通理解を図る。（職員・児童生徒・保護者）

SDG sカードの活用とSDG s・環境教育校内掲示から



- ・ 全教育活動において、SDG sと繋がる内容には、各学級や個人に配布してあるカードを活用。
- ・ 校内の各所にSDG sと環境教育に関する動きのある掲示。

➡ 世界的な問題とつながっていることを意識。日々の学習や生活の中で、「Think Globally, Act Locally」の意識が高まった。

(2) 環境教育との関連を図ることで、教科の学力も高める。

ア 学びをつなぐことで、学習効果を高める。

各教科や領域との関連を図った学習形態から

- ・ 各教科等や領域の目標を達成しつつ、環境教育の視点をもって授業を構成した。
- ・ 教科等とのつながりを明確にした、横断的・総合的に学習を組織するカリキュラム・マネジメントを確立した。

小5国語科「固有種が教えてくれること」「グラフや表を用いて書こう」実践

中1社会科「世界各地の人々の生活と環境」実践



➡ 各教科等の既習事項を取り入れることで、思考がつながり、学習内容の理解を更に深めることができた。

イ 読解力・表現力・情報活用力を高める

屋久島・沖縄・宮城の小学校，全国離島学校サミット参加中学校との交流学习を通じた指導方法改善から



小学部は，世界自然遺産登録地として屋久島の八幡小学校と沖縄の奥間小学校との交流学习を実施した。また，宇検村と宮城県七ヶ宿町との交流から七ヶ宿小学校との交流学习を実施した。

中学部は，全国離島学校サミット参加校である福岡の小呂中学校，三重の神島中学校，新潟の新穂中学校との交流学习を実施した。（年3回）

➡ ICT 活用により表現・発信する意義（目的意識）と相手意識が明確となったことで，共通の課題や差異を考えたり，比較したりしながら，課題追究する学習活動ができた。今後更に充実させるために，読解力や表現力，情報活用力が育成できるような横断的・総合的な学習の充実を図ることとした。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 仮説1の研究の視点から

- 自然・文化の様々な分野の専門家と連携し，学校教育で児童生徒に何を伝えたいのかを明確にして話し合いながら授業をつくることにより，学びの質を深めることができた。
- 異学年での交流を通じた学習は，上学年に責任と自覚を養い，自分自身の学びと表現力を高める取組につながった。下学年にとっては，上学年を一つの見本と捉え，学びを深める意欲につながった。
- 体験前の視点と体験後の視点を与えることにより，深い学びにつながる課題をもつこととなり，体験と言語活動の一体化を図る横断的・総合的な問題解決的な学習に結びついていった。
- 世界自然遺産登録の意義と課題について学びを深め，身近なことから学ぶことの重要性に気付き，郷土に誇りをもって学び，表現・発信していくことに自信を高めた。

(2) 仮説2の研究の視点から

- 令和2～4年度の3年間のアンケート結果から，児童生徒・教師・保護者・地域とともに，SDGs及び環境教育への意識が大きく高まり，学び，実践するようになってきた。

アンケート調査の一部より複数回答・上位（令和4年 小学生16人・中学生4人）

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	考 察
環境学習への興味・関心が高い	小 87.5% 中 100.0%	小 87.5% 中 75.0%	小 87.5% 中 75.0%	小学生はとても高い興味・関心を抱いている。
意識が高まった学習内容	小 自然系 100.0% 中 ゴミ問題 100.0%	小 自然系 87.5% 中 ゴミ問題 75.0% 世界自然遺産登録 75.0%	小 自然系 87.5% 中 ゴミ問題 100.0% 世界自然遺産登録 75.0%	中学生はより高次の世界自然遺産登録の意義や課題・ゴミ問題に目を向けている。
学びの力の自覚 (自分で高まったと思う学力)	小 知識 87.5% 観察力 75.0% 文章力 62.5% 中 知識 100.0% 文章力 0.0%	小 知識 90.0% 観察力 70.0% 文章力 70.0% 中 知識 100.0% 文章力 25.0%	小 知識 92.0% 観察力 70.0% 文章力 75.0% 中 知識 75.0% 文章力 75.0%	小中とも知識と文章力の学力が高まったという自覚がある。

- 環境教育と各教科等とのつながりから，系統学習の中に横断的・総合的な学習の視点が現れてきた。小学部・中学部共に，教科をつないで考える意識が，教師自身に生まれたことにより，教科間での情報交換が活発になり，カリキュラム・マネジメントを確立することができた。
- 環境教育を通して，県内外の学校とつながり，学びを深め，自分なりの考えをもって，行動し，相手意識をもって表現・発信することができた。豊かな感性と共に，各教科等の基礎学力を高めることが土台となることに改めて気付かされた。これは，双方向であり，環境教育の充実を図ることが，各教科等の学力を高めることにもつながると感じた。

NRTより 小学4年女子(国語)・中学2年女子(理科)・小学4年以上の各学年

	令和 2年度	令和 3年度	令和 4年度	考 察
○ 国語 (小学4年女子) (読解力・表現力の観点から)	57	58	60	環境教育での言語活動・表現・発信の学習活動の中で、培われた学力でもありと考えられる。
○ 理科 (中学2年女子)(興味関心・情報活用力・科学的思考の観点から)	58	68	70	環境教育での生物多様性や生態系・再生エネルギー・水の循環などに関連付けながら培われた学力でもありと考えられる。
<p>○ 小学4年以上の各学年</p> <p>各学年が少人数につき学年としての集団で年度比較することは難しいが、NRTで、環境教育研究2か年以前の令和2年度と令和4年度を小4～中3の個人偏差値で分析した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小学4年(2年次比):国語・算数で全員がUP 【平均 国+6.5 算+14.0】 ・ 小学5年(3年次比):算数で2/3がUP 【平均 算+3.5】 ・ 小学6年(4年次比):社会・理科で全員がUP 【平均 社+3.5 理+7.0】 ・ 中学1年(5年次比):社会・算数(数学)・理科でUP 【平均 社+7.0 算(数)+4.0 理+3.0】 ・ 中学2年(6年次比):理科でUP 【平均 理+12.0】 ・ 中学3年(中1年次比):国語・社会・数学・理科でUP 【平均 国+10.0 社+3.0 数+6.0 理+2.0】 <p>全体として、読解力・表現力の伸びが顕著で、SDGsの17の目標や世界自然遺産登録と関連付けられる理科や社会の伸びも見られた。</p>				

2 研究の課題

(1) 仮説1の研究の視点から

- 横断的・総合的な学習を進めるには、時間を要し、カリキュラム・マネジメントが重要になる。学びを深めようとするれば、より高い課題を追究することとなり、児童生徒の発達段階に合わないことも生じた。児童生徒の実態に応じながら軌道修正が必要になる。
- 様々な形での表現・発信がなされ、リテラシーを高める必然性が出てくる。また、最も適切な表現・発信の方法は何であるかを教師側の意図をもって選択する必要がある。

(2) 仮説2の研究の視点から

- 世界自然遺産登録・SDGsを児童生徒の発達段階に沿って教え、教材化していき、教育プログラムとしていく必要がある。
- 県や奄美大島の郷土と自然を関連させた環境教育の充実を図ることは、教科等の学力を高めることにつながるという相関関係の視点で考え、実証する必要がある。

以上は、令和3年・4年度の宇検村立阿室小中学校の鹿児島県教育委員会指定の「環境教育」研究協力校の研究公開の概要である。次に、この実践の詳細や発展について述べたい。

V 世界自然遺産登録を生かした環境教育

1 奄美大島・徳之島・沖縄島北部及び西表島の世界自然遺産登録の教育的意義

(1) 世界自然遺産登録地となった教育的意義から

本地域は、国内最大級の亜熱帯照葉樹林があり、世界的にも独特で貴重な固有種や絶滅危惧種の生息・生育地である。奄美大島は、中央部・南部に湯湾岳や油井岳などの山塊から海域まで豊かな亜熱帯照葉樹林が連続しており、森林にはアマミノクロウサギ・アマミトゲネズミ・ルリカケス・オットンガエルなどの固有種や絶滅危惧種などの希少種が生息しており、役勝川や河内川などにはリュウキュウアユが生息している。

このような場所に暮らし、普通に目にして自然や生き物が、当たり前ものを感じるのは当然のことである。しかし、失ってから初めて気づくものになってしまうのではない世界的に価値あるものだからこそ守り、残すべきものである。そのために、世界自然遺

産登録地に住む者、ここに来る者が、学校教育や社会教育～生涯教育の中で、環境教育を通して、自然や生き物、共生を求める人に親しみ、学び、自分のできる実践行動に結び付けていく必要がある。

(2) 世界自然遺産登録地としての教育的課題から

世界自然遺産登録に至る過程は、専門家や行政や観光業界主導で進みがちであり、一般住民とはどこかかけ離れた感覚があったようだ。本研究に取り組む以前の令和2年度当初、本校の児童生徒も保護者も、世界自然遺産登録について意識が高いとは言いがたい実態であった。自然と生命の満ちあふれたところに住む子どもたちが、自然の素晴らしさ、生命の輝きに興味を抱いていない様子を感じ、都会的なものにあこがれ、自然や生き物にあふれる故郷を「何もない田舎」と評する子どももいた。ありふれた日常の光景に、感動やありがたみを感じないのは、どこに住む者（大人も子どもも）であろうと同じなのかもしれない。

ここで、基盤に置きたいのはE S DからのSDG sの達成を目指す教育である。その中でも、本校のような地理的条件・生活条件を考慮すれば、SDG s ウエディングケーキモデルの生物圏6・13・14・15を重点に、自然の摂理や不思議、生命の神秘や連続性などを、感性を揺り動かされる体験を通して学んだ子どもたちは、少しずつ変わっていくはずである。全教育活動を通して行う環境教育は、各教科等との関連を図りながら、子どもたちの獲得した知識と知恵は、長い人生の中の様々な「学び」の場面で、基盤となり、生かされて、ものの見方・考え方や生き方を支える「生きる力」となっていくと信じる。

2 環境教育で学力を高める

(1) 表現・発信する力をつける取組

いくら環境教育が重要と言っても、現在の学校教育では、各教科等を基盤にしていることは事実である。環境教育に取り組んで「学力」が高まったと児童生徒や保護者、教師が実感し、結果が出せなくては、環境教育の価値は上がらない。

ここでは、「表現・発信する力」をつける取組について報告する。

ア 仮説1について

～環境学習の中での体験活動の後に感想をまとめる言語活動の充実を図ることで表現力が高まるのではないか。～

○ 体験と言語活動の一体化を図る稲作活動後の感想文指導から

平成11年度から始まった生活科・総合的な学習の時間・創意の時間を使った単元「体験！育てよう阿室米」は、本校の特色ある教育活動である。学校の敷地内にある約2アールの田んぼで、昔ながらの農具や農作業によって餅米を作り、最終的には、地域の方々と「もちつき大会」をして食べる体験的な稲作活動の学習単元である。校区の各集落の老人会・保護者の方々と一緒に行う農作業を通しての体験学習は、「自然とものと人」のつながりがあってこそで、環境教育の要素で言えば、「人と環境の関わりに関するものと環境に関する人間と人間との関わりに関するもの、その両方を学ぶことが大切であること」「豊かな環境とその恵を大切に思う心を育むこと」などがあげられる。

しかしながら、環境教育の研究に取り組む以前の体験後の感想文には、行ったことに加えて「楽しかった・おもしろかった」「きつかった・つかれた」などの体験に対する浅い考えと拙い文章表現が目立っていた。そこで、令和3年度からは、体験に入る前の説明と体験後の口頭による感想発表と感想文を書く前と後に指導を以下のように行った。

・ 体験に入る前の指導

指導① これまでの活動を簡単に想起させる。例「前は、田植えを行いましたね。植

えた時の苗は何センチくらいだったか覚えているかな?…」など

指導② 活動の目的と注意事項を明確にする。例「今日は、虫つぶしをします。やりたくない人もいるかと思いますが、何のためにするのでしょうか?…」「目・耳・鼻・口・手触りなどを使って、感じ取り、考えながらけがに気をつけて活動しましょう。…」など

- ・ 体験後の口頭による感想発表への指導

指導① 体験活動後の感想を「楽しい」・「疲れた」で終わらせない。例「五感を働かせて感じたことや考えたことをみんなに伝えてごらん。…」「へえ～いいところに気づいたね。いい言葉を使って伝えてくれたね。…」

指導② 挙手は、意欲の表れ。当たらなくても挙手することで花丸OK。例「手を上げてくれた人は、今日の活動での学びがいっぱいだったんだね。ありがとう。教室に帰って、たくさん感想文に書いてね。…」

- ・ 感想文を書く前と後の指導

指導① A4紙を残さず、すべて使い切って書かせる。書いている最中に、体験活動の様子や学びを教師が語る。例「虫をつぶすときの手の感触はどうだった?どんなことを考えながら、虫をつぶしていたの?…」

指導② 花丸やAで評価をする。子供たちに発表させたり、教師が代読したりする。例「〇〇くんはAAです。どこがいいのかを聞いて、後から教えてね。」

- ・ 令和3年度の「虫つぶし」体験後の感想文より

ごめんね 虫つぶし 4年 K児

5月24日(月) 今日、虫つぶしがありました。わたしは、とてもいやでした。虫をつぶすには勇気が必要で、いつもすぐにはつぶすことができませんでした。しかし、わたしたちにとっては大事なお米なので、正直、虫に食べてほしくはありません。でも、虫にとっては生きていくために食べているだけなので、殺されたくはないはずです。私たちも一生けん命お米を作っているのです、しょうがない気持ちでした。

命をとってしまうということは、悲しいけれど、私たちが食べるお米がなくなってしまうので、ごめんなさいという気持ちでがんばりました。

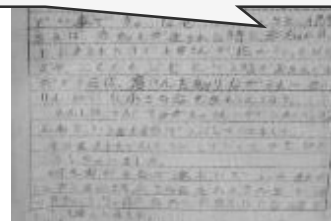
本校の稲作活動は、手植え、鎌による稲刈り、唐箕や足踏み脱穀機を使った脱穀作業、除草剤や農薬・化学肥料を使わない昔ながらの農法にこだわって、環境配慮型の稲作体験学習を行っている。「虫つぶし」は、葉を巻いて潜む害虫(イネ科の植物を食害する蛾や蝶の幼虫)を潰す手作業で、抵抗感がある農作業である。しかし、その分、この体験を通して生命について深く考えさせられる体験活動といえる。

このことについて、文章化することは、「生と死」「人と生き物の関わり」などについて強く感情を揺さぶられる体験からの学びとなり、どのように表現するかは子供たちなりに苦悩する。個々人の発達段階によるが、体験と表現の一体化を図り、表現力が高まる大きな実践となった。



～命を奪うことをするのはとてもひどいことです。～例えばお母さんという命は危険を知らず一生懸命小さな命を生もうとしています。～わたしは、つぶすのがとてもいやでこわくて～

～イネを守るために、虫をたくさんつぶしたいけれど、つぶされる方はとてもかわいそうです。つぶしたとき「プチッ」という感覚がして～



イ 仮説2について

～「みどりの小道環境日記」に取り組むことで、多面的、総合的に考える力や批判的に考える力を高め、コミュニケーションを行う力（表現・発信力）が高まるのではないかと。

「みどりの小道環境日記」の取組から

(ア) 取組の期間や方法

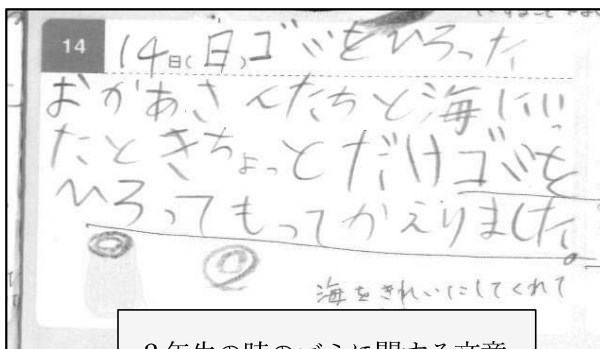
「みどりの小道環境日記」とは、生態系や生物多様性の問題、食糧問題や水問題、気候変動や大気汚染、ごみ問題など環境問題の今を知り、そういった「環境」に関係したことについて日々の生活の中で体験したことや、発見したこと、心に残ったことを毎日日記に書く取組である。そして、1週間終わるごとにその週に書いたことについての気づきや反省をメモ欄に書くようにし、児童の日記には、担任が毎日コメントを書くようにした。

令和3年度は、6月1日から7月26日の8週間「みどりの小道環境日記」に1年生から6年生までの全児童が取り組んだ。2年生以上は、昨年度に引き続き2年目の取組となった。

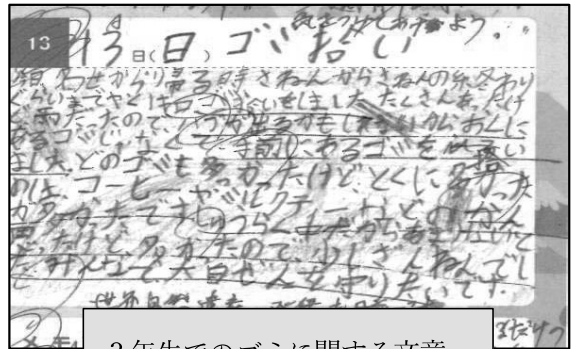
(イ) 個人の1年目の取組と2年目の取組の比較

1年目の2年生での取組は、1年生の時から生活日記に取り組み、既習漢字も増えたため、文章力がついてきており、長く文章を書くことができていた。また、毎日の文章に合わせて内容にあったイラストもつける工夫もしていた。内容においても、リサイクルやごみのこと、水の節水のことや電気の節電のこと生き物についてなど、環境に関する様々なことを書くことができていた。しかし、「お母さんたちと海へ行ったとき、ちょっとだけひろって帰りました。」というように、活動したことや発見したことなどについての記述のみで、感想やその活動に対する自分の考えなどについては書くことができていなかった。

2年目の3年生での取組は、書く内容が身の回りのことに限らず、新聞記事から考えたことや天気や台風などの気象について、世界遺産登録についてなど時事に関することなど、1年目より広がりが出てきた。また、文章についても、感じたことや考えたことなどの感想や、自分の知っている知識なども書かれており、より詳しく濃い内容のものを書くことができるようになった。



2年生の時のゴミに関する文章



3年生でのゴミに関する文章

この継続した学習活動は、表現・発信する力を全教育活動で高めたと言える。

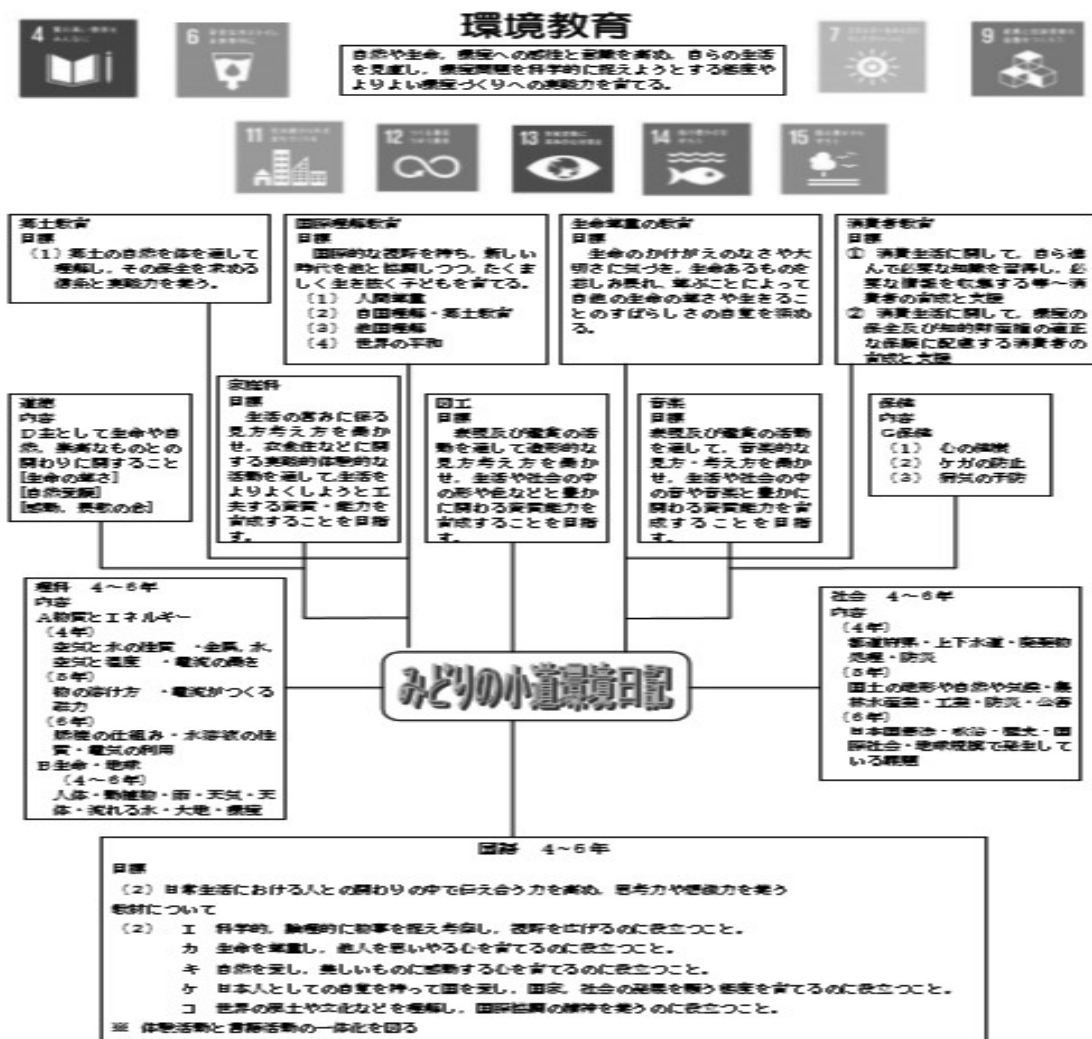
令和4年1月2月3日に行われた鹿児島県教育委員会指定「環境教育」研究公開研究授業において最も評価の高かったのは、まさに児童生徒の表現・発信する力で「発表場面や振り返りを文章化する場面での姿に感心させられた」と言う多くの参観者の声をいただいた。

もちろん、「みどりの小道環境日記」は、令和5年度も継続した取組をし、全国コンクールの結果が待たれるところである。

みどりの小道環境日記受賞記録

年度	参加学年 (人数)	応募率	金賞	銀賞	銅賞	佳作	若葉賞	学校賞
2年度	3～6年 (8人)	100%			1 (小3)	3 (小3・ 4・6)		
3年度	1～6年 (16人)	100%			1 (小5)	4 (小3・ 4・4・6)	3 (小1・2・2)	団体の部 優秀賞
4年度	1～6年 (17人)	100%	1(小6)	2(小5・5)	3(小3・ 4・5)	1(小6)	1(小2)	団体の部 優秀賞

(ウ) 環境教育とみどりの小道の位置付け



VI おわりに

持続可能な社会の創り手となる人材の育成は、学校教育と社会教育との関連を図り、生涯教育の観点で捉えていく必要がある。現在行っている環境教育をしっかりと教科等の学習と関連付け、横断的・総合的な学習として成立させ、SDGsを目指す教育の一つとしていくことが大切である。

そのために、県内外の各学校が、実態に応じて様々な環境教育の実践を行うことが大切である。学校同士がつながり、共に質の高い教育活動を目指すことにより、全教育活動が活性化され、持続可能な社会の創り手の育成につながっていくと考える。今後は、本研究の成果と課題を基にした教育活動を持続させていくために、カリキュラム・マネジメントの充実を更に進めていきたい。

河川・水教育で広げるアクティブ・ラーニング ～機関庫の川から学ぶ自分達の生活と自然環境とのつながり～

北海道帯広市立豊成小学校
校 長 平野 司
主幹教諭 河村 晋一郎

I 学びの土台となる「キャリア教育」

豊成小学校の川にかかわる学習は本校の教育課程編成の特色である「キャリア教育」が土台となっている。

近年、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造の変化は目まぐるしく、さらには新型コロナウイルスの世界的感染拡大など、まさに予測困難な時代を迎えようとしている。このような時代の変化は、子どもたちの心身の発達にも大きく影響し、例えば、自分で意思決定ができない、自己肯定感をもてない、人間関係をうまく築くことができない、将来に希望をもつことできないなど、とくに精神的・社会的側面における発達のアンバランスさが指摘されている。

私たちは、このような子どもたちが、社会の変化に流されることなく、様々な課題に対して柔軟にたくましく対応し、希望をもって自分の未来を切り拓いていく人に育つことを切に願い、平成24年度から、「キャリア教育」を教育課程の中心に置き、カリキュラムマネジメントを進めている。

「キャリア教育」とは、

「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」

であり、これを全ての学年、全ての教科、全ての教育活動において継続して行うことが重要である。

「キャリア教育」において身に付けさせたい能力（基礎的・汎用的能力）とは、以下の4つを指す。

<p>◇人間関係形成・社会形成能力 他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーションスキル、リーダーシップ等。 多様な他者の立場を理解したり、自分の考えを正確に伝えたりする力。また、自分の役割を果たしつつ、他者と協働し、今後の社会を積極的に形成することのできる力を指す。</p>	<p>◇自己理解・自己管理能力 自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機づけ、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動力等。 自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、周囲との関係を保ちつつ主体的に行動したり、自分の感情を律し学び続けようとしたりする力を指す。</p>
<p>◇課題対応能力 情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等 仕事をする上で様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立て解決する力を指す。自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものである。</p>	<p>◇キャリアプランニング能力 学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等。 働くことの意義を理解し、多様な生き方を知り、主体的に判断してキャリアを形成していく力を指す。社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要な能力である。</p>

（中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」より抜粋）

前出の答申では、「これらの能力は、それぞれ独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある包括的な能力概念であり、学校や地域の特色によって、具体的能力を設定し、工夫された教育を通じて達成することが望まれる。」と記されている。

本校における「機関庫の川を活用した学習」は、キャリア教育の中の一つである。機関庫の川をフィールドとした学び、水とのかかわりの中で育まれる力はいつも、キャリア教育で身に付けたい4つの能力と強く結びついている。機関庫の川がそばにあるという特色を生かし、練り広げられてきたこれまでの学習の様子や、育まれてきた力を、この後紹介していきたい。

II 機関庫の川を活用した学習の歴史

本校の校舎の北西に流れる、十勝川水系「機関庫の川」。全長約6キロメートルの上流には農地が広がり、本校周辺は中流域にあたる。名称の由来については、かつてこのあたりに、「十勝鉄道」という鉄道が敷かれており、その機関車を入れる「機関庫」の前を流れる川、というものが一般に知られている。自然豊かな身近な川辺として、昔から周辺住民や子どもたちに親しまれる存在であった。川幅2m、深いところでもひざほどの深さ、流れも穏やかで、学習に遊びに、最適の川である。

本校がこの場所に新築移転してきたのは、11年前。それ以前にも、遠足や校外学習で機関庫の川を利用し、川遊びや生き物捕り、ウチダザリガニの駆除などを行っていたと伝え聞いている。

平成25年度、校舎をこの場所に移転してからは、3年生の総合的な学習の時間を中心に、本格的な活用が始まった。帯広市が、校舎新築の際に、機関庫の川を学習材として活用できるようにと計画し、現在のテラスが設置されたと聞いている。子ども達は、テラスから中庭に出て、ほんの数秒で川に入ることができる。

本校においては、様々な立場から学習を支えてくださる地域ボランティアの存在がとても大きい。川にかかわる学習においては、本日の3年生の授業でガイドをしていただく地域ボランティア「十勝多自然ネット」をはじめ、サケやニホンザリガニの飼育について監修指導して下さる専門家など、地域とのつながりが学習を支え、また広がりをもたせてくれている。

平成30年度からは、河川財団の助成を受けながら、川を活用した教育活動のための環境整備に力を入れてきた。ライフジャケットや観察用具、飼育設備などを整備することができ、充実した学習を行うことができるようになった。

また、「日本河川教育学会(河川教育大学間ネットワーク)」の先生方の指導助言をいただき、川や水にかかわる教育内容の充実を図りながら全学年の学習をつなぎ、6年間のカリキュラムを整理してきた。全学年の学習につながりをもたせながら取り組んでいる。

このように、多くのつながりの中で成長を続け、今の本校の川の学習がある。

III 川・水にかかわる学習で身に付けられる力

「水」は、我々生物と大きくかかわりを持ち、特に人間社会においては、日常生活や経済活動に必要な不可欠な存在である。日常生活に当たり前に存在する、この「水」についての学びは、各学年、各教科等の学習内容にちりばめられており、みずみずしい感性を育て、理性を培い、生きる力に必要な資質・能力を育てている。現学習指導要領においては、社会科や理科の学習に、水や川に関する自然環境や自然災害についての内容が新たに加わるなど、より一層の充実が求められているところである。

本校においては、機関庫の川が身近にあるという利点を生かし、自然環境の素晴らしさや不思議さなどの気付きから探究活動へと促したり、自然とかかわりながら生きる自身の生き方を考えさせたりすることへつなげることができる。キャリア教育の視点から、川・水にかかわる学習で身に付けられる力を、以下の4つに整理し、主体的・対話的で深い学びを通して、これらの力を育てている。

1 探究的な学習態度を身に付けられる ⇒ 課題対応能力

子どもたちはひとたび川に入ると、全身の感覚をつかって、水とのかかわりを楽しむ。水の冷たさ、美しさ、心地よさ、流れの強さ、圧力、土地のつくり、またはそこに棲む生き物やその環境など、様々な感覚で不思議や驚きを吸収している。川は、子どもたちが探究したくなる素材にあふれている。

それらの「なぜ？」や「もっと知りたい」を課題とし、意欲的に情報の収集・整理・分析を行う中で、探究的な学習態度が身に付いていく。仲間と協力し合いながら主体的に活動し、課題を解決したり、次の課題へ向かったりする力が育まれていく。水とかかわる活動の多くが、「課題対応能力」の育成に役立っている。

2 環境と自分達との関係を考えられる ⇒ 自己理解・自己管理能力、キャリアプランニング能力

見いだした疑問を解決したり、川のためにしたいことに取り組んだりする中で、子どもたちは、自分と身近な環境とのかかわりについて深く考え、この豊かな環境を大切にしようとする心を育てていく。知識



のみではなく、責任ある行動をとることや、主体的に行動しなければならないという、自身の生き方につながる思いをもつことになる。環境を自分事として考えることが「自己理解・自己管理能力」そして「キャリアプランニング能力」の育成に役立っている。

3 命のつながりを考えられる⇒ 自己理解・自己管理能力

子どもたちにとって、最も身近な外来種、それはウチダザリガニである。本校では、全学年が川に入るたびに捕まえたウチダザリガニを駆除し、それを6年生が堆肥化する活動を続けている。外来種といえども、ひとつの命をもった生き物である。そこに大きな命の問題が生じる。6年生の子どもたちは、その命の問題に正面から向き合い、ザリガニ堆肥を作ることで在校生にどんなことを伝えようかと考える。道德での学習と抱き合わせながら、命のつながりについて真剣に考える大切な機会となっている。こうしたことは、意義を感じることでどう主体的にかかわるのか、自分の役割とは何か、自己の生き方について考える力を育てている。身近な環境の問題と自分とのかかわり方を考えることは「自己理解・自己管理能力」の育成につながっている。

4. 自分らしい生き方を考えられる ⇒ キャリアプランニング能力、人間関係形成・社会形成能力

低学年の川での学習には、近隣の高校生がボランティアとして協力してくれている。子どもたちは、大きな高校生と活動をする中で、良好な人間関係を形成し、憧れを抱いたり、なりたい自分を思い描いたりしながら活動している。中高学年になると、川での学習は、問題解決のために仲間と意見交換をしながら協働して学習を進めることが中心となる。また、専門家や外部講師に対し尊敬の気持ちをもって接しながら、よりよい関係を築く機会でもある。

川は、子どもたちにとって、コミュニケーション能力やチームワークを育て、その中で、人とのかかわり方を学んだり、自分の生き方について考えたりする力を育む場となっているのである。自然を媒介として「人間関係形成・社会形成能力」を育み、自分の生き方を考える「キャリアプランニング能力」の育成にもつながっている。

IV 日本河川教育学会「アウトリーチ活動」による学びの深まり

本校では、日本河川教育学会（河川教育大学間ネットワーク）のアウトリーチ活動による協力を得て、教育内容の充実を図ってきた。授業に直接かかわっていただくことはもちろん、講習会、講演会、指導案検討など、様々な形で、授業づくりや教職員の資質向上を進めている。

プロジェクトWET講習会 ～令和3年2月27日～

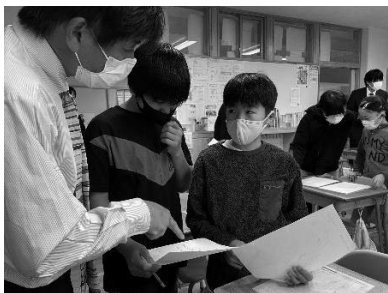


アクティビティを通して、主体的・対話的な手法で水に関する学びを深める教育プログラムを学んだ。

5年生「流れる水のはたらき」授業協力 ～令和3年10月20日～

ファシリテーターとして日本河川教育学会会長 金沢緑先生、エデュケーターとして広島県福山市立引野小学校 藤江浩子先生をお招きし、グループ活動やグループ発表を交えながらの1日講習を行った。

北海道教育大学 境智洋教授には、5年生の理科「流れる水のはたらき」の授業づくりにご協力をいただいた。子どもたちが課題意識をもって流水実験活動を行うことができるような単元計画と教材開発について、機関庫の川に実際に入ること、子ども自身が見出した課題を解決していく授業を展開し、境教授にも実際に子どもたちとかかわりながら、課題解決の様子を見ていただき、助言をいただいた。



河川教育講演会 ～令和3年10月20日～

日本河川教育学会会長 金沢緑先生を講師としてお招きし、講演会を開催した。「河川教育の価値と目的」と題して、各教科や総合的な学習の時間の目標や趣旨から、河川教育が果たす役割について、また、子どもの探究心を膨らませるための教師の言葉掛けについて、実践につながるお話を拝聴した。



6年生「大地のつくり」授業協力 ～令和3年12月10日～

北海道教育大学 境智洋教授には、6年生の理科「大地のつくり」についても授業づくりにかかわっていただいた。ふるさと帯広の大地がどのように形成されたのかを、子どもたちが意欲的に探究できるように、地層をはがした模型づくり、流水による地層のでき方や火山の仕組みについて、提供いただいた実験装置を使用し、子どもたちがイメージを膨らませて活動することができた。



大型地図および十勝川流域立体模型の作成 ～令和4年6月22日～

4年生「自然災害からくらしを守る」で使用する札内川流域の大型地図、5年生「流れる水のはたらき」で使用する十勝川流域の立体模型について、北海道開発局帯広開発建設部に作成していただいた。

V まとめ

本校は、行政、近隣高校、地域ボランティアの方々のご協力をいただき、様々な実践を行うことができている。これらの連携体制を基に、身近な河川を学習材の中心として学びを進めることで、そこに暮らす生き物や流域探し、教科との関連など、学年のつながりを整理して展開することができている。本校の各学年の教育課程として、確立した内容があることが大きな積み上げの要因であることは間違いない。

このように、10年以上にわたって、身近な環境と自分の生活との関係、自分自身の生き方を考えていくことにつながる実践に取り組むことができていることは、本校の大きな成果といえる。

今後は今までの取組を土台として、さらに先生方の思いを取り入れ、子どもたちの「やってみたい」という意欲をより具現化できるよう、教育課程の精選を行いながら、河川教育の活動を推進していきたい。

水にかかわる学び全体計画		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		水に親しむ体験活動	川を利用した探究活動	地形・流域・土地の変化	治水・利水	生物と環境・水の循環	自然災害・防災	生態系・環境を守る取組			
1年生		(生)いそががつこうたんけんたい	(生)なつとなかよし	(生)みんな生きています		(生)あきとなかよし			(生)ふゆとなかよし		
2年生				(生)みんな生きています				(生)みんな生きています			
3年生	(総)サケの稚魚放流 (社)市ようす	(総)「機関庫の川と友だち」① ①川に親しむ・生き物探し ②水生生物による水質調査 ③水質調査・水質テスト ④生き物調査・外来種駆除活動	(総)「機関庫の川と友だち」② ②機関庫の川の未来を考え、個人の課題を設定し、環境保全に向けた探究活動をする。	(総)「機関庫の川と友だち」③ ③「機関庫の川と友だち」③活動をまとめ、学校内外へ発信する。							
二ホンザリガニの飼育・観察 (12月～4月) サケの繁殖・飼育・観察											
4年生	(社)北海道の地形 (社)水はどこから	(理)地面を流れる水のゆくえ (社)十勝の農業 (理)メダカのたんじょう (外来種) (理)植物の発芽と成長 (家)ゆでて食べよう インゲンマメによるザリガニ二堆肥の効果を検証	(社)水道出前授業 (社)浄水場・下水処理場見学	(社)自然災害からくらしを守る (総)親子防災教室	(理)自然災害からくらしを守る (理)台風と気象情報						(理)水のゆくえ
5年生	(社)北海道の地形 (理)植物の発芽と成長 (家)ゆでて食べよう インゲンマメによるザリガニ二堆肥の効果を検証	(理)メダカのたんじょう (外来種)			(理)流れる水のはたらき		(社)自然災害を防ぐ	(社)環境を守る私たち (水質汚濁)			
6年生		(理)生物どうしのつながり (外来種)			(理)大地のつくり (総)ザリガニ二堆肥をつくらう						(理)自然とともいきる (生態系を守る)
全学年共通 道徳・特別活動		各学年の教材園を使って、ザリガニ二堆肥を活かした栽培活動、収穫、試食		遊園訓練 (H28.8の水害について考える)							はあとふる集会「命のつながり」を考える 6送会ザリガニ二堆肥の引継

3年生

総合的な学習の時間「機関庫の川と友だち」では、年間を通して機関庫の川とかかわる。生き物探しや水質調査などの活動を通して、機関庫の川に興味を持ち、追究したい課題を個人がもてるようにする。その課題を解決していく中で、環境保全の考えや郷土を愛する心などを育んでいく。活動を通して感じたことや伝えたいことを、相手意識をもたせながら発信することも大切に取り組む。

1年【生活】
「なつとなかよし」
2年【生活】
「みんな生きていく」



教科等	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間	「機関庫の川と友だち」①											
	サケの稚魚放流 ①川に親しむ生き物探し ②水生生物による水質調査 ③バツクテストによる水質調査 ④生き物調査外来種駆除活動											
飼育観察活動	ニホンザリガニの飼育・観察											
	サケの飼育・観察											
社会	市の様子											
	「機関庫の川と友だち」② 機関庫の川の未来を考え、個人の課題を設定し、環境保全に向けた探究活動をする。											
教科等	「機関庫の川と友だち」③ 活動をまとめ、学校内外へ発信する。											
	サケの繁殖・飼育・観察											
社会	4年【社会】水はどこから											
	4年【理科】地面を流れる水のゆくえ											
教科等	4年【社会】北海道の地形											
	4年【理科】地面を流れる水のゆくえ											
社会	4年【社会】北海道の地形											
	4年【理科】地面を流れる水のゆくえ											



Googleearth
河川地図
活用

4年【社会】
北海道の地形

5年生



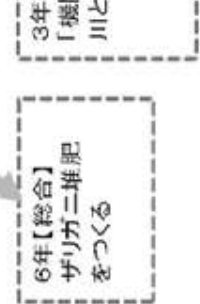
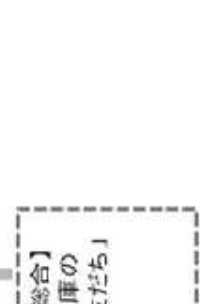
5年生の社会では、我が国の地形や気候などを理解し、国土の自然条件と自然災害の関連が深いことを学ぶ。また、理科においても、4年生「地面を流れる水の行方」からのつながりがあり、流れる水の動きと土地の変化の関係についてとらえ、長雨や集中豪雨をもたらす自然災害について考える。理科と社会を歩きながら、災害への心構えを身に付けていく。流れる水の動きによる土地の変化の学びについては、機関庫の川の流れが実際に活用できる。また、「植物の発芽や成長」および総合的な学習の時間の栽培活動において、ウチダザリガニを活用した堆肥の効果を検証し、次年度の活動へ意欲をつなげる。

教科等	4年【社会】 北海道の地形	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間	「十勝の農業を体験しよう」ザリガニ堆肥を活かした農園での栽培活動											
教科等	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
社会	北海道の地形	十勝の農業								自然災害を防ぐ	私たちの生活と森林	環境を守る私たち(水質汚濁)



教科等	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
家庭科			ゆでて食べよう(試食)	4年【理科】 地面を流れる雨水の行方								

理科	植物の発芽と成長	メダカのたんじょう(外来種)	流れる水のはたらき	台風と気象情報								
-----------	----------	----------------	-----------	---------	--	--	--	--	--	--	--	--



6年生

水に親しむ体験活動

川を利用した探究活動

地形・流域・土地の変化

池水・刺水

生物と環境・水の循環

自然災害・防災

生態系・環境を守る取組



理科「生物どうしのつながり」では、機関庫の川の生態系を扱い、生物と環境とのかかわりについて多面的に調べていく。また外来種ウチダザリガニの存在、命の問題についても十分考えたうえで、堆肥づくりを行う。3月の「自然とも生きる川」において、これまでの6年間の環境にかかわる学びをつなげ振り返ることができる。また、地層のでき方を学ぶ「大地のつくり」では、機関庫の川の礫の様子から、流れる水のはたらきによる地層のでき方について考える。

教科等	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間							ザリガニ堆肥を作ろう					

5年【理科】
流れる水のはたらき

教科等	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
理科				生物どうしのつながり				大地のつくり				自然とともに生きる(生態系)



Project
WEI「驚異の旅」活用

中学2年【理科】
自然と環境
・自然界のつり合い
・自然環境の調査と環境保全



はあとふる集会
「命のつながり」を考える

ザリガニ堆肥引き継ぎゼミ

□ 誌上発表 □ P 3 9 ~ 8 1

- 1 「地域とともにある学校づくり」の実現に向けて
～E S Dの取組への可能性を探る～
神奈川県厚木市立毛利台小学校 校 長 山田 香……39

- 2 地域の特色を生かした環境教育の推進
～河川環境学習（3・4年生）を中心に～
宮城県気仙沼市立面瀬小学校 校 長 佐藤祐美子
河川教育担当 大内 哲夫……46

- 3 海と人のつながりから持続可能な未来社会を考える子どもたち
～教育課程特例校の特設領域「海と生きる探究活動」を通して～
宮城県気仙沼市立鹿折小学校 校 長 小野寺裕史……56

- 4 すがおの「ひと・もの・こと」と関わり、郷土を愛し、郷土を守る力を育てる総合的な学習の時間
福岡県北九州市すがお小学校 校 長 島田 剛……64

- 5 ESD を主軸とする中学校3年間を通した環境教育カリキュラム
～「確かな学力や生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒」の育成を目指して～
長野県山ノ内町立山ノ内中学校 校 長 山口 近
研究主任 島田 俊哉……74

「地域とともにある学校づくり」の実現に向けて ～ESDの取組への可能性を探る～

神奈川県厚木市立毛利台小学校
校長 山田 香

I はじめに

本校は、神奈川県厚木市南部の小高い丘の上に位置している。昭和55年に開校し、現在は全校児童464名の中規模校である。特別支援学級を含めたクラス数は、21学級ある。学区には、高松山や恩曾川があり、自然豊かな環境に恵まれている。また、閑静な住宅地の中にあり、子ども達は多くの大人に見守られながら学校生活を送っている。

本校は『心豊かにたくましく生きる子どもを育てる』を学校教育目標とし、「学校運営協議会」を核とした保護者や地域に信頼される学校、「地域とともにある学校」を目指す。

令和3年度・令和4年度の2年間全国小中学校環境教育研究会会長關口寿也先生をお招きし、ESD研修会を実施した。研修の中で「地域を基盤とし、身近な環境に興味を持つことが持続可能な未来へ向けての人材育成につながる」というご助言をいただき本校がこれまで歩んできた「地域とともにある学校づくり」とESDの取組が合致するという実感を持つことができた。

本稿では、まず、コミュニティ・スクールの基盤である学校運営協議会について述べる。次に学校運営協議会とともに展開した教育活動の実践例として令和4年度の3年生の活動、また厚木市が推進する事業として令和5年度の5年生の活動について述べる。最後に地域を基盤とした教育活動とESDの取組の今後の展望について私見を述べる。

II コミュニティ・スクールについて

平成30年6月には、保護者や地域住民が学校運営に参画し、地域社会総ぐるみで子どもたちの健全育成や学校運営の改善に取り組むことを目的とした「学校運営協議会」が発足し、「コミュニティ・スクール」となった。

さらに、令和4年4月には、近隣の南毛利公民館に「地域学校協働本部」が設置され、本校の学校運営協議会委員が「地域学校協働活動推進員」となったことで、さらに地域との連携が一層強化され、より多くの幅広いネットワークの活用が可能となった。そこで、本校の特色ある教育活動として、学校運営協議会や地域学校協働活動との連携・協働を図り、『地域とともにある学校づくり』の実現に向けた取組を行っている。

① 学校運営協議会について

19名で構成されており、内訳は本校教員6名、地域住民13名である。

② 地域学校協働本部

コミュニティ・スクールの活動の核となる。学校運営協議会の各グループのリーダーと本校職員（学校コーディネーター）、近隣の南毛利公民館長、市より選出された「地域学校協働活動推進員」で構成され、活動の具体案が検討される。月に1回本校で開催される。各学年の児

童に対するニーズを担任から学校コーディネーターに伝え、学校コーディネーターが月1回の地域学校協働本部で提案する。提案を受けた本部が各学年職員と連絡を取り合い、具体的な地域学校協働活動がスタートする。これまでの活動事例としては、1年生の下校の見守り活動、ミシンボランティアや秋のおもちゃ作りの補助、机・椅子の調整作業など学校を支援する活動がほとんどであった。

令和3年度までは、学校をサポートする意味合いが強い支援活動が主な活動スタイルであった。



しかし、令和4年度に地域学校協働活動推進本部が発足したことをうけ今後の活動についてさらに熟議が行われ以下のような意義を見出すことができた。

③ コミュニティ・スクールにおける地域学校協働活動の意義

活動の基本として特に以下の2点を大切にしている

- 学校と地域も双方向での、互恵的（Win-Win の）関係となるように活動していく。
 - ・学校の活動をボランティア活動として「手伝う」という支援活動ではなく「学校と地域で子どもたちを育てる」という協働活動を意識する。
 - ・学校が活動を提案するだけでなく、地域からの提案も在りうる。
- 子どもたちが、地域へ愛着を持ち、地域をよりよくしていこうという未来の造り手として力を発揮できるような教育活動を学校と地域が共に知恵を出し合いつづいていく。

このような考え方を基盤とした実践例をⅢで紹介する。

Ⅲ 実践例

① 3年生 総合的な学習の時間「毛利台を盛り上げようプロジェクト」

○3年生は、例年地域をテーマに活動をしていた。クラスごとに地域を回る「地区たんけん」を通して気が付いたことを新聞にまとめるといった「地域を知る」活動が主流であったが、令和4年度は、「より主体的に子どもたちの探究心にそった活動を」という願いのもと、「地域を知る」から一歩進め、地域を知った上で「自分たちでできることで地域をよくしたい」という気持ちを引き出すことができた。コミュニティ・スクールとしても一方方向ではなく相談しながら活動を作っていくという体制が整いつつあった時期であったことから、担任と地域学校協働本部が互いに相談を重ね、子どもたちの活動を作っていくことができた。以下時系列で活動をまとめた。

【令和4年10月上旬】プロジェクト発足

- 3年生が考えた内容で行う「毛利台を盛り上げようプロジェクト」の第1回グループ会議
 - *グループは、クラスごとではなく、自分の興味のあるところで、活動を行う。
- 各グループに分かれ、地域でどんな活動ができるかを考える。最終的にできたグループは次の3つとなった。
 - ①生き物調査隊 ②毛利台安全マップづくり ③地域への花植え

- 地域学校協働活動推進本部の際に、3年職員が地域での活動について相談をする。
 - ⇒様々な関連の団体に連絡・調整をしていただき、実際に地域へ出での活動をする事となった。

【令和4年11月上旬】各グループで活動内容を具体化する

- 各グループで、実際に地域に出た時の活動内容について確認をし、準備を行う。
 - ①生き物調査隊⇒恩曾川へ行き、実際に生き物の調査や、ごみ拾いを行う。
 - ②毛利台安全マップづくり⇒実際に地域を歩いて危険なところを見つける実地調査を行う。
 - ③地域への花植え⇒毛利台児童館への花植えと近隣の公園へのポスター掲示をする

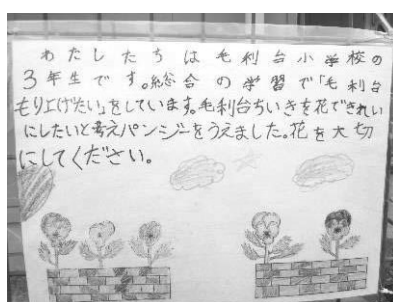
【令和4年11月中旬】地域の方と協働で活動を実施

- 3グループに分かれ、実際に地域に出での活動を行う。
 - ★当日は、厚木市役所公園緑地課の方2名、自治会長さん2名、PTA役員2名、学校運営協議会委員（地域学校協働活動推進委員、民生委員含む）3名、児童館の職員等多くの地域の方に、協力していただき、活動を行った。

活動のはじめに、
「盛り上げ宣言」をしました！



活動当日の様子
児童館への花植え・ポスター掲示

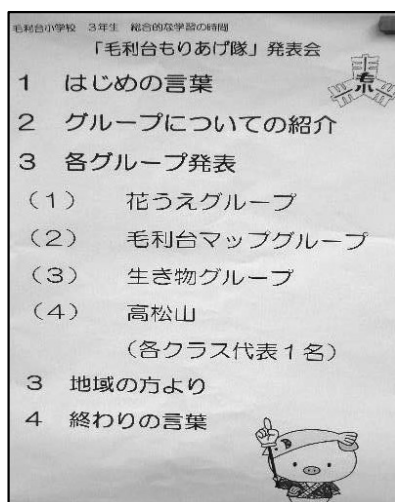


【令和4年3月上旬】学習発表会をする

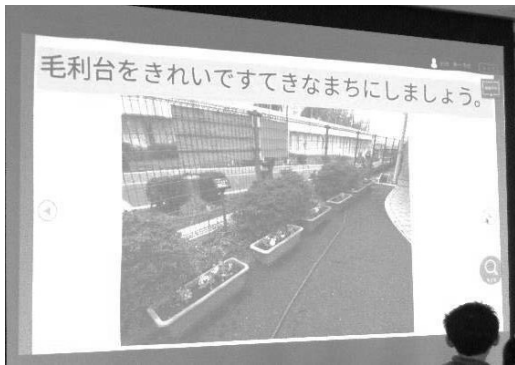
活動について各グループでまとめ地域の方に向けて発表会を行った。

発表場所は、より地域の方が集いやすい場所として近隣の「老人憩いの家」で行った。

地域学校協働活動推進本部を通じて地域によびかけて30人ほどの地域の方に出席していただいた。



《①花うえグループ》



《②毛利台マップグループ》



《③生き物グループ》



《最後に・・・地域の人から》 学習発表会について感想をいただいた。



○学習発表会後には、地域学校協働本部推進員、兼学校運営協議会の方を中心に、毛利台小学校の「みつやパートナー」についての説明会を実施し、今後の活動への協力をお願いした。



○地域の方と協働で約5か月間の活動を進めてきた。児童の発想を大切にしながら様々な場所にでかけての活動であったため担任3名だけの力では行うことができなかった活動である。活動を通して児童は自分たちの住む地域の良さや課題を改めて体感することができた。3つのグループ（①生き物調査隊②毛利台安全マップづくり③地域への花植え）がそれぞれの観点で地域への思いを強めることができた体験であった。また最後の発表会を通じて地域の方に「学校と地域の協働活動の意義」についてイメージを持っていただけたことも今後の活動を継続する上で大きな成果であった。

② 5年生「総合的な学習の時間」恩曾川調査隊

この活動は、厚木市都市整備部河川ふれあい課が推進する事業である。毎年5年生の環境教育の一環として学校、厚木市役所、近隣にある東京農業大学、地域の方が連携して行っている教育活動である。（正式名は、令和5年度高坪橋親水広場水辺ふれあい事業）

以下概要を述べる。

- 1 事業目的 子どもたちが身近な河川での環境学習に取り組み、環境の実態を把握することで、河川を大切にすることを育む。
- 2 対象 ①南毛利小学校5年生
②毛利台小学校5年生（本校）
- 3 内容 児童がグループごとに決められたエリアで次の調査を実施する。
 - (1)水質調査について
 - ・水の透視度、水温、水の流れ方を調べる。
 - (2)生物観察について
 - ・水生生物の生息状況を観察調査する。
 - (3)川のごみについて（ごみの状況調査）
 - ・ごみによる川の汚れを観察し、河川美化のためごみ収集を行う。

○調査は、近隣大学である東京農業大学農学部野生動物学研究室の協力のもと行った。また地域ボランティアの方にも児童の安全確認のため見守り活動への協力をいただいた。





川に入るのが初めて児童がほとんどであったため児童は大興奮であった。



採取した生き物を満足そうに見せる児童

○地域の特徴や地域のリソースを最大限に活用した教育活動といえる。児童は、小さい頃から慣れ親しんだ川であってもその川に実際に入ってそこで生きる生物に触れるのは初めてであった。またその生物が存在する理由や経年変化などを専門的に教えてもらったことは、身近な環境に対する新しい視点を持つことができたと考える。また川に浮かぶごみを実際に拾ったり、そのことが川に与える影響を聞いたりすることで今後地域住民としてどのように川と関わっていけばよいのかを考えるきっかけとなった。

IV 今後の展望

令和4年度は、コロナ禍を経て、また新たな学校生活や教育活動が再始動するタイミングと、そして、毛利台小学校にとっては、「地域学校協働活動」が始動するタイミングが重なり「地域とともに作る学校づくり」のよいスタートが切れた年度であった。ここ2、3年間でできなくなっていた地域との活動や、教職員の異動により途切れてしまった活動などが、一新され、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動との連携や協働について、教職員と学校運営協議会委員が連携を強化しながら、様々な教育活動について連携や協働についての在り方について熟議することができた。ESDの推進という視点からは、まだまだ実践例が少なく課題の多いところではある。しかし、冒頭で述べた通り、ESDの基本は、まず身近な地域に興味を持ち、自分たちの力でできることを実践してみようとする探究活動であることから考えると本校が築いてきた地域との基盤やコミュニティ・スクールのシステムは、今後のESDの取組に大きく寄与するものと考えられる。また2つ目の実践例からも分かるように近隣の自然、大学、市の協力もいただける恵まれた環境にある。この利点を活かし今後もさらにESDのカリキュラムを充実させていきたいと考える。

地域の特色を生かした環境教育の推進

～河川環境学習（3・4学年）を中心に～

宮城県気仙沼市立面瀬小学校
校長 佐藤 祐美子
河川教育担当 大内 哲夫

1 はじめに

気仙沼市立面瀬小学校は昭和59年に開校。本年度で開校40年を迎える。

校名は地域に流れる面瀬川に由来する。長さ約7.7キロメートルのその清流は、開校以来長きにわたって児童の豊かな「生きた学びの場」としても大いに活用されてきた。

多くの水生生物が生息している面瀬川において、児童は生き物を探したり、採取したり、観察したりしてきた。このような体験活動の際には、川の水辺に児童の歓声が響き渡る。本校の伝統的な河川環境教育が生み出す毎年恒例の光景である。

児童は川の水質調査をしたり、水辺の環境について課題解決を図ったりしてきた。そして、それらをもとに「山と川のつながり」「川と海のつながり」などを学び、河川学習から海洋学習へと発展させ、よりグローバルな視点での地域環境学習を展開している。

また、本校のある気仙沼市はESDの先進的領域として全国的に知られる存在になっており、市内の全ての小中学校がユネスコスクールに登録されている。面瀬小学校は、そのパイオニア的な実践校として、地域に根ざした環境教育を推進してきたと言える。

本稿では、まず、本校の環境教育の概要について生活科・総合的な学習の時間の実践から紹介する。続いて河川環境教育に重点を置いて実践している3・4年生の事例を紹介し、その成果と今後の課題について述べることとする。



2 本校の環境教育の概要

生活科では、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目標にしている。生活科の授業をESDの視点で捉えて実践することは、教科目標の達成と同時に、身近な地域や自然からより広い社会へと学びを広げ、持続可能な社会づくりの担い手を育む第一歩へとつながると言える。

【1学年】

1学年では「おもせのしき」というテーマを設定し、四季折々の地域の自然環境の中で、様々な体験活動を行っている。春には、校地内にあるビオトープで生き物を観察したり、秋には、地域にある神社の境内で木の実や木の葉を見つけたりという活動に児童は生き生きと取り組んでいる。その中で地域の豊かな自然環境に存分に親しむと共に、学習成果の発表や交流を通して、様々な人たちとの関わりを深めている。

【2学年】

2学年では「はっけん おもせ」というテーマを設定し、地域の中で様々な発見をさせることを通して、自然や社会と関わることの楽しさを味わい、地域の良さに気付くことができるようにしている。活動の中心となる2度の「まちたんけん」では、児童が地域の自然や人々と積極的に関わりながら、地域への親しみをより深めている。

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしている。E S Dは、社会の在り方や自分と社会との関わり方に関する人々の価値観と行動の変革を促す教育であり、総合的な学習の時間で探究的に学習する中で、E S Dの資質・能力をより確かな力としていくことができると考える。

【3学年】

3学年では「面瀬の生き物のひみつ」というテーマを設定し、生き物を通して存分に地域の自然に関わっていこうという学習を展開している。児童は、ビオトープや面瀬川、地域の農園等の中で生き物を探したり捕まえたりして、それらを継続的に飼育・観察していく。このような一連の活動を通して、児童は地域の自然の豊かさを感じ取ると共に、その自然環境を保全していこうとする意識をもつようになっている。

【4学年】

4学年では「面瀬川調査隊」というテーマを設定して、川の上流から河口域までの各所の特徴を比較したり面瀬川と人々の生活の関わりについて調べたりする活動を行っている。このような活動を通して、面瀬川の環境を知り、川の特徴や生活への影響について考えると共に、水辺環境を守るために自分たちができることを考え、実践しようとする態度が育まれている。また、川と山、里、海の関わりにも目を向けさせ、河口近くの海での養殖業について調べたり体験したりする活動も行っている。

【5年生】

5学年では「ふるさと気仙沼の海と生きる私」というテーマを設定し、気仙沼の海や水産業の現状から課題を見だし、探究する学習を行っている。ここでは、海洋環境について考えたことや環境保全への自らの思いを発信し、海と共に生きていくために自分たちができることを考え実践しようとする態度を育むことをねらいとしている。「磯の生き物調査」や「養殖場見学」、「マグロ延縄漁船乗船体験」等の体験的な学習や個々に課題を設定しての探究学習に、児童は主体的に取り組んでいる。



カキ養殖場の見学

【6年生】

6学年では「ふるさと気仙沼の未来」というテーマを設定し、気仙沼市内でまちづくりに取り組んでいる人々と関わる活動を通して、まちづくりの課題に気付いたり、探究の結果分かったことをまとめて発表したりする学習に取り組んでいる。漁網をリサイクルして新たな資源にするための活動をしている方や、地域の未来を考えてバイオマス発電に取り組んでいる事業者の方などから学んだことをポスターにまとめ公民館等地域の施設に掲示していただいたりした。



バイオマス発電施設での聞き取り

3 実践事例の紹介

【第3学年「面瀬生き物調査隊」(総合的な学習の時間)の実践より】

3学年では、「面瀬の生き物のひみつ」という総合的な学習の時間のテーマを設定している。

そこでは、1年を通して地域の様々な生物と関わりながら、地域の豊かな自然環境について体験活動を通して実感的に理解すると共に、生き物の生態やそれらを取り巻く環境についての興味・関心を喚起し、課題追究していくことをねらいとしている。

3年生は発達段階として、生き物が大好きな児童が多い。また、理科でも生物に関する単元が多くあるため、科学的な視点からも興味・関心を高める児童も増えていく。

そんな児童に対して、とことん体験活動に取り組みせようとしたのが、この「面瀬生き物調査隊」という学習単元である。主な活動の場は、校地内にあるビオトープ(「オモトープ」という名称)、面瀬川沿いの休耕田を活用した「ふれあい農園」、そして、地域を流れる清流「面瀬川」等である。それぞれの場所で生き物探しを行い、採取したり観察したりする。その際、活動時間を多く確保したり、季節を変えて複数回実施したりするなど工夫することで、「十分に地域の自然に浸らせること」に取り組んでいる。

(1) 面瀬川での生き物探し

面瀬川での活動について紹介する。面瀬川での生き物探しは7月と9月の2回実施した。

地域に流れる身近な川といっても、そこで川遊びをしたり生き物を探したりした経験のある児童は皆無に近い。

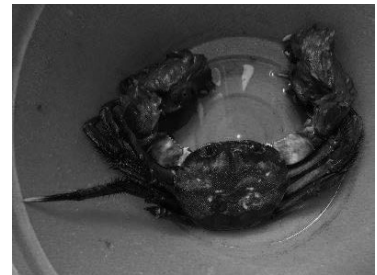
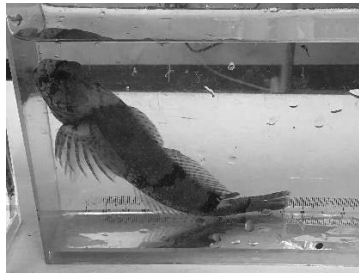
そこで、どんな生き物が生息しているかも分からない状態から1回目の生き物探しは始まった。恐る恐る川に足を踏み入れ、網ですくってみる児童たち。すると、網の中にはヤマメやドジョウ、スジエビやモクズガニ、ヘビトンボの幼虫やトビケラ等の水中昆虫が入ってくる。「魚が捕れた!」「カニがいる!」等々…、初めての体験に川のあちらこちらから大歓声が挙がっていた。3年生の河川環境教育は、ここからスタートしたと言える。

2回目の時(9月)には、宮城教育大学生物学研究室准教授である棟方有宗先生にゲストティーチャーとして参加していただき、生き物の採取方法や川の環境について指導していただいた。その成果もあり、カジカやヨシノボリ、ウキゴリ等、1回目よりも多くの種類の魚類をはじめとするたくさんの水中生物を採取することができ、児童は大いに喜んでいて、また、「ヘビトンボの幼虫は何でも食べる『川の百獣の王』です。それがこんなに多くいるということは、面瀬川がそれだけたくさんの種類の生き物がいる豊かな川だと言えるのです。」「カジカやヤマメはきれいな川にしか棲めません。面瀬川は、それだけきれいな川だということです。」というような棟方先生の話は、児童にとって故郷の川の環境にも目を向けるきっかけになった。



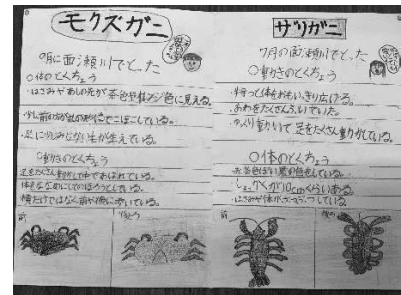
(2) ミニ水族館での観察

採取してきた生き物は、教室前廊下に水槽を設置し約3カ月間飼育・観察した。それ以前から飼育していたオモトープの生き物も併せ、10種類約50匹の生物を飼育したが、「ミニ水族館」として児童が日常的に観察することができたことが大きな成果につながった。授業の時だけでなく、休み時間にも観察する児童が多くいて、そこでたくさんの気づきや発見があった。「ザリガニが脱皮しました。」「カジカが餌を食べるところがすごい。」「モクズガニの雄雌が分かった。」等々報告してくる児童の表情は生き生きしていた。「学習材が常にすぐそこにあって、いつでも見られる。触れられる。」という環境を設定し継続できたことは、児童の興味関心のさらなる喚起や持続につながった。



(3) 面瀬生き物リーフレットの作成・発表

採取活動や観察を通しての「気づき」や「問い」を探究活動に連動させるために行ったのが、リーフレットの作成である。児童は個々に3種の生物を取り上げ、観察や調査の結果をリーフレットにまとめ、参観日の際に保護者の前で発表した。この段階では「観察して分かったこと、気付いたこと」を中心にまとめさせた。そのため、書物やネットに頼ることなく自分の目で見たこと、手で触れて感じたことをイラストや図解を交えながら生き生きと表現することができた。また、保護者への発表に向けても、とても意欲的な児童の姿が見られたことがうれしかった。なお、書物、インターネット等を用いての探究活動は、最終小単元の「生き物図鑑の制作・発表」の中で実施した。



(4) 「面瀬生き物図鑑」の作成・発表

まとめの活動として取り組んだ。グループ毎に2種類の生き物を取り上げ、5グループで計10種の生き物について「図鑑」という形でまとめた。これまでの飼育、観察で得た学びに加え、書籍やインターネット等を用いた調べ学習を重視し、活動を展開した。最後は、2年生の児童に向けての発表会を行った。「相手意識」「目的意識」をもったまとめや発表の学習は、児童の主体的で協働的な学びの姿勢を引き出し、充実した活動となった。

【第4学年「面瀬川調査隊」(総合的な学習の時間)の実践より】

4学年では、「面瀬川調査隊」という総合的な学習のテーマを設定している。

そこでは、面瀬地区を流れる面瀬川の生き物や環境について調査し、水辺環境を守るために一人一人ができることを、自分の生活との関わりから考えていく活動を通して、本校で設定した「知識・

技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に物事に取り組む態度」を育成することをねらいとしている。

面瀬川は、幹線流路延長7.7kmと短く、流域面積も13.3km²の二級河川であるが、自然豊かで様々な生き物が生息している。源流から河口までの様子や生き物について調査することが容易にできることから、各流域と比較検討しながら、水辺環境や自分の生活との関わりについて考え、生活に生かしていこうとする実践的な態度を育成することができると考えた。実践を通して、本校の目指す「自分の考えをもち、行動する児童の育成」の達成にも迫ることができたと考える。

(1) 面瀬川源流での体験・調査

グーグルアースで面瀬川の全体像を見た児童から、面瀬川の始まりに関心が寄せられた。そこで、面瀬川の源流に行き調査を行った。湧き水から始まる幅数cmの川の始まりや水の冷たさ、人工林の様子など、五感を使いながら観察をすることができた。「サンショウウオ」を見つけ、「サンショウウオの生息イコール源流」であることをゲストティーチャーの棟方先生に教えていただいた。山里海のつながりを考えていくよいきっかけとなった。



(2) 面瀬川上流での体験・調査

面瀬川の上流で、水生生物調査を行った。ヨシノボリ、ヤマメ、ヘビトンボ、トビケラなど面瀬川の豊かな自然に触れることができた。棟方先生からは、生き物の捕獲方法を丁寧に教えていただき、教室に戻ってからは、捕獲した生き物について解説をしていただいた。源流・上流ともにパックテストを使用し水質調査も行った。



(3) 面瀬川下流・河口での体験・調査

下流調査では、源流・上流と比べて自然環境の変化や水辺のゴミの状況から、児童は「人々の生活の影響が川の状況に大きく関わっている」と感じた。水生生物調査では、モクズガニやチチブ、クサフグなどの海の生き物やスジエビ、ザリガニ、ヒゲナガカワトビケラなどを採取し、下流でも多様な生き物と自然に触れることができた。ここでもゲストティーチャーの棟方先生から、捕獲した生き物について説明をしていただいた。水質調査の結果から、あまり水がきれいではないことを知り、面瀬川のために何かできないかを考えた。



(4) ワカメの種はさみ体験

面瀬川が注ぐ尾崎漁港でワカメの養殖業に携わっている尾形一仁さんにワカメの種はさみ体験をさせていただいた。美味しいワカメができるためには、面瀬川から海へ流れ込む栄養分が大切だということを教えていただいた。また、過去には赤潮のため養殖ができなくなったこともあることを教えていただき、面瀬川流域の環境についての考えを深めることができた。



(5) 面瀬川できることチャレンジ

面瀬川下流の水生物調査やパックテストの結果、ワカメの種付け体験の際に聞いた話などから、栄養が豊富できれいな水の面瀬川を守るために自分たちにできることを考えた。「台所から油を流さないようにする。」「洗剤を使う量を減らす。」「面瀬川付近のゴミを拾う。」など、様々な取組みが見られ、各家庭で実践したことを動画や写真に撮影し、報告し合った。一度だけでなく、そのまま実践を継続した家庭も多い。



(6) ワカメ VR 体験

ワカメの種付けから商品化されるまでの様子、漁師さんの仕事の様子を VR で体験した。普段、当たり前のように食べているワカメは、朝早い時間から漁師の方々がほとんど手作業で仕事をして育てていることを知ることができた。今回は、ワカメの刈り取り体験の前に見せていただいたが、ワカメの学習に入る段階で見ることによってさらに見通しをもって学習に取り組むことができたと思われる。



4 成果と課題

【成果】

- ・ 3学年では、数回にわたる「生き物探し」の活動を通して、「ふるさとの川・面瀬川」をはじめとする地域の自然環境の豊かさを児童が実感することができた。普段から目にしている面瀬川に、これほどまでに多様な種類の水生物がいることに児童は盛んに驚きを表したり、感動を覚えていたりしていた。「こんなに魚がいるとは思わなかった!」「カニを捕まえて超嬉しかった!」などという喜びの感情は、地域の豊かな自然環境が児童に与えてくれた素敵な贈り物であると考えられる。
- ・ 「生き物探し」という一時的な体験活動のみで終わらず、採取した生物を継続的に飼育・観察する活動は、児童の生き物や環境に対する興味・関心を高めていく上で大きな効果があった。教室前の廊下に並んだ十数個の水槽の中には、自分たちが捕まえてきた「かわいい生き物たち」が棲んでいて、いつでも見られ、いつでも触れられる。このような状況を作り出すことによって児童の継続的な探究活動が可能になっていった。

- ・ 飼育や観察，調査等の活動の成果をまとめて，「面瀬生き物リーフレット」や「面瀬生き物図」を作成したことには，学習の成果を形として残す過程の中で，生き物や地域の自然環境に対する認識を深めたり，新たな気づきを得ることができたりしたという点で成果があった。
これらのことを保護者や下級生に発信する段階では，自分たちが伝えたいことを生き生きと発表する姿が見られ，一連の活動の充実度の高さを感じ取ることができた。
- ・ 4学年では，3学年の活動をベースにして「源流～下流～海」を舞台にした探究学習を行ったのだが，児童は3年生時の学習で高めた河川に関する興味・関心をそのまま生かして学習に向かうこととなった。学年間のつながりを意識した継続的な学習が展開できていると言える。
- ・ 「生き物がたくさんいる豊かな川」という捉え方のみではなく，下流にいくにしたがって水質も低下していることを知ることで，児童は環境の保全や浄化という視点で「ふるさとの川」を見直すことができた。保全・浄化に向けた行動を起こすきっかけにもなり，学習の深化を図ることができたと言える。
- ・ 河川環境学習で高まった児童の興味・関心や探究心が海の学習へとつながっていくことは，学習の意義を高めることと言える。5年生では本格的に海洋学習を行っていくのであるが，ここでも児童の主体的な探究学習が大いに期待できる。

【課題】

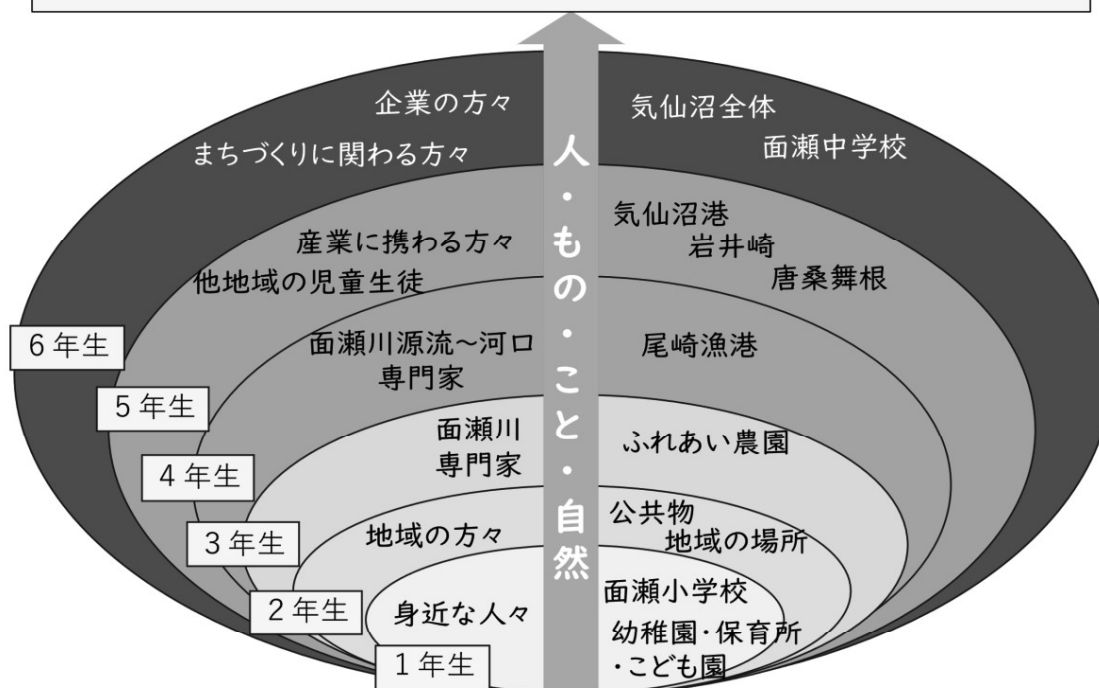
- ・ 3学年では，体験学習を中核にして児童の主体的な学習を進めることができている。今後は，採取や飼育，観察の中で感じた疑問等を課題としてまとめ，その解決を図るような探究型の学習をさらに充実させていきたい。
- ・ 4学年では，環境の保全について自分たちが考えたことや実践したことをポスターや動画等を作成し，発信するような活動を取り入れることにより，学習の広がりや深化を図っていきたい。
- ・ 学校全体での地域環境境域をさらに発展させていくために，各学年の系統性を改めて整理し，6年間を通した継続的な学習の充実に努めていきたい。
- ・ 系統的な環境学習を行っていく中で，今後さらに「人との出会い」「人との関わり」を重視し，豊かな環境の保全や活用に関わる地域の人材から学ぶ場を多く設定していきたい。

【資料】



教科領域	学年	単元名(学習内容)	ねらい※一部省略 (赤い字は学習対象)
生活科	1年	おもせのしき (家族や学校、幼児などの身近な人々、身の回りの自然)	家族や学校、幼児などの身近な人々、身の回りの自然などとの関わりに関心を持ち、人や自然と関わることの楽しさを味わい、地域への親しみをもつことができるようにする。
	2年	はっけんおもせ (身近な人々、地域の様々な場所、公共物、生き物や自然)	身近な人々や自然、地域の様々な場所や公共物などとの関わりに関心を持ち、継続的に触れ合うことで、地域への親しみを持つとともに、地域のよさに気付くことができるようにする。
総合的な学習の時間	3年	面瀬の生き物調査隊 (校庭のピオトープ、面瀬川の生物多様性)	ふれあい農園や面瀬川での生き物調査や飼育観察を通して、面瀬には多様な生き物が生息し、自分たちが豊かな自然環境の中で生活していることや環境保全の大切さに気付くことができるようにする。
	4年	面瀬川調査隊 (面瀬川的环境、面瀬川の家とのつながり)	面瀬川上流域から河口域の特徴を比較したり、面瀬川と生活とのかかわりを調べたりして、水辺環境を守るためにできることを考え、実践しようとする態度を育む。
	5年	ふるさと気仙沼の海と生きる私 (面瀬と気仙沼の海、産業に携わる人々、海を守りたいという人々)	海や水産業から課題を見だし、探究する。海洋環境について考えたことや環境保全への思いを発信する。また、海と生きていくために自分たちに何ができるのかを考え、実践しようとする態度を育む。
	6年	ふるさと気仙沼の未来 (面瀬と気仙沼の地域社会、町づくりに努力する人々)	まちづくりを担う方々とかかわり、地域の魅力について調査したり、未来を創造したりする。ふるさとをよりよい町にするために自分たちができることやすべきことを考え、実践しようとする態度を育む。

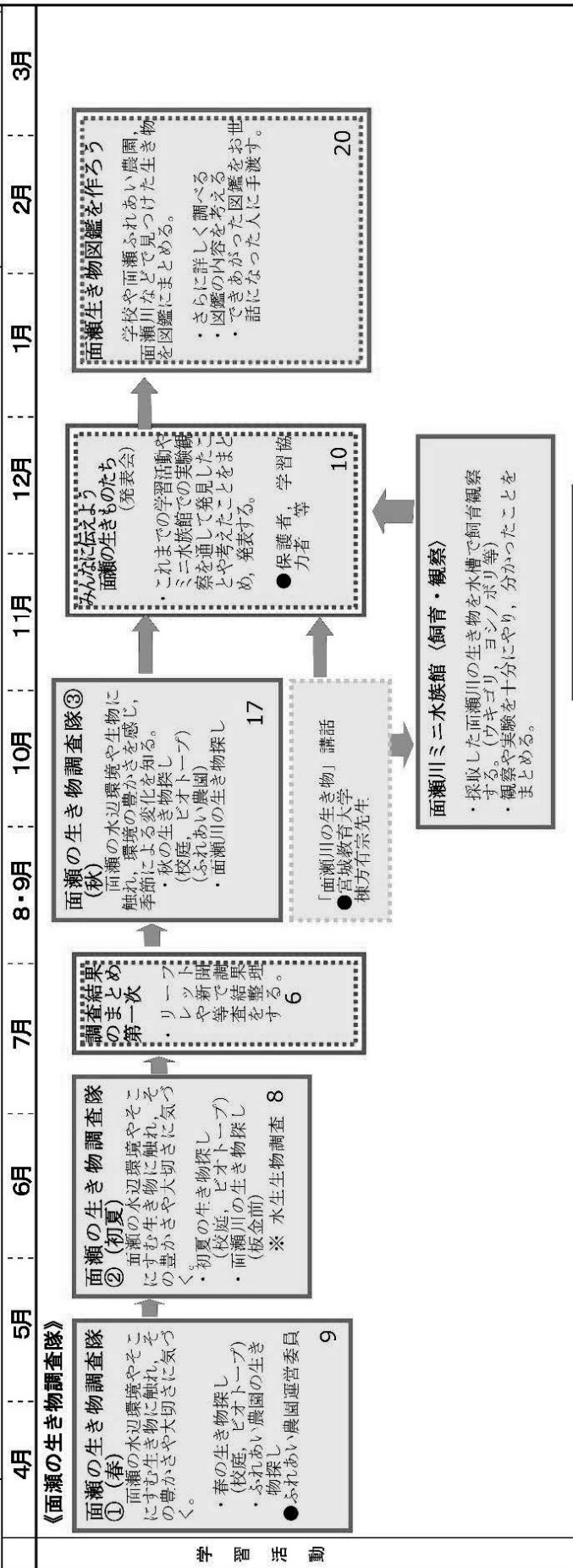
面瀬小学校のホールスクールアプローチ
- ホールスクールからホールエリアへ -

持続可能な社会の創り手





3年 デザインシート 地域をフィールドにした環境教育 海洋教育 基礎学習 体験・調査 関連 発表・実践 ① ②

単元名	「面瀬の生き物調査隊」	
総括目標	〇生き物調査や飼育観察を通して、面瀬には多様な生物が生息し、自分たちが豊かな自然環境の中で生活していることに気付く。生き物調査づくりや発表の活動の中で環境保全の大切さを表現する。	
育てたい資質・能力	 	主に取組機関と内容 ・宮城教育大学 ・面瀬ふれあい農園運営委員会



学習活動	春のしぜんだそび (理科) たねをろう (理科) チョ育てよう (理科) ウヨ育てよう (理科) トンボやバッタを育てよう (理科) 花がさいたい (理科) 太陽とかがよ (理科) 実がたよ (理科) 実がでよ (理科) こん虫を調べよう (理科)
関連する主な教科学習	学校のまわり (社会科) ツバメの赤ちゃん (道徳科) 調べて書こう、わたしのレポート (国語科) ホタルの引っこし (道徳科)
	自分の考えを伝えよう (国語科) 案内の手紙を書こう (国語科)
	言葉で伝えよう (国語科)
	わたしのべす (国語科)
	市のうつつりかわり (社会科)
	話したいな時間 (国語科)

単元名	「面瀬川調査隊」			
総括目標	○面瀬川上流域から河口域の特徴を比較したり面瀬川と生活との関わりを調べたりすることを通じて面瀬川の環境をかり、川の特徴や影響について考えるとともに、水辺環境を守ることができることを考え実践しようとする態度を育む。			
育てたい 資質・能力	 	海山里海のつながりに気づき、水辺環境を守るためにできることを考える。 ・面瀬川流域調査や講話を通して「山・川・里・海」のつながりに目を向け、課題を設定する。 ・探究したことをや自分たちの考えを新聞などに発表し、地域に向けて発信し、考えを深める。 ・解決に向けて協力し合ったり友達と協力し合ったりして情報収集や整理・分析し、レポートなどにまとめる。 ・友達と協力しながら探究し、友達との考えのよさも取り入れながら自分たちの課題を解決することを目指す。 ・面瀬川や生き物の環境保全の思いをもち、環境を守るために自分たちができていることを考え、実践しようとする。		
主な連携機関と内容	・宮城教育大学；川の生き物講話 ・マルゼンワカメグループ；養殖			

	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
《面瀬川調査隊》	<p>面瀬川学習会 ・中流にはどんな生き物がいるか振り返る。 ・川上流、中流、下流がそれぞれ異なる部分があることを知る。 ・ある川は、生き物や水質がそれぞれ異なる理由があることを話し合おう。 ・上流にはどんな生き物がいるか予想する。 ・川の生き物や水質を測る方法を学ぶ。 ・生物指標、バックテスト</p> <p>5</p>											
学習活動	<p>面瀬川調査隊① ～面瀬川の始まり～ ・面瀬川の源流部を歩き、森の湧水や清流を知る。 ・上流の生き物調査へピクトグラム、カゲログ、カゲログ等</p> <p>8</p> <p>調査結果のまとめ ・マッシュアップや新結果整理、等調査結果をまとめる。</p> <p>6</p> <p>面瀬川ミニ水族館Ⅱ ・観察</p> <p>面瀬川調査隊② ・面瀬川の河口域を調査し、水生生物の生息地を比較する。 ・排水など下流の汚濁を知る。 ・新聞で調査結果を整理する。 ・上流～河口域の面瀬川を見学する。</p> <p>12</p> <p>「面瀬川の生き物」 ・宮城教育大学 榎方有宗先生講話</p> <p>面瀬川調査隊③ ・面瀬川が注ぐ海（サケ、モクズガニ、ウナギ等） ・面瀬川が運ぶもの（栄養分、カヤ、流木、ゴミ等） ・山川里海をつなぐの役割を知る。 ・尾瀬海岸の干潟、養殖いかだ、川と海の境目、アマモ場</p> <p>11</p> <p>面瀬川調査隊④（まとめ・発表） ・面瀬川の字習全般を通して字んだことや環境保全に関する思いや願いをまとめ、伝える。 ・保護者、関係者 ・成果物として新聞やマップにまとめる。</p> <p>18</p> <p>ワカメ養殖体験① ・ワカメの「種はさみ」の体験活動を行う。 尾崎漁港 5</p> <p>ワカメ養殖体験② ・ワカメの「刈り取り」の体験活動を行う。 尾崎漁港 5</p>											
関連する主な教科学習	<p>水はどこから（社会）</p> <p>雨水のゆくえと地面のようす（理科）</p> <p>自然の中の水の姿（理科）</p> <p>物のあたり方（理科）</p> <p>水のすがたと温度（理科）</p> <p>「ふれあいの森」で（道徳科）</p> <p>「ふるさとの食」を伝えよう（国語科）</p> <p>みんなで新聞をつくらう（国語科）</p> <p>調べたことをほうこくしよう（国語科）</p>											

海と人のつながりから持続可能な未来社会を考える子どもたち

～教育課程特例校の特設領域「海と生きる探究活動」を通して～

宮城県気仙沼市立鹿折小学校

校長 小野寺 裕史

はじめに

本校では、E S Dは持続可能な社会の創り手を育む教育であり、教育全体で行うことを学校全体で確認し、学校教育目標を「志高く、自ら考え、しなやかに未来を生き抜く児童の育成」として教育活動を進めている。

今回の事例発表では、本校が学校教育全体で取り組んでいるE S Dの概要と児童が授業として学ぶ学習の中心となっている本校の海洋教育と取り入れた探究学習を中心に取り上げていくこととする。

1 気仙沼市及び鹿折地区について

気仙沼市は宮城県の北東部に位置し、太平洋に面した古くから漁業・水産業のまちとして栄えてきた。気仙沼市は、日本に13カ所しかない特定第三種漁港の一つであり、日本の中でも最も主要な漁港の一つに位置付けされている。

本校は、気仙沼市の北部にあり、学区は南北に細長く、北側は山林地帯があり、南側が鹿折川の河口となり海に面している。北側の山林から流れる鹿折川には多様な生き物が生息し、澄んだ水が流れている。南側の河口付近には住宅地と水産加工団地、大型漁船も停泊する岸壁などがあり、人々の営みが盛んであった。また、北東部の海岸付近では、わかめの養殖に取り組む水産業者もいた。

しかし、2011年3月11日に発生した大地震と津波により、沿岸にあった住宅地と商店街、水産加工場などのほとんどが流失・消失した。中心街だった場所に住宅や商店、工場が再建されたのは数年前である。

こうした被災を受けながらも、人々はまちづくりへの意欲を失わず、コミュニティの再生も進めてきた。現在は、鹿折地区まちづくり協議会や鹿折地区振興協会などが中心になり、地域振興とともに学校教育を含め、地域社会全体で支え合おうという体制がとられている。

2 E S Dの取組の変遷と海洋教育への取組について

気仙沼市は、日本国内で先進的にE S Dを学校教育の中に取り入れて取り組んできた。2002年には、市内の面瀬小学校で環境に関する国際的な交流会議が行われ、その後、市内の各学校でもそれぞれの地域の特性を生かし、環境、防災、食文化、福祉などをメインとしたE S Dが展開されてきた。

本校は、国際理解を中心としてE S Dに取り組み、平成20年にユネスコスクールに加盟し、以降現在までユネスコスクールとしてE S Dに取り組んでいる。

地域の「人・もの・こと」を学習の素材とし、地域のステークホルダーとの関係づくりを進めながら、主に総合的な学習の時間を中心とした学習の中で進められてきた気仙沼市のE S Dであるが、大きく変遷する出来事が起こった。それは、東北太平洋沖地震と津波いわゆる東日本大震災の発災である。それまで積み上げてきた様々な学習は、柱となっていた地域の「人・もの・こと」が大きく変化し、震災前のような学習がまったくできなくなった。

このとき、気仙沼市は、東日本大震災からの復興計画のスローガンとして「海と生きる」を掲げ、海とともに生きてきた気仙沼としてのアイデンティティを大切にして、未来を作り上げることを目指した。

このような中で、気仙沼市教育委員会は、「海と生きる」気仙沼としての教育を進めるために、海洋

教育を取り入れた新たな教育を実践しようと考えた。2017年から海洋教育推進研究校を指定して海洋教育を取り入れた学校教育の取組を進めており、本校はその初期の段階から研究指定校としての取組を始めた。

3 ESDとの関連を図ったホールスクールアプローチ

2015年の国連サミットにおける「持続可能な開発目標（SDGs）」採択を機として、日本の中で「持続可能な」という言葉が急激に広まった。ご存じの方も多いと思うが、持続可能な開発のための教育は、SDGsが世に広まる10年以上前の2002年「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提案し、同年の第57回国連総会で採択された「国連持続可能な開発のための教育の10年」などに基づき、「ESD」として20年以上取り組まれているものである。

現行学習指導要領の前文及び総則において「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられ、ESDは、学習指導要領の基盤となる理念と言える。

以上のことを考えれば、ESDはSDGsとして示されている17の目標の達成に寄与するための教育であり、学校教育全体で進めることは当然のことと言える。このことから、本校では、教育全体をESDと関連付けて考えてみた。

図1が、本校のホールスクールアプローチデザインシートであり、教育目標の達成を目指す教育活動をSDGsと関連付け、ESDの観点から教育活動をデザインしたものである。



【図1】 本年度のホールスクールアプローチデザインシート

この図のように、全ての教育活動をESDの視点で整理し考えることで、持続可能な社会の創り手を育てる学校教育という意識が職員全体で共有されることになる。

次に、本校のESDを核とした教育活動の概要を紹介する。

4 本校のESDを核とした教育活動の概要

(1) 本校のESDのねらい

地域の人と触れ合い、自然・文化・産業に関わりながら、ふるさと気仙沼への思いや考えを深め、自分の考えを表現し、課題解決に向けて協働して活動することができる「持続可能な社会の創り手」としての児童の資質・能力の育成を目指す。

(2) 実践内容

① 「鹿折小SDGs 10」

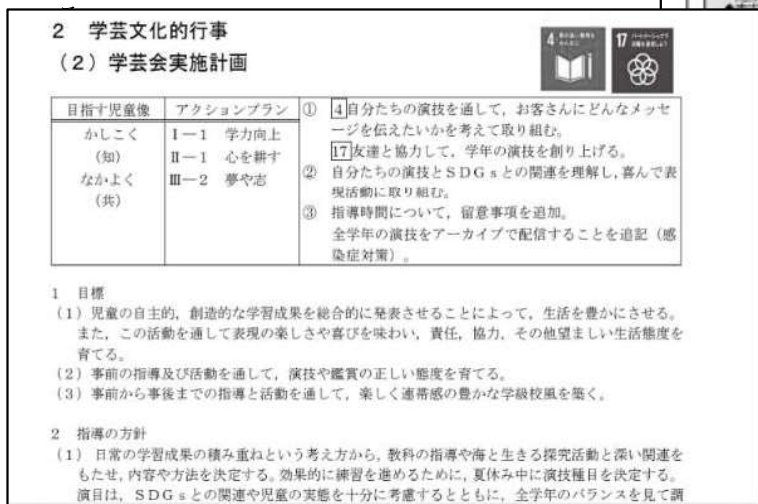
東日本大震災からの復興・創造を念頭に「鹿折小SDGs 10」を掲げ、教育活動全体で「共生・共創」社会を実現することができる資質・能力を育むESDの推進に努めている。

図2のように、基盤目標 (Basic Goals) を「パートナーシップで目標達成」と「質の高い教育」の2つとし、「健康と福祉」「エネルギー」「まちづくり」「つくる・つかう責任」「気候変動」「海の豊かさ」「陸の豊かさ」「平和と公正」の8つを重点目標として、学校教育目標である「志高く、自ら考え、しなやかに未来を生き抜く児童の育成」に向かって教育活動を展開している。

② SDGsと関連付けて行う教育活動

本校の教育計画には、図3のように全ての教育活動に重視するSDGsの記載がある。

これは、先に述べたように、ESDは教科・領域だけで行うものではなく、学校教育全体で行うべきものと考えたことにつながっている。



↑【図2】鹿折小SDGs 10

←【図3】学校行事とSDGsの関連

(3) 本校のESDの3つのキーワード

こうした本校の教育を実践するうえで、3つのキーワードがある。

一つ目は「世界と自分(気仙沼)をつなぐ地域リソース」、二つ目は「ステークホルダーとの協働ネットワーク体制」、三つ目が「教科・領域往還的・融合的なカリキュラムデザイン」である。「世界

と自分(気仙沼)をつなぐ地域リソース」については、「鹿折小SDGs10」を念頭に置き、世界と自分(気仙沼)をつなぐ様々な地域リソースを活かした探究的な学習を展開することを目指している。

二つ目の「ステークホルダーとの協働ネットワーク体制」については、地域の自然・文化・産業の持続性・創造性を強化するステークホルダーとの協働ネットワーク体制の構築を目指している。

三つ目の「教科・領域の往還的・融合的なカリキュラムデザイン」については、児童の探究的に学ぶ資質・能力を育む、文部科学省の教育課程特例校の指定をうけて、教科等の学習の一部を探究学習の中に組み入れながら、教科の学習と探究での学びが行き来し、時には一体となる往還的・融合的なカリキュラムデザインの構築と実践を行っている。

5 特設領域「海と生きる探究活動」による探究学習

(1) 「海と生きる探究活動」とは何か

「海と生きる」は、気仙沼市の震災復興スローガンであるが、この言葉には様々な思いが込められている。気仙沼の暮らしを支えてきたのは、間違いなく海であり、海の恩恵をうけてまちは発展し、海が近くにあることの暮らしの豊かさも享受してきた。しかし、一方では、災害とも隣り合わせであることも見逃してはならない。過去にも、そして近年は、明治の三陸大津波、昭和のチリ地震津波、平成の東北太平洋沖大地震に伴う巨大津波と幾度となく大きな津波に襲われ、人命を奪われ、暮らしを壊されてきた気仙沼。そうした災害に逢いながらも、人々は、海とともに生きる暮らしを築いてきた。そして、気仙沼の人々は、人間は自然の一部であることを学び、自然である海を受け入れ、人々の知恵と努力と協力によりまちを復興させてきた。気仙沼の人々にとって、海は、過去と現在、そして、未来をつなぐ存在であり、持続可能な未来社会を考えるための一番のよりどころとなるものである。

このような「海と生きる」ことの意味を考えながら、子どもたちに未来を生き抜くための資質・能力を育てたいと考えた。そのためには、気仙沼の子どもたちが、これまでの学習では感じることはできない「海と自分たちのつながり」を実感し、「海そのもの」を知ることや「生き物と海につながり」に目を向けて考えたりすることが必要だと考えた。そして、自分たちが生きていく未来を思い描きながら、人々が築いてきたまちの魅力をよりよくつなげていくことを考えることが、未来の創り手としての力を高めると考えた。

以上のことから、本校は令和2年度から文部科学省の教育課程特例校の指定をうけて特設領域「海と生きる探究活動」を設けている。「海と生きる探究活動」は、持続可能な社会の創り手としての資質・能力を育てるものであり、その展開は海洋教育を軸として進められている。

(2) 特設領域「海と生きる探究活動」の概要

「海と生きる探究活動」は、海をはじめとする自然に目を向け、親しみをもつことを出発点にし、身近な自分たちの暮らしや地域の産業に目を広げ、「海と生きる」気仙沼の現状を知り、課題に向き合いながら探究を深め、鹿折川と生活とのつながり、天旗・浪板虎舞等の歴史文化伝承、水産加工や造船等を通じた他地域・世界との繋がり、人と人との結びつきなど、身近な素材の価値を人づくりと地域づくりの2つの視点から意味付けし、ストーリー性ある学びになるようなカリキュラムで実践している。

また、地域及び大学等の専門機関等のステークホルダーと連携協働による「本物」に出会わせる場を重視し、地域に根ざしながらも、世界的な視点に立った体験的・探究的な学習を展開し、思考・行動の変容を目指している。

(3) 身近な自然や暮らしと地域の産業の持続可能な未来を考える具体的な取組

3年生以上の学年では、特設領域「海と生きる探究活動」を設定し、国語科・社会科・理科等の一部の時数をそれぞれのテーマ毎に整理して、児童の探究的・創造的な力の育成を目指している。各学年の系統性を考慮しつつ、教科・領域のねらい・内容・育成する資質能力と関連させながら、鹿折・気仙沼に点在する豊富な自然や産業・文化等の地域リソースを効果的に活用することができるようにカリキュラムづくりを進めている。

① 1・2年生

生活科を中心に、海に直接触れ、造形活動や音楽活動も交えて海への親しみを深め、波、砂、生き物などへの興味・関心を持ちながら、様々な気づきをする学習を進めている。豊かな自然や多様な生き物、人と直接触れ合いながら探究の素地となる豊かな感性と観察力を育み、3年生以上からの探究的学習の素地となる地域や自然への感性を育て、ものの見方を豊かにするようにしている。

1年生「鹿折・気仙沼の四季」 **地域に根ざした教育**

1年生は、海に親しむ活動として、大島・小田の浜へ行きました。小田の浜では、波の音を聞いたり貝殻を拾ったり、砂の造形遊びをしたりしました。図画工作科では、拾った貝殻と紙粘土で海の思い出を表現しました。活動を通して、海と触れ合うことの楽しさや自然の美しさを感じることができました。そして海を思い出しながら音楽の授業で「うみ」の歌を元気に歌いました。また、国語の「いろいろなふね」の学習では、海上保安庁の巡視船やまぐろ延縄船の見学を通して、海で働く人や仕事に親しみをもつ人が増えてきました。



海に親しむ

2年生「探険しよう気仙沼・鹿折のまち」 **地域に根ざした教育**

2年生は、生活科の「まちたんけん」の学習でかめ通りに行きました。商店街には、のり屋さんや鮮魚店など、海につながる仕事をしている人から話を聞くことができました。また、身の回りの生き物を調べる学習の中で、舞根森里海研究所に行きました。海の干潮の生き物と触れ合ったり、観察したりして、海にすむ生き物の不思議さや面白さを実感しました。また、舞根森里海研究所で聞いてきたことや図鑑で調べたことをタブレットにまとめました。発表会の時も、工夫して分かりやすく発表することができました。また、1年生にも発表の動画を送り、海の生き物を紹介しました。




海を知る

② 3年生

中学年は、身近な海を活用した養殖や海とつながるまちならではの伝統芸能や遊びなどの伝承を活動から地域の人々の思いを受け継ぐことや、地域に伝わる伝統芸能や遊びが海とつながっていることを知りながら、先人がつないできた伝統の価値や海とともに暮らす人々の思いに気付く学習を進める。

3年生「鹿折の宝～人・自然・ものを見つけよう～」 **地域をつなぐ教育**

3年生は、大切に受け継がれてきた地域の「宝」について学びました。天旗、浪板虎舞、わかめの養殖などについて体験的に学び、調べて、発信する活動に取り組みました。地域の自然・伝統文化・産業にふれ、故郷気仙沼・鹿折を大切に思う心を育むことができました。伝統文化や産業に関わる方々から実際に話を聞く活動やキリバス共和国の小学生との異文化交流会を通して、「地域の宝」には受け継いできた人の思いや願い、親しまれてきた理由や背景があることについて、知ることができました。地域の誇りともいえる文化や自然を、次の世代のために守っていこうとする人々がいることを実感し、自分たちも地域の一員として、鹿折の宝を大切に思い、たくさんの人に知ってもらえるように自分たちでアイデアを話し合い、様々な活動を行いました。



海とつながる伝統





④ 4年生

鹿折川での水質調査や生物調査を進めながら、山と川と海のつながりを捉え、豊かな海と山や川との関係を考える。また、それぞれが人々の暮らしともつながっていることを学び、自分たちの暮らしをみつめながら、環境を守るための取組について考える学習を進める。

4年生「山・川・海～いのちをつなぐ鹿折川～」

地域から視野を広げる教育

4年生は、山、川、里、海の生命を育む鹿折川の水について学びました。鹿折川の水を利用した稲作を体験し、鹿折川が里の生命を育てていることが分かりました。栽培した米と岩井崎の海水から作った塩と気仙沼の食材を具にして「気仙沼おにぎり」を作り、家族で味わいました。また、川の上流と中流で水生生物調査を行い、上流の水質は県内でも一番きれいだと分かり誇らしく思いました。川の生物の栄養は何かをサントリーの「水育」で学び、山の環境保全も大切だと分かりました。また、終末処理場を見学して下水をきれいにして海に流す仕組みを知りました。最後に、森里海研究所で、牡蠣の栄養であるプランクトンを見て、山や川の保全と深く関わりがあることを学びました。山、川、里、海すべてがつながっていることを理解した上で、自分たちができることを考え、アクリルたわしを作って家庭や学校で使用しています。この学習の成果を11月にキリバス共和国の小学生に、12月には本校の3年生に向けて発表しました。鹿折川がつなぐ山と海、里の自然の恵みへの感謝の思いを深めることができました。





⑤ 5年生

「海と生きる」気仙沼の中心産業である水産業を通して、気仙沼市と日本各地、そして、世界とのつながりを考える。つながりは、人のつながり、ものつながり、そして、環境でのつながりなどがあることを捉える。そして、今の気仙沼の水産業の魅力を未来に残し、つなげていくために、どうすればよいかを考えていく。その中で、海流や気候について、海洋プラスチックと生物の関係などの学びも行い、生物が生息する環境と地球の変化とのつながりに目を向けていく。

5年生「世界とつながるぼくらの海郷学」

地域から視野を広げる教育

5年生は、気仙沼の水産業について学びました。まず、魚市場で気仙沼に水揚げされた魚や、水産物が販売されている様子を見学しました。次に東京大学の丹羽先生と一緒に、「三陸沖の海の豊かさ」について調べました。色水を使って潮流がもたらす海の恵みを知る実験から、三陸沖の豊かな海の仕組みを学ぶことができました。まぐろ延縄船の乗船体験をしたときには、外国人の船員が働いていることを知り、気仙沼は水産業を通して、多くの国とつながっていることを学ぶことができました。そのつながりの一つでもあり、地球温暖化の影響で海に沈む恐れのある国・キリバス共和国との交流会では、地域の課題をグローバルな視野で考えることができるようになりました。学んだことを「海洋サミット in 気仙沼」や「海洋フォーラム in 鹿折」で発信するなど、海のまち気仙沼に暮らす人の願いや思いについて理解を深めることができました。




⑥ 6年生

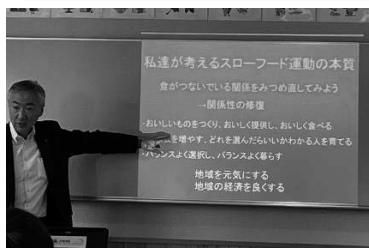
気仙沼市の豊かな食材を生かした「スローフードのまちづくり」を進める菅原昭彦さんの取組を知ることをスタートとし、持続可能な気仙沼市のまちづくりをテーマに学習を進める。その際に、気仙沼市の持続可能性の課題となる海の環境や地球の変化を学ぶことについての学びを取り入れることで、描く未来のための実現のために課題の克服や工夫すべき点を捉え、自分たちでできること、全体で取り組むことなどを考え、提案している。

6年生「海で復興 未来へつなぐ『気仙沼の魅力』発信プロジェクト」

地域を拓く教育

6年生は、スローフード運動やまちづくりについて調査・発信する活動を通して気仙沼の自然・人・食・産業等の魅力について考える学習を行いました。気仙沼が推進しているスローフードの考え方を、気仙沼商工会議所の菅原さんから聞き、地域の食材を生かしたオリジナル弁当づくりに取り組みました。探究旅行では、山に囲まれた会津若松市の食材と気仙沼市の食材を食べ比べ、自分たちと海のつながりを見つめ直しました。活動を通して得られた、地球温暖化等の課題を解決するために、キリバス共和国の小学生と意見交流会を行いました。「一緒に植物を植え、緑を大切にしたい。」「交流を続けたい。」という思いを共有しました。また、12月に行った「海洋教育こどもサミット in 気仙沼」「海洋フォーラム in 鹿折」では、自分たちが考え行動したことを地域へ発信しました。これからも「海と生きる」一人の気仙沼市民として気仙沼の魅力を発信していきます。

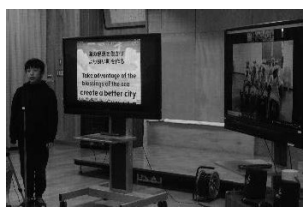




⑦ キリバス共和国との国際オンライン交流（4・5・6年共通）

本校では、令和3年度にキリバス共和国とのオンライン交流を行った。このとき、これまでの取組とは違った児童の気づきが生まれたことが大きな収穫であった。

このことを機会とし、児童環境問題を考えるためには、グローバルな視点が必要であるという考えが膨らみ、本年度まで3カ年連続でオンライン交流が続いている。



5 「持続可能な社会づくり」を環境面から考えた児童の気づきと変容

(1) 全校及び各学年での体験活動や探究学習で見出した児童の課題（抜粋）

① 命を育む自然（森里川海）の豊かさを守り繋いでいくために、私達はどのような行動をしていけばよいか。また、市などの行政はどのような対策をとるべきか。

- ② 自然の恵みを享受して水産業を営む人々（漁師や水産加工業、造船業など）が共通で抱える大きな課題である気候変動がなぜ起こるのか。人間の営みとどのようなつながりがあるのか。改善・解決する方法はあるのか。
- ③ 海面上昇等で喫緊の問題を抱える国に対し、自分たちができる行動は何か。
- ④ 海の温暖化や酸性化、海面上昇、海洋ゴミなど海の危機を防ぐためにすべきことは何か。
- ⑤ 海と生きるために、市民はどのように海と接し、活かしていくべきか。また、小学生の自分たちはどのようなことができるのか。

（２）それらの課題解決を考えるなかでみられた児童の変容

① 自分たちにできることを考える児童の増加

身近な地域の環境や産業、地球規模的な課題への理解を深め、それら相互及び自己とのつながりへの関心が高まり、体験活動や探究的な学習の楽しさと有意味性を実感することができた。

また、自ら「問い」をもち、主体的に学びに向かう姿が随所に見られるようになり、貧困国や豪雨災害地域へ向けて自ら募金・支援活動を行ったり、地球温暖化の世界的な影響を受けて給食の残食を減少させる活動や花いっぱい運動などに取り組んだり、自分たちにできることを周囲に働きかけながら協働で取り組む児童が増加した。

② 自分たちの生活とのつながりの認識の深化

特設領域「海と生きる探究活動」を柱として、各教科・領域で学習した自然や地域、世界の様々な事象に関する興味・関心を高め、自ら進んで調べて得た知識を豊かにしたことにより、自然と人との相互のつながりを見出し、人々の生活との関わりについて認識することができた。

③ 活動を通して育んだ、持続可能な社会の創り手としての資質や価値観の高まり

本校E S Dで特に重視する「自立・責任」「調和・協働」「志・創造」の価値を重視し、実践する力を様々な取組を通じて育ててきた。

発達段階による差はあるが、日常の活動や学ぶ姿、関わり合いの様子などから児童の意識と行動に大きな変容が見られている。常に課題意識をもち、考えを深めながら、互いに協力し合ってそれらの解決を図ろうとしている児童の様子から、主体的に学ぶ姿勢、価値を見出す感性と探究心、対話を通して志を果たそうとする態度などが少しずつではあるが着実に育まれていることを実感している。

おわりに

地域に目を向けて探究学習を進める中で、地域の課題が世界とつながっていることを捉え、広い視野をもちながら課題の解決に取り組んでいける児童を育てることを目指した取組が少しずつ成果をあげてきているが、まだ工夫・改善の余地は大きい。特に、探究の中に教科等の内容を融合させて取り組んでいる特設領域「海と生きる探究活動」では、教科の内容の理解を生きて働く力に高めるための工夫・改善を図っていくことが必要である。

また、環境問題の解決には、世界中の人々の強い信念と協力が必要である。なぜ、それが進まないかを考えると、他者への思いが足りないことが一因と考える。こうした中で、私達鹿折小学校では、他者への思いを持たせるためには、その前段として、自分が暮らす故郷（地域）を知り、愛着をもつことが基盤となると考え、「海と生きる探究活動」に取り組んでいる。好きな場所とそこに暮らす人々への思いを強くもちながら、他の地域を知ること、自分と同じように他の地域にも故郷に愛着を持って暮らしていることが分かるはずである。そのことがいずれ、自分の行動につながっていくと信じて今後も取り組んでいきたい。

誌上発表 4

すがおの「ひと・もの・こと」と関わり、 郷土を愛し、郷土を守る力を育てる総合的な学習の時間

北九州市立すがお小学校
校長 島田 剛

I はじめに

本校は、北九州市小倉南区の南部に位置し、北九州市の中でも広い校区の一つである。山間部にあるため過疎化も進み、15年前に旧道原小学校と旧山本小学校が統合し、新たにすがお小学校として歴史を刻んでいるところである。

校区は、自然が豊かで菅生の滝や紫川の源流に鱒淵ダムなどがあり、眼鏡橋という歴史のある建造物もある。山間部は山深く、平地では農業がさかんな地域である。さらに、「ひと・もの・こと」という豊かな財産があり、四季折々の自然や地域の方の温かさを日々感じ取りながら、開校当初より「郷土を愛し、郷土を守る」ふるさと教育が実践されている。

また、ユネスコスクール・SDGs 推進校及び北九州市の施策である学びチャレンジリーディングスクール（総合的な学習の時間）の実践校として、探究的な学習に取り組んでいる

II ESDの要素と重視する能力・態度

1 ESDの要素

- <多様性>自然に関わる事物・現象を多面的、総合的に見たり考えたりすることができるようにする。
- <有限性>有限な自然環境や資源を将来世代のために維持し、有効に使用する必要性を理解する。
- <連携性>持続可能な社会の構築・維持には、環境保全と開発との相互理解が必要であることを理解する。



すがお 眼鏡橋

2 ESDの視点に立って重視する能力・態度

<多面的、総合的に考える力>

すがおの「ひと・もの・こと」とのつながり・関わり・広がり理解し、それらを多面的、総合的に考える力。

<他者と協力する態度>

体験的な活動を友達と協力して取り組んだり、地域と連携して調査活動などを行ったりすることができる。

<進んで参加する態度>

自分の役割に責任をもって体験的な活動をしたり、地域の一員としての自覚をもって主体的に郷土を大切にする活動を行ったりすることができる。

Ⅲ 総合的な学習の時間 全体計画

【本校で定める総合的な学習の時間の目標】

探究的な見方・考え方を働かせ、他教科等との関連を図りながら、身近な地域の「ひと、もの、こと」に関わる総合的な学習の時間を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のように育成することを目指す。

(1) 身近な地域のひと、もの、ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさ、それらを支える人々の努力や工夫に気付くようにする。
(知識及び技能)

(2) 身近な地域のひと、もの、ことの中から見出した課題について、その解決に向けて情報を集めたり、調べて得た情報を分析・整理して考えたりする力を身に付けるとともに、考えたことをまとめ・表現する力を身に付けるようにする。
(思考力、判断力、表現力等)

(3) すがおの地域のひと、もの、ことについての探究的な学習に、各教科で身に付けた知識や技能を生かしながら仲間とともに取り組み、地域に対する親しみと愛情を深め、進んで地域社会に関わろうとする態度を育てる。
(学びに向かう力、人間性等)



令和4年度

【目標を実現するための各学年の探究課題】

3年	すがおのたから
4年	すがお小 ビオトープ
5年	紫川の 水・自然環境
6年	竹のよさ 放置竹林の問題

【各学年の中心となる学習内容・活動】

3年	地域のよさや特色に気付き、地域（すがお）を大切にしようとする気持ちをもつ。
4年	地域のよさや特色に気付き、地域（小倉）を大切にしようとする気持ちをもつ。
5年	紫川や紫川を守る人の思いを調べる活動を通して、紫川の環境を守るために自分たちができることを考え、地域の自然環境を守るために進んで行動できるようにするとともに、地域を愛する心をもつ。
6年	すがお地域のまちづくりや地域活性化に取り組んでいる人と交流することを通して、すがお地域の未来像について考え、自分たちができることを実践し、地域を愛し、地域に対する誇りをもつ。

IV 総合的な学習の時間における具体的な方策

(1) 方策1 各教科等の「見方・考え方」を働かせる場の設定の工夫

本校の総合的な学習の時間の探究のプロセス（課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現）の各過程で、各教科等の「見方・考え方」を働かせることができないかを探り、授業の中に位置付けた。意図された、各教科等の「見方・考え方」を働かせる場面において、児童が各教科等の「見方・考え方」を働かせていることに気が付くことを目標とし、各教科等の「見方・考え方」を定着させる。

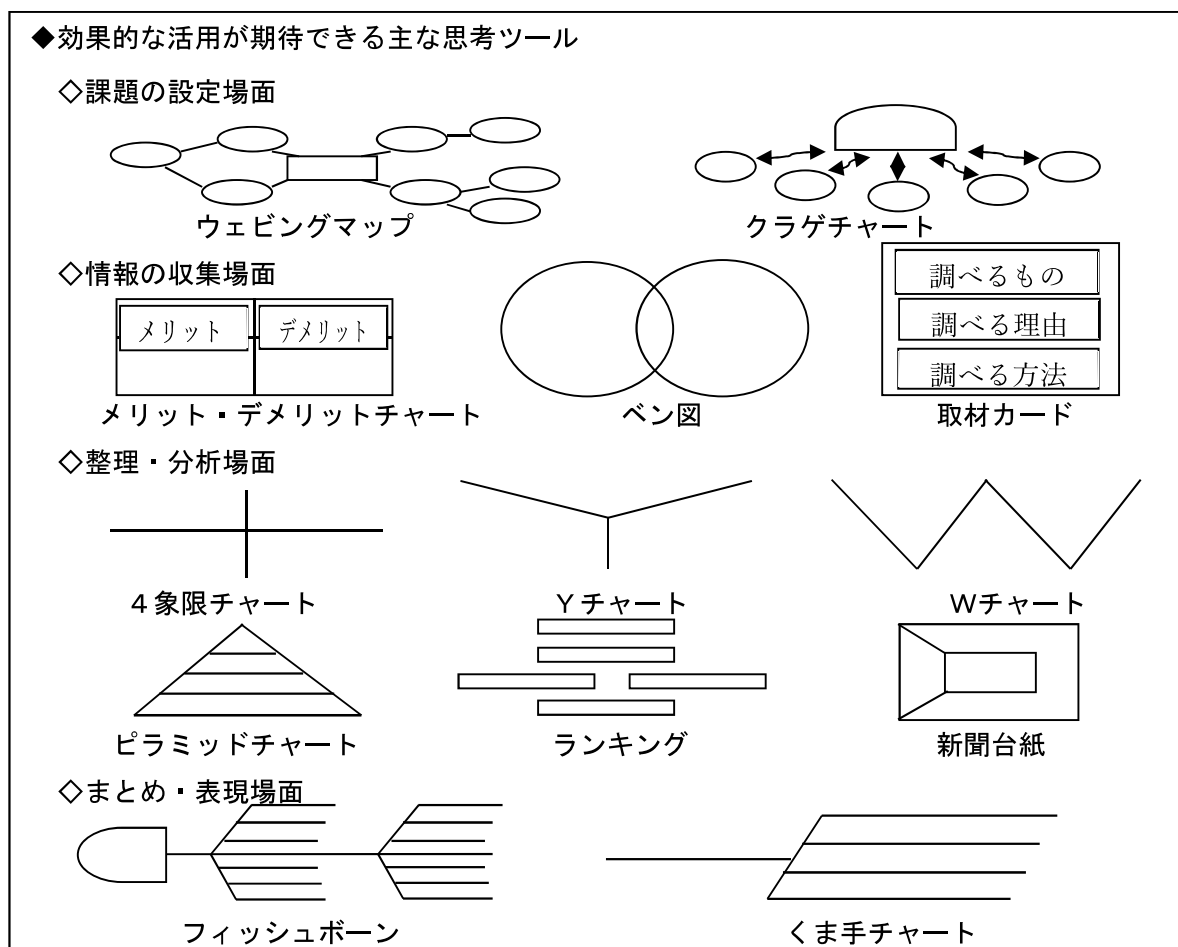
そして、総合的な学習の時間で定着した「見方・考え方」を、各教科等で再びよりよく働かせていくことで、総合的な学習の時間と各教科等とのよりよい関連が図れるものと考えている。

(2) 方策2 思考ツールの適切な活用

総合的な学習の時間の探究のプロセス「整理・分析」の過程で、思考ツールを活用することで、論理的に思考する力の深まりを図る。その際、主張、理由付け、データを明確にし、より論理的に思考する力を高めていく。

思考ツールは系統的に活用し、児童一人一人が自分の考えをもてるようにする。また、グループ活動やグループワークを取り入れることで多面的・多角的に考えを深め、より明確な主張や根拠へと結びつけられるようにする。

思考ツールは、総合的な学習の時間だけではなく、各教科を通して継続的に活用することで、それぞれの課題に対して児童が自ら有効な思考ツールを選択し、論理的に思考する力を高めていくようにする。効果的な活用が期待できる主な思考ツールを示したものが以下である。



V 実践記録

1 第3学年 「すがおのたからものを伝えよう」

(1) 単元のねらい

- ・すがおの町のたから物についてまとめたことを伝え合う活動を通して、自分たちが伝えたいことよさや改善点に気付き、「すがおの町のよさがもっと伝わるものにしたい」という思いをもつことができるようにする。

(2) 単元の展開

3年生にとっては初めての総合的な学習の時間ということもあり、児童が学び方を学べるように、「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という探究のプロセスの流れに沿って、学級全員で同じ物について調査するようにした。

第一次では、「すがおの宝物にはどんな物があるのだろう」と

いう課題を基に、ウェビングマップを用いて絞り、「眼鏡橋」について調査した。「情報収集」では、2年生の生活科で学習したことをもとにしたり、スクールヘルパーの方に眼鏡橋の紙芝居を見せていただいたりした。「整理・

分析」では、調べたことの中でも特に伝えたいことを話し合い、どのように整理していくと分かりやすいかを全体で話し合っていた。「まとめ・表現」では、誰に知らせたいかを話し合い、小さな子どもから大人まで「すがおの宝物」を伝えることができると考え、本にまとめた。そして、出来上がった本を地域の方に見ていただくことができた。

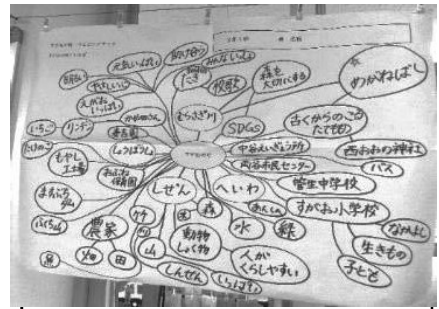
第二次では、「ほかにもすがおの宝物ってあるよね。」という考えから、第一次のウェビングマップに戻り、「菅生の滝」、「いかだレース」、「岡村農園」の3つのグループに分かれ調査した。

本時の学習では、すがおの町のよさをもっと伝える本にするために、グループごとに本にまとめたことの発表をし、「よかったこと」「もっと知りたいこと」「アドバイス」の3つに分け、考えたことをYチャートに整理した。

各グループの本の内容を聞いて、個人で考えたことを、Yチャートを使って整理したことで、具体的な改善点に気付くことができた。また、付箋紙に書いてあるアドバイスを参考に改善点を考えることができた。

ねらいとしていた「自分たちの気持ちを入れる」と、すがおの町のよさがより伝わりと気付いている児童も見られた。

一方で、付箋紙にアドバイスを書かせる際に、書く内容についての視点を明確にしていなかったために、より伝わるかどうかという内容ではなく、発表の仕方についてアドバイスを書いていた児童も多く見られた。発表を聞くにあたって、また、話し合いをするにあたって、教師も児童も、しっかり視点をもちおくことの重要性を改めて感じた。



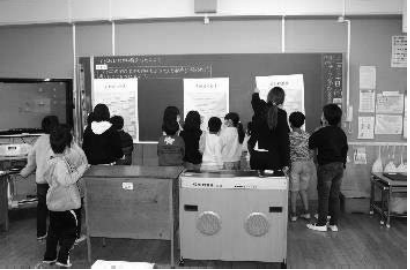


ウェビングマップ



3年生の単元の流れ

(3) 学習展開の実際

学習活動	○ 指導上の留意点 T：教師の発問 C：児童の反応
1 本時のめあてを確認し、学習の見通しをもつ。	
<p>めあて すがおの町のよさがより伝わる本にするために考えたことを伝え合おう。</p>	
<p>2 グループごとに発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岡村農園グループ ・いかだレースグループ ・すがおのたきグループ <p>3 他のグループの発表を聞いて考えたことを色ごとに付箋に書き、Yチャートにまとめていく。</p>	<p>T：他のグループの発表を聞いて、よかったこと、もっと知りたいこと、アドバイスを付箋紙に書いてはりましょう。</p> <p>○ 「どんな気持ちでそれを書いたのか」を聞き、子ども達の思考が広がるようにする。</p>
	 <p>C：写真があつてとてもわかりやすかった。</p>
<p>4 Yチャートをグループごとに見て、考えたことを書く。</p> 	<p>T：付箋紙を見て、どんなところを改善するとよいのか考え、付箋紙に書いてみましょう。</p> <p>C：学校の水が、菅生の滝から来ていることを初めて知りました。</p> <p>C：いかだレースをした当時の人の感想を書いている所がよかったとあったので、自分達の思いも書き加えよう。</p>
<p>5 本時の学習を振り返り、次時の見通しをもつ。</p>	<p>○ 振り返りの視点を明確化し、本時の話合いのよさや大切さに気付ける振り返りにする。</p> <p>T：みんなが考えた改善点を整理して、もっとよい本にしていきましょう。</p>

2 第5学年 「むらさき川じまん」

(1) 単元のねらい

- ・ごみを捨てないでほしいという思いがたくさんの人に伝わるポスターの特徴について話し合う活動を通して、ポスターを制作するときに大切なことに気づき、今後の活動に生かすことができるようにする。

(2) 単元の展開

川の自然環境を守るために、「川にごみを捨てないでほしい」というメッセージをたくさんの人に伝えることができるポスター制作に向けて、個人で考えた内容を、バタフライ・チャートを使って全体で意見交流を行い、ポスター制作をする上で大切なポイントについて考えた。

バタフライ・チャートの項目は、「成功」「失敗」のほかに、より強い項目も入れることで、さらに深くトピックに含まれる多義性・多面性に迫ることができるようにした。

また、項目分けの基準を明確にするため、児童と話し合い、数値化したり、見た人の反応を具体化したりした。例えば、「成功は、1万人以上の人が見てくれる」「大成功は、千人以上の人々の心に届く」のように、個人で思考したり、全体で話し合ったりするときの視点が明確になるようにした。

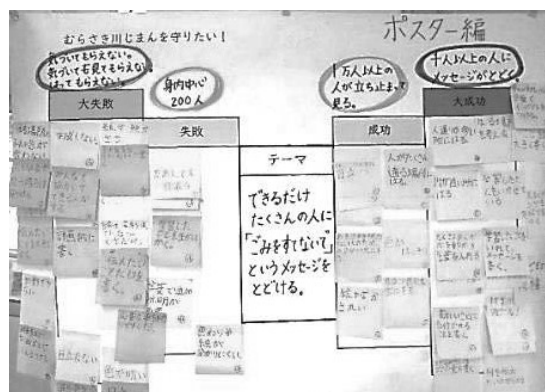
これにより、個人で思考したり、全体で話し合ったりする活動をスムーズに行うことができた。

日頃、自発的に発言をすることが少ない児童が積極的に話し合いに参加したり、最後まで学級全体でゴールに向けて話し合ったりすることができた。

本時では、「大失敗」から始めて「大成功」の項目について話し合った。バタフライ・チャートを左から右へと見ることができ、児童の思考の流れに沿った話し合いをする上でも効果的だった。また、「大失敗」「失敗」の解決策を考える活動を設定し、大成功につなげるために大切なポイントについて、より深く話し合う姿が見られた。

これまで、バタフライ・チャートを活用したことがなかったが、国語科や総合的な学習の時間で活用することで、バタフライ・チャートを活用する利点について知ることができた。

また、討論会や学級会等の話し合い活動での活用等、様々な場面で効果的に活用できるようになったことも成果の一つである。



バタフライ・チャート


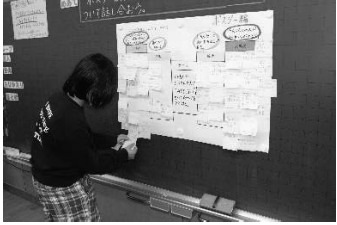

授業後の児童の振り返り

個人で考えたときは失敗するとはどんなことか
をわしは思いうかばなかつたけど、みんなまで意見を
話し合うと考えが広がり、成功のためのポ
イントも失敗しそうなところも話し合ひてまとめるこ
とができました。大失敗にならないように考えを出し合ひ
制作のポイントを決めることができました。

成功と失敗の両方から考えることで、制作のポイントをまとめることが
できましたね。

みんなで大失敗や成功のふせんをはって
いくと、新しく分かったことがありました。
大失敗がないように解決してい
たりしました。字を大きく書いて、絵
や写真をはたりして、ポスターを完成
させたいです。みんなと話し合ひと新しく気付ける
ことがたくさんありましたね。目立つようにする方法についてもしっかり
考えることができます。

(3) 学習展開の実際

学習活動	○ 指導上の留意点 T：教師の発問 C：児童の反応
<p>1 本時のめあてを確認し、学習の見通しをもつ。</p>	<p>めあて ポスター制作を成功させるポイントについて話し合おう。</p>
<p>2 個人で考えたことを全体で出し合い、整理をする。</p> 	<p>T：はじめに大失敗について意見を出してください。 ○ バタフライ・チャートを使って個人で考えたことを基に、「大失敗」「失敗」「成功」「大成功」の順に出し合うことで、ポスター制作のポイントを整理できるようにする。</p>
<p>3 整理した情報をもとに、伝えるための解決策を考える。</p>	<p>T：失敗を成功に変えることができるような解決策を青の付箋紙に書きましょう。 ○ 解決策を考えることで、思考ツール（バタフライ・チャート）を基に、失敗の項目に注目させ、その原因を分析することができるようにする。</p>
<p>3 個人で考えた解決策を出し合い、話し合う。</p> 	<p>T：解決策とその理由を教えてください。 ○ 自分の考えを明確にして話し合いに参加することで、より多面的・多角的な見方・考え方ができるようになる。 ○ 自分たちが考えたことのよさを実感できるように、解決策と成功の項目を線でつなぐなどして、視覚的に分かりやすいようにする。</p>
<p>4 ポスター制作のポイントをまとめる。</p>	<p>C：必要なことだけを書けばいいと思います。 C：絵や図を入れると伝わりやすいと思います。 ○ ポスター制作のポイントを多面的・多角的に捉えることができるように、思考ツール（バタフライ・チャート）全体に注目しながら、話し合いの振り返りを行うようにする。</p>
<p>5 本時の振り返りをする。</p> 	<p>C：みんなで話し合うことで新しく分かったことがありました。 T：製作のポイントに気を付けてポスターにまとめていきましょう。</p>

3 第6学年 「竹を身近にしよう（使用）プロジェクト」

(1) 単元のねらい

・制作した作品について、竹のよさが十分に伝わるものかを話合う活動を通して、自分達が制作した作品のよさや問題点に気づき、今後の制作に生かすことができるようにする。

(2) 単元の展開

本単元では、論理的に考えるための技法として、PMIを活用した。Pに良かった点、Mに改善点、Iに新しいアイデアという観点を設定した。

PMIを活用したことにより、自分たちの製作体験やアンケートを効率よく整理することができた。

そして、個人でまとめたものをグループで共有することにより、新たな気づきもあり、製作物を多面的に整理・分析することができた。

児童は、PMIをすでに体育科の学習で活用していたため、整理・分析の際、スムーズに取り組むことができた。

今回PMIを使用するにあたり、体育科の学習では横向きの表であったものを、縦向きに変えたことも効果があった。自分達の思考の流れが視覚的に見やすくなり有効であった。

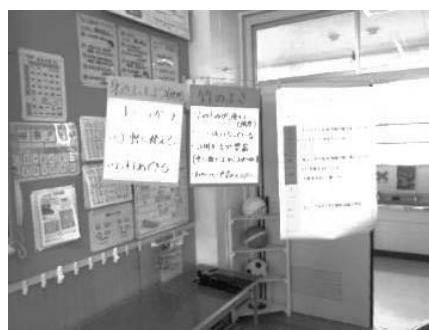
また、整理・分析をする際に、視点を明確化したことも有効であった。視点を表示した資料を掲示し、常に視点に立ち返ることにより、新たなアイデアに向けて話合いの論点を絞ることができた。

さらに、アンケートを活用したことにより、より多くの情報を得ることができた。自分たちの体験や話合いだけでは気が付かない点まで整理し、話合いを進めることができた。

話合いや発表の際には、他のグループに意見を聞きにいたり、アドバイスをしたりする姿も見られ、クラス全体で竹のよさを生かした製品をつくらうという意欲が感じられた。



活用したPMI



視点を表示した掲示

今日私達は、作ったプロジェクトを元にもっと工夫があるプロジェクトを作るために考えました。私は竹をそのままつかって見た目を綺麗にした物がいいと思いました。でも川津のすえをとって不安定をなく考えました。よかったです。他のグループでも、自分達がしたいかなとをいって発表できました。次の日もいろいろ考えていきたいです。

友達の考えや体験をもとにして
話合いができた児童の振り返り

今日グループの人と前日、個人整理したことを話し合っ、製作中の自分達の不安なところや、アンケート結果から、良いところと改善点のこの二つを考へ出すことができたのでよかったです。次は、製作としていく時に、前日の経験を活かすように頑張っています。

不安を解消して、おれに気持よく使ってもらいたいです。

アンケートを参考にして改善策が
考えられた児童の振り返り

(3) 学習展開の実際

学習活動	○ 指導上の留意点 T:教師の発問 C:児童の反応
1 本時のめあてを確認する。	
2 個人でまとめたP MIをもとに、竹のよさを伝える作品になっているかを分析する。	<p>めあて 竹のよさを伝える作品になっているのかを話し合い、次の改善につなげよう。</p>
	<p>T:初めにグループでP(よかった点)とM(改善点)を確認しましょう。</p> <p>○ 次の改善につなげることができるように、思考ツール(PMI)を用い、よかった点、改善点、新しいアイデアで意見を分類する。</p> <p>○ 前時までの考えと比較することができるように、設計図や振り返り、アンケートなど考えをまとめたものを手元に置いておくようにする。</p>
3 整理した情報をもとに、改良点を話し合う。	<p>T:問題点を解消し、竹のよさを伝えることができるような、新しいアイデアを出し合って話し合いましょう。</p> <p>○ 自分たちで制作した製品が、身近で使用しやすいものへと変えていけるように視点をはっきりとしておく。</p> <p>○ 思考ツール(PMI)を基に、次回の作品の改良につなげることができるように、GIGA端末のオクリンクで改良点とその理由を記述するようになる。</p>
4 自分達で考えた改良点を発表する。	<p>○ 前回までの作戦シートを全員に配布しておき、聞く側が前時との違いを比較することができるようにする。</p> <p>○ 自分達がまとめた資料は、全員が確認できるように、一人一人のGIGA端末に送信するようになる。</p> <p>T:発表を聞いて、もっと詳しく聞いてみたいこと等はありませんか。</p> <p>C:接着するためのいい方法は見つかりましたか?</p> <p>C:○○の方法は、私たちが実際に試してみても難しかったので、やめたほうがいいと思います。</p>
5 本時の振り返りをする。	<p>○ 振り返りの視点を明確化し、本時の話し合いのよさや大切さの振り返りができるようにする。</p> <p>T:今日の振り返りを教えてください。</p> <p>C:新しいアイデアが2つ出たので、どちらの方がいいか考えて新しい設計図をつくりたい。</p> <p>C:他のグループの経験を知ることができてよかった。</p> <p>T:みんなが考えた改善点をもとに、設計図をもう一度つくっていきましょう。</p>

VI 成果と今後の課題

(1) 成果

「見方・考え方」を総合的な学習の時間の探究のプロセス（課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現）の各課程で働かせていくことで、見通しをもって活動できたり、自信をもって話し合い活動に参加できたりした。また、5年生の実践に見られるように、児童はポスター製作のポイントについて多面的・多角的に考えることができるとともに、自分の考えに対する理由や根拠を明確にすることができた。

思考ツールについては、これまでの研究の継続から、いろいろな教科、いろいろな学習場面で積極的に活用することができた。総合的な学習の時間の学習がない低学年であっても、生活科等において1年生では、「PMI」「ピラミッドチャート」を活用したり、2年生も「Yチャート」を活用して話し合い活動等を行ったりしている。学習を積み重ねることで、思考ツールをスムーズに使うことができるようになってきている。

また、思考ツールを活用して話し合い活動等を行うことで、調査結果や資料などの客観的なデータをもとにして、根拠を明らかにして自分の考えを表現したり、自分自身の考えを再構成したりするなど、物事を筋道立てて考えることができるようになってきている。

このような継続した総合的な学習の時間の取組から、各学年の発達段階やテーマを踏まえ、すがおの「ひと・もの・こと」と深く関わりながら、郷土を愛し、郷土を大切にす子どもたちが育っている。

(2) 今後の課題と方向性

本校は、児童数の少ない小規模校であるため、話し合いや調査、情報量においても限界がある。また、卒業し中学校に進学すれば、大人数の集団（社会）の中に飛び込まなければならない環境にある。

そのため、思考ツール等を活用しながら、整理・分析できる力を継続して磨くとともに、今まで以上に、ICTの積極的な活用を進め、中学校区や、より広い社会をターゲットにしながら、子どもたちがより広い視野を持てるようになることが課題である。

今後もふるさとすがおの「ひと・もの・こと」としっかり関わり、向き合い、考え、発信する取組を継続していきながら、郷土を愛し、郷土を守る子どもたちを育ていきたいと考えている。



菅生の滝

ESDを主軸とする中学校3年間を通した環境教育のカリキュラム

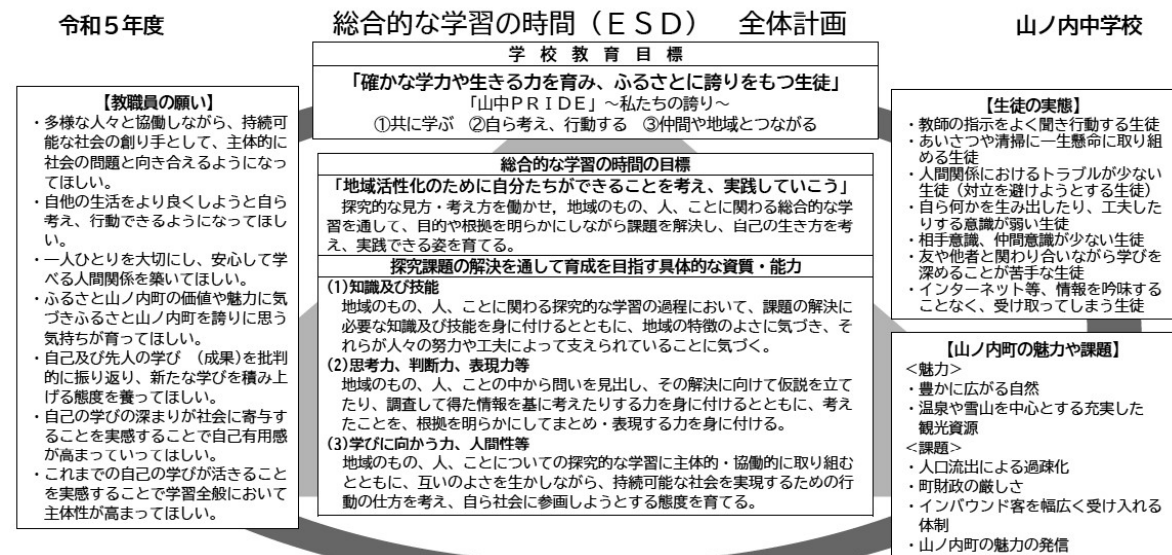
——「確かな学力や生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒」の育成を目指して

長野県山ノ内町立山ノ内中学校
校長 山口 近
研究主任 島田 俊哉

I はじめに

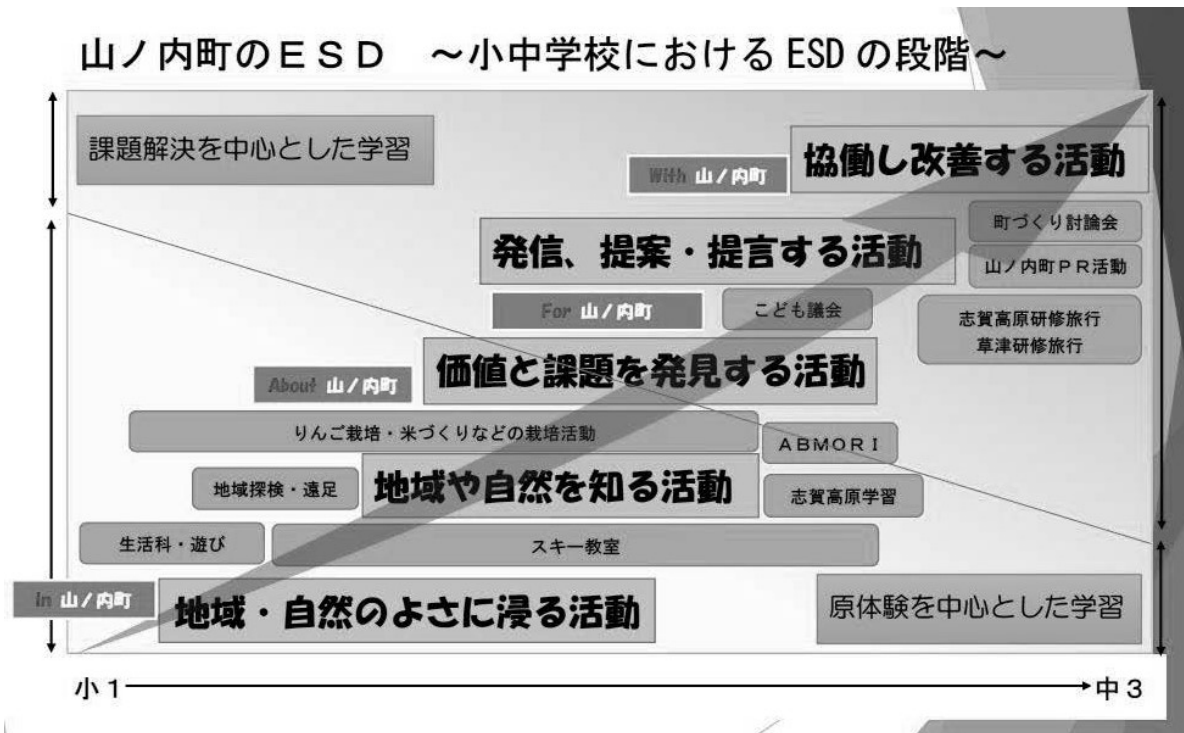
本校では、学校教育目標「確かな学力や生きる力を育み、ふるさとへの誇りをもつ生徒」の実現に向け、「ESD」や「ユネスコスクールとしての活動」を推進している。平成29年3月よりユネスコスクールに加盟し、地域にあるユネスコエコパークの志賀高原や、渋温泉といった観光資源を材としながら、SDGsとも連動する形で、「持続可能な開発のための教育」であるESDを行い、「総合的な学習の時間」として機能する形となっている。

II 本校のESDのカリキュラム



	学年目標	学年テーマ	付けたい力	付けたい態度	Contents1	Contents2	Contents3	Contents4
1学年(発見)	ESDの活動を知り町の魅力の再発見と活性化に向けての課題を探ろう。	山ノ内町の魅力と課題を知ろう。	情報を集め取捨選択し課題を見いだす力。	3年間の問題意識と課題解決への意欲を持つ。	【志賀高原研修旅行(7/11-12)】 ①志賀高原ユネスコエコパーク講義(5月) ②追究課題の設定 ③課題追究 ④SDGs体験講座(当日)	白根祭での発表(9/22-23)	【地域自慢探し(10/30-11/1)】 ①観光、温泉、農業、特産物などのグループをつくり、地域の自慢を調査する。 ②調査内容をまとめ、町自慢のガイドブックを作成する。	信州ESDコンソーシアム発表交流会への参加 ・1年間のESD活動を通して学んだこと(成果と課題、さらに学んでいきたいこと)をまとめ、発信する。
2学年(比較)	町の抱える諸問題の解決に向けての意欲と方向性を持つ。	草津町に学び、山ノ内町と比較して魅力の再発見しよう。	他と比較し問題解決の方法を考える力。	問題解決への意欲と方向性を持つ。	【草津研修旅行(7/5-6)】 ①生徒の興味関心の基ついた課題別グループによる事前調査活動 ②草津町での実地調査 ③調査研究のまとめ	①山ノ内町と草津町を比較しながら、草津研修旅行を踏まえた上での課題追究の発表。	【職場体験学習(10/31-11/1)】 ①町及び中野市の職場で、地域に働く人に対する理解と、将来の仕事について考える機会とする。 ②実習事業所の仕事内容とSDGsの関連を意識する。	
3学年(発信)	山ノ内町の持続発展に自分に関わり、地域や他地域に発信しよう。	これまでのESD学習で学んだことをまとめ発信していこう。	情報をまとめ、発信し行動する力。	山ノ内町の持続発展に自分に関わり、地域や他地域に発信しようとする姿。	【修学旅行(4/27-29)】 ①山ノ内町のお勧めポイントのリーフレット作成 ②京都でのアンケート調査と町の紹介 ③アンケートのまとめ	【中学生が夢みる町づくり討論会(7/11)】 ①アンケートの結果を踏まえ、持続可能な町づくりのためのアイデアを提案し、討論会を深める。	中学生が夢みる町づくりアイデア集の編纂(2学期) ①これまでのESD学習を踏まえ、第6次山ノ内町総合計画等を参考にしながら、町づくりの提案書をまとめる。	3年間の活動のまとめ ・ESDファイルを用いて、ポートフォリオにまとめる

資料1 本校のESDの全体計画図(抜粋)ⁱ



資料2 山ノ内町における小中一貫のESDカリキュラム

上の資料で示したように、本校のESDは3年間を小中9年間通したカリキュラムにより構成されているⁱⁱ。「地域活性化のために自分たちができることを考え、実践していこう」を全校の活動目標とし、1年次は「知る」、2年次は「比較」、3年次は「発信」をテーマとしながら学習を進めている。3年次の「中学生が夢見る町づくり討論会」において、山ノ内町の活性化を目指す上での提案を町関係者に向けて提言することを全体のゴールに据えている。本稿では、主に1年次・2年次の活動、本校が連携している金沢大学の加藤隆弘先生による指導を取り上げる。

Ⅲ 今年度の実践

【1学年】

< 単元名 >

「発見！山ノ内の魅力と課題～志賀高原ユネスコエコパーク学習と地域自慢探しを通して～」

< 単元の目標 >

志賀高原ユネスコエコパーク学習や地域自慢探しの活動で、過去に先輩が行ってきたテーマ学習の報告や小学校でのESDの学びを自分自身が追究したいテーマと関連付け、追究課題を立ててグループで考察したり、フィールドワークや講話を聞き、山ノ内町の自然や地域産業、文化について理解を深めたりすることを通して、山ノ内町の現状を正しく把握し、地域社会の一員としての自覚を高め、山ノ内町にどのような課題や魅力があるか、自分の考えをもつことができる。

< 評価規準 >

A 知識及び技能	B 思考力、判断力、表現力等	C 学びに向かう力、人間性等
ア 山ノ内町には、豊かな自然を生かした観光資源がある一方で、その環境保全や	ア 山ノ内町の現状を知り、過去の自分自身の学びや、先輩が追究して得て	ア 課題解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、自身の活動を振り返

<p>過疎化に課題を抱えていることに気付いている。</p> <p>イ 環境保全や地域活性化のために様々な取り組みが行われ、町が支えられていることを理解している。</p> <p>ウ 必要な情報を適切に収集・選択し、分かりやすくまとめている。</p> <p>エ 地域の現状を知るために、課題追究を行うことによって、自らの行為が未来社会に深く関わっていることに気付いている。</p>	<p>きたことを元に、追究課題を設定している。</p> <p>イ 山ノ内町の現状について、フィールドワークを活用しながら、幅広く、実感をもって情報を収集している。</p> <p>ウ 他者に自分の考えが伝わるように、目的に応じて情報を分類したり、効果を意識して表現方法を組み合わせたりしている。</p>	<p>りながら、次時の活動に生かそうとしている。</p> <p>イ 異なる意見の良さや他者の実践や考えの価値を受け入れ、参考にしようとしている。</p> <p>ウ 山ノ内町の一員としての自覚をもち、持続可能な地域社会を目指す上での課題や生かすべき魅力を考えようとしている。</p>
--	--	--

<指導と評価の計画>

小単元名 (時数)	ねらい・学習活動	A 知	B 思	C 態	評価方法
ESD やユネスコエコパークについて知ろう。(3)	ESD やユネスコエコパークについて知ったり、小学校時代での学習を振り返ったりする中で、仮のテーマを設定する。	ア		ア	学習カード
過去の先輩の事例を参考に追究テーマをブラッシュアップしよう。(2)	自身が設定した仮の追究テーマと関連している過去の追究事例を参照して仮テーマを再検討し、似たテーマをもった者同士とグループで情報を共有し、グループの追究テーマを決定する。		ア	ア イ	学習カード
志賀高原研修旅行で調査する内容を決めよう。(4)	決定した追究テーマについて、志賀高原研修旅行において調査する内容をグループで決定し、志賀高原研修旅行で調査を行う。	イ	イ	ア イ	学習カード 行動観察
発表に向けて、課題追究を進めよう。(5)	文化祭での発表に向けて、研修旅行や個人で調査したことを踏まえて、考察を深めていく。	ウ エ	ウ	ア	学習カード 行動観察
地域自慢探しを通して、山ノ内町の魅力を再発見しよう。(7)	温泉街を巡り、地域の魅力や課題について考える。	イ ウ	イ ウ	ア ウ	学習カード 行動観察
これまでの学びから山ノ内町の課題を明らかにしよう(2)	これまでの活動で得た学びを振り返り、山ノ内町を活性化させるための課題を明らかにする。	ア エ		ア ウ	学習カード

<実際の様子>

○先輩の調査を参照しながら課題設定を行う姿

本校の実践の課題点として、例年行っているコンテンツの大部分を次年度も引き続き行っていることによる、活動の停滞が挙げられる。前年度追究したこととほぼ同じ内容の課題が設定され、同様の結論に至る場面がしばしば見られた。そのため、まず過去に行われた調査を生徒に提示し、それを見た上で課題設定を行うことで、過去の活動の再生産になる状況から脱することを狙った。

○志賀高原での体験・インタビュー

地域のユネスコエコパークである志賀高原を訪れ、外来種駆除体験やトレッキング、地熱温泉学習等を通して、地元ユネスコエコパークの現状の理解を深めた。特に外来種について、駆除体験の対象とした植物は志賀高原全体に繁茂しており、完全な駆除は難しいという現状に生徒は驚いていた。

また、宿泊したホテルの方へのインタビューも行い、人が集まりやすい温泉街とは違う運営の難しさ等の話に耳を傾けていた。



外来種ルピナスの駆除



トレッキングの様子



インタビュー風景

○地元温泉街への理解を深める学習

地元温泉街について、地域の文化センターの職員の方に依頼をし、事前講義・現地でのフィールドワークを行った。

事前講義では温泉街の歴史を説明していただいた。国内観光地がまだ充実していなかった時期でもあったことから、全国から多くの団体旅行者が訪れ、賑わっていた様子に驚く生徒の様子が窺えた。

フィールドワークでは、まず地域の旅館二カ所を訪れ、館内を案内していただきながら、「客層や売上げの変化」「外国人客への配慮」「当旅館ならではの取り組み」「経営上の課題」といった内容でインタビューを行った。例えば外国人客の配慮について、一方の旅館では外国人を雇用して積極的に対応し、もう一方は「外国人は現地の文化の体験を求めている」というニーズを重視し、特別な対応はしないというように、同じ



インタビュー風景



ガイドを受けながらの町歩き

前年度決めた自分の仮テーマ

--

追究テーマを決めて学習する形はここ数年1年生で続けてきている活動です。しかし…

せっかく追究するなら、過去と全く同じことをやるより、過去に行ったことを参考に、新しい視点や要素(もっとうまく調べた方がよいのでは?等々)を加えた方が、より深まるのでは…?

そこで…

今日の学習目標

過去の先輩方の学習から、追加で調べたいことを見つけよう

1、先輩方の学習で自分の追究テーマと似ているテーマを探して、参考にできそうなことを探そう。

(令和 年) テーマ
気になった部分

→そこから考えたこと

使用したワークシート



地域の旅館でも全く違う方針を打ち出している点に興味を抱く様子が見られた。

加えて、事前講義を行っていただいた方にガイドをしていただきながら、温泉街を歩き回る活動も行った。

こうした活動の中で、地域の足りない部分だけでなく、長い歴史の中で育まれた魅力を感じる姿が見られた。安易に足りないものを足していくだけでなく、今ある魅力をいかに生かしていくか、という視点が生まれたように思う。

【2 学年】

< 単元名 >

「草津町との比較を通して、山ノ内を今よりも魅力ある町にするにはどうすれば良いか考えよう」

< 単元の目標 >

山ノ内町と隣接し、類似した自然環境を持つ草津町について、小グループごと設定した追究テーマに沿って調査活動を進め、2つの町を比較することを通して、山ノ内町の魅力や課題を把握し、地域社会の一員としての自覚を高め、山ノ内町のより良い発展の為にどのようなことが必要であるかを考えることができる。

< 評価規準 >

A 知識及び技能	B 思考力、判断力、表現力等	C 学びに向かう力、人間性等
ア 草津町には、湯畑をはじめ、多くの観光客を引き付ける様々な観光資源があることを理解している。	ア 1年次の自分自身の学びや草津町の調査を基に、山ノ内町の現状を捉え、追究課題を設定している。	ア 課題解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、自身の活動を振り返りながら、次時の活動に生かそうとしている。
イ 草津町の特色について、書籍やインターネット等を活用しながら、幅広く、効率的に情報を収集している。	イ 草津町と山ノ内町の比較を通して、山ノ内町の魅力や課題に気付いている。	イ 異なる意見の良さや他者の実践の価値を受け入れ、参考にしようとしている。
ウ 山ノ内町のより良い未来について考える学習が、今後の地域の発展に深く関わっていることを理解している。	ウ 他者に自分の考えが伝わるように、目的に応じて情報を分類したり、効果を意識して表現方法を組み合わせたりしている。	ウ 山ノ内町の一員としての自覚をもち、持続可能な地域社会を目指す上での課題や生かすべき魅力を考えようとしている。

< 指導と評価の計画 >

小単元名 (時数)	ねらい・学習活動	A 知	B 思	C 態	評価方法
山ノ内町の良さや課題について整理し、山ノ内町を魅力ある町にするにはどうし	1年次の調査活動である「山ノ内の地域自慢」を振り返りながら、山ノ内町の良さや課題について整理することを通して、「より良い町の発展のためにどのような		ア	ア	学習カード

たら良いか考えよう (1)	ことが必要か」ということについて現時点での仮説を立てる。				
山ノ内町に隣接する、草津町について知り、研修旅行で調査してみたい内容を整理しよう(4)	草津研修旅行に向けて、草津町の「概要」「自然・温泉」「施設・旅館」「名物・特産品」について調査活動を個別に進める。また、それらの調査活動から、特に焦点化して調査したい内容や場所について自分の考えを整理する。	ア	イ		学習カード
草津研修旅行での調査テーマをグループごとに決定しよう(2)	個人で調査してみたいことと似たテーマをもった者同士でグループを編成し、情報共有しながら、グループの追究テーマを決定する。		ア	ア イ	学習カード
草津研修旅行で調査する内容や場所を決めだそう(4)	決定した追究テーマについて、草津研修旅行において調査する内容や場所をグループで決めだし、立案した行動計画に則って、現地での調査活動を進める。		イ	ア イ	学習カード 行動観察
白樺祭での発表に向けて、草津町の魅力を整理しよう。(5)	文化祭での発表に向けて、研修旅行や個人で調査したことを踏まえて、「草津町の魅力」を整理し、グループごとパワーポイントにまとめる。	イ	ウ	ア	学習カード パワーポイント
草津町と山ノ内町を比較しながら、山ノ内町の魅力や課題を整理しよう(4)	グループごとに調査してきた中で見えてきた草津町の魅力と山ノ内町の現状を比較することを通して、山ノ内町の魅力や課題について整理していく。	イ	イ	ア	学習カード 行動観察
これまでの学びから、これからの山ノ内町をさらに魅力ある町にするにはどうすれば良いか提案しよう(5)	これまでの活動で得た学びを振り返り、山ノ内町を今よりも魅力ある町にするためにはどうすれば良いか、グループごとに提案を考える。また、その提案を実現可能なものとするために何が必要となるのか具体的に調査する。	ウ		ア ウ	学習カード

<実際の様子>

○草津町の訪問

グループごとに追究テーマを決め、山ノ内町と比較していくことを目的に現地調査を行った。現地の方の声を聞くことを重視し、町役場の職員や旅館、お土産販売店で働く方へのインタビューを中心に行った。山ノ内町の温泉街と比べて遙かに多い観光客が訪れていることについて、「観光客が歩いて巡れる範囲での充実した観光資源」や「湯畑といった分かりやすいシンボル」の存在が重要であるという気付きをもった。草津



インタビュー風景

町の良さが印象に残る中、「でも、山ノ内町には～なものもあるから、それを草津町のように生かすことはできないか」というように、同時に山ノ内町の良さを再認識する様子も見られた。

○三年次の町づくり討論会に向けた提案を考える学習

草津町での調査と山ノ内町の現状との比較を通して、町づくり討論会において何を提案していくかをグループで考えた。「提案が実現した際に山ノ内町が具体的にどのように変化するのか」といった仮説を立てることを行い、変化の具体像をイメージする過程で、自分たちの暮らしに目を向ける思考が促し、自然に「自分事」として問題を捉えられるようにした。加えて、本校で用いている teams の共同編集機能を使うことで、他グループからも「提案」や「仮説」に対する質問や意見を集め、グループ内にとどまらない多様な考えを採り入れることができ、自らの考えを広げ、深い提案になることを狙った。



草津町との比較を通して見えてきた山ノ内町の「魅力」

- ① 果物おいしい。
- ② 地産地消を進めている

草津との比較を通して「魅力」とあると判明した具体的な事例
その材料を使った名物の評判が良いから。牧場があり、その牧場の牛乳を使ってお菓子を作っている。

草津町との比較を通して見えてきた山ノ内町の「課題」

- ① 駅前に活気がない。
- ② 若い観光客が少ない。

草津との比較を通して「課題」とあると判明した具体的な事例
観光客の減少そして町の知名度。

山ノ内町を今よりも魅力ある町にするために…

私たちのグループは以下のような提案をします

- ① 駅に山ノ内町の特産品店をつくる【お土産店】
- ② 駅周辺に地獄谷や志賀高原の広告を張って駅からいろいろな観光地に行ってもらえるようにする
- ③ 特産品を使ったカフェを作る
- ④ 特産品を使ったお菓子やお土産を作り、販売する

この提案が実現すると山ノ内町はズバリ以下のように変わります(仮説)

- ① 観光客が多くなる
- ② 若い観光客が増えてインターネットに投稿してもらえるとより多くの若い観光客が来てくれる

…と考えます！

新しいコメント

① 駅前は確かに活気がないので、お土産店を作るのいいアイデアだと思います。

② ありがとうございます

③ 山ノ内町のいいところをSNSとかののせきのほうがいいと思った。

グループで整理したパワーポイント

【金沢大学 加藤隆弘准教授との連携】

本校は、金沢大学で総合的な学習の時間等を研究されている加藤准教授と連携してESDを行っている。本年度は、町づくり討論会・校内での公開授業という2つの場面で本校の実践を見ていただいた。

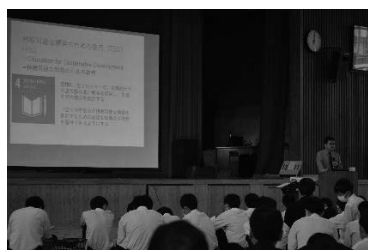


町づくり討論会の様子

特に後者の公開授業においては、各教科の授業をESDの観点で位置づけて行った。また、加藤准教授には生徒に向けた講演もしていただいた。参観した授業を例に出しながら、自身の学びがどのようにESDと結びついているのかを丁寧に説明していただいた。生徒が自身の学びの有用性を再確認する機会となった。

単元(題材)名	ESDの視点①(単元の性質)	ESDの視点②(付けたい力)	単元の方向性
モアイは語る —地球の未来—	有限性・責任性	批判・未来・多面	資源の有限性を説く本文を、同様の事例を扱った別の本文と比較し、批判的に捉え直す。
字のない葉書	多様性・相互性	多面・未来・関連	字の書けない未婚を最終の年に学童誌に出した父親の娘を思う深い愛情を、文章構成や表現技法から読み取る。
基本的人権と個人の尊重	多様性・公平性	未来・多面・協力	日本国憲法が保障する権利を守るために、自分たちは社会とどのように関わるべきかを考える。
接触機会の削減 ～二次方程式～	SDGs3, 8, 11	批判・他面	100人の社員を抱える会社が、社員の接触機会を8割削減するには、出社人数を何人にすればよいかを考える。
グラフは斜めだけ?	多様性	批判・未来・多面	一次関数のグラフが、右上がり・右下がりのものだけではない点を、批判的に考察しながら学び進める(発見・作成)。
接触機会の削減 ～二次方程式～	SDGs3, 8, 11	批判・他面	100人の社員を抱える会社が、社員の接触機会を8割削減するには、出社人数を何人にすればよいかを考える。

ESDの視点で位置づけた授業



加藤准教授による講演

IV 成果と課題

【成果】

- ・特に中学校において、総合的な学習の時間が行事の準備のために消費されている現状もある中、本校では行事をESDと連動させる形で位置づけることで、環境教育を含めた探究学習を、時数を十分に確保しながら行えている。
- ・過去に行われた事例を生徒自身が参照していくことで、同じコンテンツを扱いながらも、新規性をもたせた活動を行える。
- ・自分たちが考えた提案によってどのような効果があるかという「仮説」を立てることで、自分自身の日々の生活とも関わらせながら考えることにつながり、課題を自分事として捉える姿勢を喚起した。

【課題】

- ・ESDと連動する行事コンテンツが固定化しており、生徒の主体的な学びが停滞してしまう場面が見られる。宿泊学習については宿の確保の関係で前年度から構成を練る必要があり難しい部分もあるが、全体のカリキュラムについても再考する必要性を感じている。
- ・過去の事例を参照する実践は行ったものの、全体としてはまだまだ活動を再生産する場面が多く、活動の練度が高まらない。活動の経過を次年度に引き継いでいく姿勢を高める必要がある。前述のコンテンツの固定化も含め、小学校でも地域学習は十分に行っていることから、中学校1年次での「知る」をより深まりあるカリキュラムにしたい。

ⁱ この他に、文部科学省「持続可能な開発のための教育」最終閲覧日：2023年11月8日 (<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>)における「ESDで目指すこと」を参考とした位置づけも掲げている。

ⁱⁱ 小学校での実践事例については、長野県山ノ内町立山ノ内南小学校(2023)「ホールスクール(学校全体)で取り組むESDの実現」『第54回全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)第58回東京都小中学校環境教育研究発表会』(pp.42-51)を参照されたい。

研究会沿革史

全国小中学校環境教育研究会
東京都小中学校環境教育研究会

- 昭和39. 9. 10 東京都小中学校公害対策研究会が錦華小学校にて発足
初代会長に 小野 孝雄 就任
11. 13 会報「碧い空」創刊号を発行
12. 11 講演会「公害と児童生徒の健康について」を開催（都PTAと共催）
- 昭和40. 1. 20 会長・副会長で四日市・尼崎方面の公害状況を観察
- 昭和40. 10. 5 公害講演会を開催（都PTAと共催）、空気清浄器を都内50校へ配布
12. 1 都内児童生徒の公害に関する作文・詩募集
- 昭和41. 10. 1 全国主要都市の中学1年生を対象に公害意識調査実施
- 昭和42. 1. 20 都内小学校・中学校を対象に教育環境調査を実施、2月に結果を発表
2. 13 全国小中学校公害対策研究会を発足（東京都港区立桜田小学校）
東京・大阪・四日市・北九州・神奈川・千葉・釜石
-
- 昭和42. 6. 1 第二代会長 伊藤 和 就任
11. 1 東京都学校公害対策連絡協議会に協力
- 昭和43. 11. 7 第1回 学校公害研究大会を開催（代々木ゼミナール）
- 昭和44. 4. 10 都の学校に及ぼす公害対策研究会へ協力
10. 10 第2回 学校公害研究大会を開催（東京都港区立桜田小学校）
- 昭和45. 2. 6 第3回 学校公害研究大会を開催（勤労福祉会館）
2. 10 単行本「碧い空を子どもらに」を発行
-
- 昭和45. 4. 1 第三代会長 中島 定吉 就任
4. 15 東京都公害副読本・スライド製作委員を出し、その製作に協力
- 昭和46. 1. 10 第2回 全国調査実施「東京都及び七大都市の教育環境意識調査」
中学1年・小学校5年生、都内4万名、七大都市8万名
全国小中学校養護教諭対象「公害に関する意識と実態調査」35,000校
1. 28 第4回「親と教師の公害研究大会」開催（勤労福祉会館）
- 昭和46. 10. 14 第5回 学校公害教育研究大会開催（東京都江戸川区立平井南小学校）
11. 10 公害講座開講（朝日新聞社講堂）
- 昭和47. 6. 1 都内の児童生徒対象「公害意識と実態調査」実施
- 昭和48. 2. 20 第6回公害研究大会（東京都品川区立鈴ヶ森中学校）

-
- 昭和48. 4. 1 第四代会長 立石 書信 就任（中央公害審議会委員兼務）
6. 5 都内の児童生徒の公害意識実態調査「教育環境調査」実施
- 昭和49. 5. 15 環境週間記念、都内の児童生徒の公害に関するポスター、作品募集
7. 20 都内の児童生徒の夏季20日間健康調査実施
- 昭和50. 2. 10 第7回環境教育研究全国大会開催（日本青年館）
- 昭和50. 5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集
12. 5 第8回環境教育研究会全国大会開催（東京都台東区立下谷小学校）
- 昭和51. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和51. 4. 20 東京都教育委員会副読本及びスライド編集に協力
5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集
9. 7 東京湾人工渚見学会を実施
- 昭和52. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣
2. 21 第9回環境教育研究会全国大会開催（東京文化会館）
- 昭和52. 5. 10 東京都環境週間行事に協九一都内児童生徒の図画・作文募集
6. 10 東京都内児童・生徒20,000人に環境意識調査実施
9. 19 「これからの環境教育はどうあるべきか」研究会開催
（日本環境協会と共催）
12. 6 江東清掃工場・東京湾埋立地見学会
- 昭和53. 1. 12 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和53. 5. 10 東京都環境週間行事に協力
10. 31 人工渚・廃棄物埋立地等の東京湾及び宇宙博見学
- 昭和54. 1月～7月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
4月～6月 同上の行事の図画・作文募集に協力
6. 5 環境教育講演会（東商ホール）
7. 17 公害副読本代表者会議
9. 3 日本環境協会の映画企画の協力
11. 30 都水道施設見学（利根川水口）
- 昭和55. 2. 13 常任理事会（朝霞浄水）
2. 19 環境教育の講演と映画会（労音会館）
2. 21 第11回 全国環境教育研究大会（東京文化会館）
- 昭和55. 8. 21 第12回 全国環境教育研究大会（滋賀県大津市）
11. 20 人工渚・廃棄物埋立地等東京湾見学会

-
- 昭和56. 4. 1 第五代会長 谷本 寛 就任 (中央公害審議会委員兼務)
4月～6月 東京都環境週間行事に協力
6. 29 環境庁長官室にて本研究会役員と鯨岡長官、環境教育について懇談
11. 20 隅田川・東京湾見学会 (隅田川クラブ後援)
- 昭和57. 1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
2. 5 第13回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
- 昭和57. 4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力
10. 29 全体研究会 (於東京都教育会館 講師 愛知教育大学教授 榊原康男先生)
11. 18 環境教育授業協議会 (東京都杉並区立方南小学校)
- 昭和58. 1. 25 同 上 (東京都江戸川区立上小岩小学校)
2. 18 第14回 全国環境教育研究大会 (東京・関東百貨店健保会館)
会報「碧い空」20号発刊
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
-

- 昭和58. 4. 1 第六代会長 藤田 繁雄 就任 (中央公害審議会委員兼務)
4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力
11. 4 全体研究会 (東京都台東区立下谷小学校)
講師 文部省初等中教育局 教科調査官 奥井智久先生
11. 10 自本科学協会等主催、リモートセンシング研修会に協力
- 昭和59. 1. 20 第15回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
-

- 昭和59. 4. 1 第七代会長 平野 輝和 就任 (中央公害審議会委員兼務)
6. 9 第五代会長 谷本 寛 第2回朝日森林文化賞を受賞
11. 29 環境教育研究授業及び協議会 (東京都渋谷区神宮前小学校)
- 昭和60. 1. 24 第16回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京都江戸川区総合文化センター)
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
-

- 昭和60. 4. 1 第八代会長 遠藤 尚 就任 (中央公害審議会委員兼務)
6. 5 東京都台東区立下谷小学校にて総会
11. 18 千葉県船橋市立船橋小学校環境教育研究大会見学
12. 5 東京都公害監視委員会と意見交換
- 昭和61. 1. 31 第17回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京文化会館)
- 昭和61. 6. 6 昭和61年度 定期総会 (東京都練馬区立光和小学校)

10. 31 現地研修会（東京都八王子市立由木西小学校）
昭和62. 1. 23 第18回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
-

- 昭和62. 4. 1 第九代会長 塩沢 勇 就任（中央公害審議会委員兼務）
6. 4 東京都台東区立大正小学校にて総会
11. 9 現地研修会（東京都文京区立昭和小学校）
昭和63. 1. 29 第19回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
-

- 昭和63. 4. 1 第十代会長 小尾 辰昌 就任（中央公害審議会委員兼務）
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
6. 6 昭和63年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）
9. 17 都内児童の環境意識調査を実施
11. 6 環境教育研究大会第11回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）
11. 22 環境教育研究会 見学会（厚木市・七沢自然教室）
平成元. 1. 27 第20回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
1. 27 会報「碧い空」26号発刊
-

- 平成元. 4. 1 第十一代会長 松澤 秀俊 就任（中央公害審議会委員兼務）
6. 6 平成元年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）
9. 5 環境教育研究会 見学会（つくば市公害研究所）
環境教育研究会第12回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）
平成2. 1. 26 第21回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
1. 27 会報「碧い空」27号発刊

- 平成2. 6. 6 平成2年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）
9. 10 松澤秀俊会長 環境教育推進指導資料作成委員
9. 20 環境教育研究会 見学会（台風のため中止）
11. 30 第15回 全国教育研究大会に参加（国立教育会館 江頭 基子会計）
12. 6 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中央区立銀座中学校）
平成3. 1. 25 第22回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
1. 25 会報「碧い空」28号発刊
環境週間都行事の図画・作文募集審査への参加協力
-

- 平成3. 4. 1 第十二代会長 高木 恒治 就任（中央公害審議会委員兼務）
5. 31 平成3年度 定期総会（江東区立東陽小学校）
9. 19 環境教育研究会 見学会（神奈川環境センター）
11. 22 都小中学校環境教育研究発表会（江戸川区立松江小学校）

- 平成4. 1. 31 第23回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）
 会報「碧い空」29号発刊
 東京都環境実行委員会への参加
 環境教育シンポジウムへの参加
 全国ネットワークの強化活動
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
-
- 平成4. 5. 29 平成4年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会（東京都渋谷区立本町東小学校）
 第十三代会長 岩本 光雄 就任（中央公害審議会委員兼務）
 7. 29 平成4年度 全国小中学校環境教育研究会定期総会（ホテルマリナーズコート東京）
 7. 29～31 教育総合展参加協力（研究発表・展示・実演）
 12. 8 東京都小中学校環境教育研究発表会（北区立豊島中学校）
- 平成5. 1. 11 事務局 江頭基子 文部省環境教育指導資料作成協力（平成6. 3. 31迄）
 1. 29 全国小中学校環境教育研究大会（中央区立教育センター）
 会報「碧い空」30号、研究紀要24号発刊
 3. 31 環境教育研究集録 第3集発刊
 東京都環境週間行事実行委員会への参加協力
 文部省環境教育シンポジウムへの参加
 都教委グループ研究助成費受給
 全国ネットワークの強化活動
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間行事運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
- 平成5. 5. 23 平成5年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会
 （東京都渋谷区立神宮前小学校）
- 平成6. 1. 18 第25回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都庁 第二庁舎・ホール）
 会報「碧い空」31号、研究紀要25号発刊
 全国小中学校環境教育研究会支部長会・総会（東京都庁 第二庁舎・ホール）
 2. 24 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都大田区立西六郷小学校）
 3. 31 環境教育研究集録 第4集発刊
 文部省環境教育シンポジウムへの参加、協力
 全国ネットワークづくりの活動強化（支部結成）
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
- 平成6. 6. 21 平成6年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会
 （東京都渋谷区立神宮前小学校）
- 平成6. 11. 25 第30回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立南葛西第三小学校）
- 平成7. 1. 20 第26回 全国小中学校環境教育研究大会
 全国支部長会（東京都江戸東京博物館ホール）
 会報「碧い空」32号、研究紀要26号発刊

- 文部省、第1回全国環境フェアへの参加協力（埼玉県）
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
3. 31 環境教育研究集録 第5集発刊
-
- 平成7. 6. 9 平成7年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会
 全国小中学校環境教育研究会 定期総会
 全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）
 第十四代会長 江頭 基子 就任（中央公害審議会委員兼務）
8. 7 環境教育研究会 一日研修（港区立芝小学校）
12. 4 第31回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都北区立西浮間小学校）
- 平成8. 1. 26 第27回 全国小中学校環境教育研究大会（福岡県福岡市、福岡市博物館）
 会報「碧い空」33号、研究紀要27号発刊
 文部省、第2回全国環境フェアへの参加協力（10. 30～11. 1福岡県）
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊
- 平成8. 5. 30 平成8年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
 全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）
4. 5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
12. 6 第32回 東京都小中学校環境教育研究発表会
 第28回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都渋谷区立神宮前小学校）
 会報「碧い空」34号、研究紀要28号発刊
 文部省 第3回全国環境フェアへの参加協力（11. 14仙台市）
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間運営委員会への協力（委員長・会長、副委員長：副会長）
- 平成9. 3. 31 環境教育研究集録 第7集発刊
- 平成9. 5. 23 平成9年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
 全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）
 第29回 全国小中学校環境教育研究大会（高知県民文化ホール）
- 平成9. 8. 28～29 東京都小中学校環境教育研究会研究部夏季宿泊研修
 （東京都杉並区立教職員研修所）
11. 18 第33回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区小松川第二小学校）
 会報「碧い空」35号、研究紀要29号発刊
 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
 文部省 第4回全国環境フェア参加（松江市）
 東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
 東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）
- 平成10. 3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊

-
- 平成10. 5. 22 平成10年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）
第十五代会長 中庭 武雄 就任
8. 2～3 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
- 平成11. 1. 22 第30回 全国小中学校環境教育研究大会
第34回 東京都小中学校環境教育研究発表会
（東京都杉並区立杉並第十小学校、セシオン杉並）
会報「碧い空」36号、研究紀要30号発刊
第2回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：一代会長、副委員長：副会長）
3. 31 環境教育研究集録 第9集発刊
- 平成11. 5. 21 平成11年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都渋谷区立笹塚小学校）
8. 22～23 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 25～26 自然観察会実施（新潟県・当間観光リゾート）
12. 7 第35回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都渋谷区立笹塚小学校）
- 平成12. 1. 21 第31回 全国小中学校環境教育研究大会（岐阜大学教育学部附属心・中学校）
会報「碧い空」37号、研究紀要31号発刊
第3回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
文部省全国環境フェア参加（広島市）
環境パートナーシップ東京会議への参加
中央環境審議会企画政策部会と各種団体との意見交換会出席（経済社会のグリーン化）
3. 31 環境教育研究集録 第10集発刊
-
- 平成12. 6. 9 平成12年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）
- 平成12. 6. 9 第十六代会長 平部 武彦 就任
- 平成12. 8. 17～18 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区富士学園）
- 平成13. 1. 26 第32回 全国小中学校環境教育研究大会
第36回 東京都小中学校環境教育研究発表会
（東京都渋谷区立猿樂小学校・渋谷区立鉢山中学校）
会報「碧い空」38号、研究紀要32号発刊
第4回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第2回 自然観察会（新潟県・十日町市）実施
東京都環境週間行事運営委員会に参加
第3回 文部省全国環境学習フェア（三重）参加
- 平成13. 3. 31 環境教育研究集録 第11集発刊

- 平成13. 6. 8 平成13年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）
8. 16～17 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 8～9 第3回 自然観察会実施（新潟県刈羽村、当間リゾート）
- 平成14. 1. 25 第33回 全国小中学校環境教育研究大会
第37回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立大杉小学校）
会報「碧い空」39号、研究紀要33号発刊
第5回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第4回 文部科学省全国環境学習フェア（滋賀）参加
環境パートナーシップ東京会議への出席
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成14. 3. 31 環境教育研究集録 第12集発刊

-
- 平成14. 6. 7 平成14年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）
第十七代会長 佐々木 定治 就任
8. 15～16 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 8～9 第4回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）
11. 15 第38回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立二之江中学校）
- 平成15. 1. 24 第34回 全国小中学校環境教育研究大会（千葉県成田市立吾妻小学校・吾妻中学校）
会報「碧い空」40号、研究紀要34号発刊
第6回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第5回 文部科学省全国環境学習フェア（金沢市）参加
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成15. 3. 31 環境教育研究集録 第13集発刊
- 平成15. 6. 16 平成15年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）
8. 14～15 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 6～7 第5回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）
- 平成16. 1. 23 第35回 全国小中学校環境教育研究大会
第39回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都新宿区立大久保小学校）
会報「碧い空」41号、研究紀要35号発刊
第7回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第6回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（群馬県片品村）
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成16. 3. 31 環境教育研究集録 第14集発刊
- 平成16. 6. 14 平成16年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）

8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
8. 28～29 環境教育研修会（福島県Ｊビレッジ）
9. 4～5 環境教育研修会（新潟県当開高原）
- 平成17. 1. 20 全国理事会
1. 21 第36回 全国小中学校環境教育研究大会
第40回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立東葛西小学校）
会報「碧い空」42号、研究紀要36号発刊
第8回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施
第7回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（愛媛県松山市）
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成17. 3. 31 環境教育研究集録 第15集発刊

-
- 平成17. 6. 14 平成17年度 全国理事会
平成17年度 東京都小中学校環境教育研究会総会（東京都杉並区立泉南中学校）
第十八代会長 高橋 康夫 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 3～4 環境教育研究会 自然観察会 新潟県 当間高原
12. 1 全国理事会
12. 2 第37回 全国小中学校環境教育研究大会（愛知県小坂井町立小坂井西小学校）
- 平成18. 2. 10 第41回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都調布市立布田小学校）
会報「碧い空」43号、研究紀要37号発刊
第9回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール
第8回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（鳥取県）
- 平成18. 6. 6 平成18年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
8. 11～12 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（杉並区立教職員研修所）
8. 25 第10回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
9. 2～3 自然観察会（新潟県塗当開高原）
11. 9 全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
11. 10 第38回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都杉並区立泉南中学校）
第42回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第44号 研究紀要第38号発行
第9回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（つくば市）

-
- 平成19. 6. 12 平成19年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
第十九代会長 岸 栄子 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）

- 、
- 8. 24 第11回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
 - 9. 1～2 自然観察会（新潟県当開高原）
 - 10. 11 全国理事会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
 - 10. 12 第39回 全国小中学校環境教育研究大会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
 - 平成20. 2. 15 第43回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）
会報「碧い空」第45号 研究紀要第39号
第10回文部科学省 全国環境学習フェア参加（岡山市）
-

- 平成20. 6. 17 平成20年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（杉並区立泉南中学校）
第二十代会長 綿貫 沢 就任
 - 8. 4～5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）
 - 8. 8. 22 第12回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
 - 9. 6～7 自然観察会（新潟県当開高原）
 - 12. 4 全国理事会（板橋区立金沢小学校）
 - 12. 5 第40回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都板橋区立金沢小学校）
第44回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第46号 研究紀要第40号
第11回文部科学省 全国環境学習フェア（福島市）
-

- 平成21. 6. 15 平成21年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（杉並区立和泉小学校）
第二十一代会長 末吉 潤一 就任
- 6. 27～28 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
- 8. 21 第13回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 9. 5～6 自然観察会（新潟県当開高原）
- 11. 26 全国理事会（広島県海田町立海田東小学校）
- 11. 27 第41回 全国小中学校環境教育研究大会（広島県海田町立海田東小学校）
会報「碧い空」第47号 研究紀要第41号

- 平成22. 6. 28 平成22年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立杉並第四小学校）
- 6. 26～27 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
- 8. 20 第14回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 9. 4～5 自然観察会（新潟県当間高原）
- 12. 2 全国理事会（多摩市立南鶴牧小学校）
- 12. 3 第42回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）
会報「碧い空」第48号 研究紀要第42号

- 平成23. 6. 16 平成23年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）
8. 19 第15回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
11. 24 全国理事会（宮城県気仙沼市立大谷小学校）
11. 25 第43回 全国小中学校環境教育研究大会
(宮城県気仙沼市立大谷小学校・大谷中学校)
会報「碧い空」第49号 研究紀要第43号
-

- 平成24. 6. 26 平成24年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）
第二十二代会長 棚橋 乾 就任
8. 20 第16回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
平成25. 1. 2月 文部科学省・環境省
平成24年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者に向けた研修（協力）
2月 文部科学省 全国環境学習フェア（協力）
2. 14 全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）
2. 15 第44回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都新宿区立東戸山小学校）
第48回 東京大会（東京都新宿区立東戸山小学校）
会報「碧い空」第50号 研究紀要第44号

- 平成25. 6. 18 平成25年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）
6. 27 東京都小中学校環境教育研究会 研究員発足
8. 22 第17回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
11. 28 全国理事会（秋田県大仙市大曲市民会館）
11. 29 第45回 全国小中学校環境教育研究大会（秋田大会 秋田県大仙市）
会報「碧い空」第51号 研究紀要第45号
平成26. 1. 24 第49回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立連光寺小学校）
1. 2月 文部科学省・環境省
平成25年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者にむけた研修（協力）

- 平成26. 6. 17 平成26年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな〜あに見学）
11. 20 全国理事会（神奈川県横浜市立永田台小学校）
11. 21 第46回 全国小中学校環境教育研究大会（神奈川大会 横浜市立永田台小学校）
研究紀要第46号
12. 13 第18回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
平成27. 1. 30 第50回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都板橋区立板橋第二小学校）
1. 2月 文部科学省・環境省
平成26年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者にむけた研修（協力）

-
- 平成27. 6. 16 平成27年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）
第二十三代会長 国分 重隆 就任
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな〜に見学）
11. 19 全国理事会（東京都多摩市立多摩第一小学校）
11. 20 第47回 全国小中学校環境教育研究大会
（東京大会 多摩市立多摩第一小学校）
第51回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第52号 研究紀要第47号
12. 12 第19回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
12. 23 文部科学省・環境省
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン フォローアップ研修（協力）
- 平成28. 1・2月 文部科学省・環境省
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
-

- 平成28. 6. 13 平成28年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
第二十四代会長 小山 成志 就任
7. 22 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、田町スマエネパーク見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
11. 17 全国理事会（須賀川市内ホテル）
11. 18 第48回 全国小中学校環境教育研究大会（福島大会 須賀川市立白方小学校）
会報「碧い空」第53号 研究紀要第48号
12. 10 第20回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 平成29. 1・2月 文部科学省・環境省
平成28年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
2. 10 第52回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都品川区立第三日野小学校）
-

- 平成29. 6. 12 平成29年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
第二十五代会長 野澤 由美 就任
7. 28 エネルギー研修会（東京ガス根岸工場、田町スマエネパーク見学）
7. 31 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
- 7・8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
- 8・11月 文部科学省・環境省
平成29年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
12. 7 全国理事会（掛川市内ホテル）
12. 8 第49回 全国小中学校環境教育研究大会（静岡大会 菊川市立菊川西中学校）
会報「碧い空」第54号 研究紀要第49号

12. 9 第21回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
平成30. 2. 13 第53回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中野区立鷺宮小学校）
- 平成30. 6. 14 平成30年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
7. 27 エネルギー研修会（東京ガス新宿地域冷暖房センター見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（TKP新宿カンファレンスセンター）
8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
10. 27～28 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2018（協力）
11. 29 全国理事会（府中市内）
11. 30 第50回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会 府中市立武蔵台小学校）
第54回 東京都小中学校環境教育研究発表会
会報「碧い空」第55号 研究紀要第50号
12. 8 第22回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
12・1月 環境省 平成30年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
平成31. 2. 23 平成30年度 水産多面的機能発揮対策シンポジウム（協力）
（全国漁業協同組合連合会、全国内水面漁業協同組合連合会）
-

- 令和元. 6. 7 平成31年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会
全国理事会（東京都杉並区立浜田山小学校）
第二十六代会長 藤森 克彦 就任
7. 26 エネルギー研修会（東京ガス豊洲スマートエネルギーセンター見学）
8～2月 環境省 平成31年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
8. 8 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2019火力編（協力）
10. 26～27 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2019水力編（協力）
11. 21 全国理事会（富里市内ホテル）
11. 22 第51回 全国小中学校環境教育研究大会（千葉大会 富里市立根木名小学校）
会報「碧い空」第56号 研究紀要第51号
12. 7 第23回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
令和2. 2. 7 第55回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都町田市立南成瀬小学校）
- 令和2. 6月 令和2年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会
（新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催）
6月 第24回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール 中止
7月 エネルギー研修会 中止
9～3月 環境省 令和2年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
令和3. 2. 26 全国理事会（書面開催）
第52回 全国小中学校環境教育研究大会
第56回 東京都小中学校環境教育研究発表会
オンライン開催（録画配信・期間限定録画配信）
会報「碧い空」第57号 研究紀要第52号
-

- 令和3. 6月 令和3年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会
(新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催)
- 9～3月 環境省 令和3年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修 (協力)
10. 30 高尾山自然観察会 (東京都八王子市高尾山)
11. 19 全国理事会 (書面開催)
第53回 全国小中学校環境教育研究大会
第57回 東京都小中学校環境教育研究発表会
オンライン開催 (録画配信・期間限定録画配信)
会報「碧い空」第58号 研究紀要第53号
11. 20 リサイクル研修会 (協力)
(主催：スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・日本缶詰びん詰レトルト食品協会・教育家庭新聞社)
11. 27 第24回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 令和4. 6月 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会
(新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催)
8. 2 リサイクル研修会 (協力)
(主催：スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・日本缶詰びん詰レトルト食品協会・教育家庭新聞社)
8. 5 御岳山自然観察会
- 9～3月 環境省 令和4年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修 (協力)
11. 28 第25回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 令和5. 1. 28 全国理事会 (書面開催)
第54回 全国小中学校環境教育研究大会
第58回 東京都小中学校環境教育研究発表会
オンライン開催 (録画配信・期間限定録画配信)
会報「碧い空」第59号 研究紀要第54号
-
- 令和5. 6月 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会 (書面開催)
第二十七代会長 関口 寿也 就任
8. 4 御岳山自然観察会
8. 8 リサイクル研修会 (協力)
(主催：スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・日本缶詰びん詰レトルト食品協会・教育家庭新聞社)
- 9～3月 環境省 令和5年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修 (協力)
- 令和6. 1. 13 第26回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
1. 26 第55回 全国小中学校環境教育研究大会 (東京大会 エコルとごし)
第59回 東京都小中学校環境教育研究発表会
対面・オンライン同時開催 (オンライン中継・期間限定録画配信)
会報「碧い空」第60号 研究紀要第55号

大会宣言

環境教育は、人類を含めた地球上の生物全体にかかわる課題である。近年の地球温暖化等の環境問題は、自然の生態系に変化を与えるほど深刻な事態となっている。個人や社会全体がこれらの課題解決に早急に取り組むことで、持続可能な社会づくりを図らなくてはならない。環境教育はこの課題解決を図るための重要な学びであり、この地球上に生物が生存・繁栄を続けるために必要な教育である。

ここに、第55回全国小中学校環境教育研究大会、第59回東京都小中学校環境教育研究発表会を開催し、次世代を担う児童・生徒の環境にかかわる教育の在り方を追求するとともに、本大会に結集された総意をもって次の決意を表明し、その実現を期す。

- 一 環境教育は、地球的視野に立ち、地域に根ざした活動を通して生涯にわたる学びとして推進する。
- 一 環境教育は、自然を愛護すると共に、環境保全意識や環境倫理観、豊かな人間性を育む。
- 一 環境教育は、環境に対する正しい知識や、課題解決に取り組む能力を育成し、持続可能な社会づくりのための人材を育成する。
- 一 環境教育の小中学校での指導は、各教科や総合的な学習の時間、特別活動などすべての学びを通して実践し、指導を充実させる。

以上、宣言する。

令和6年1月26日

第55回全国小中学校環境教育研究大会

第59回東京都小中学校環境教育研究発表会

21世紀「環境の世紀」への提言

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

—環境教育で育む学力と環境保全意識—

令和5年度

第55回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会）

第59回 東京都小中学校環境教育研究発表会

研究紀要

令和6年1月26日 発行

発行 全国小中学校環境教育研究会
会長 關口 寿也

編集 研究部長 鈴木 元
事務局 東京都世田谷区立城山小学校
校長 佐藤 弘典

東京都世田谷区梅丘2-1-11

TEL 03-3429-2062

印刷所 (株)東京巧版社

TEL 03-3881-4173



全国小中学校環境教育研究会
東京都小中学校環境教育研究会